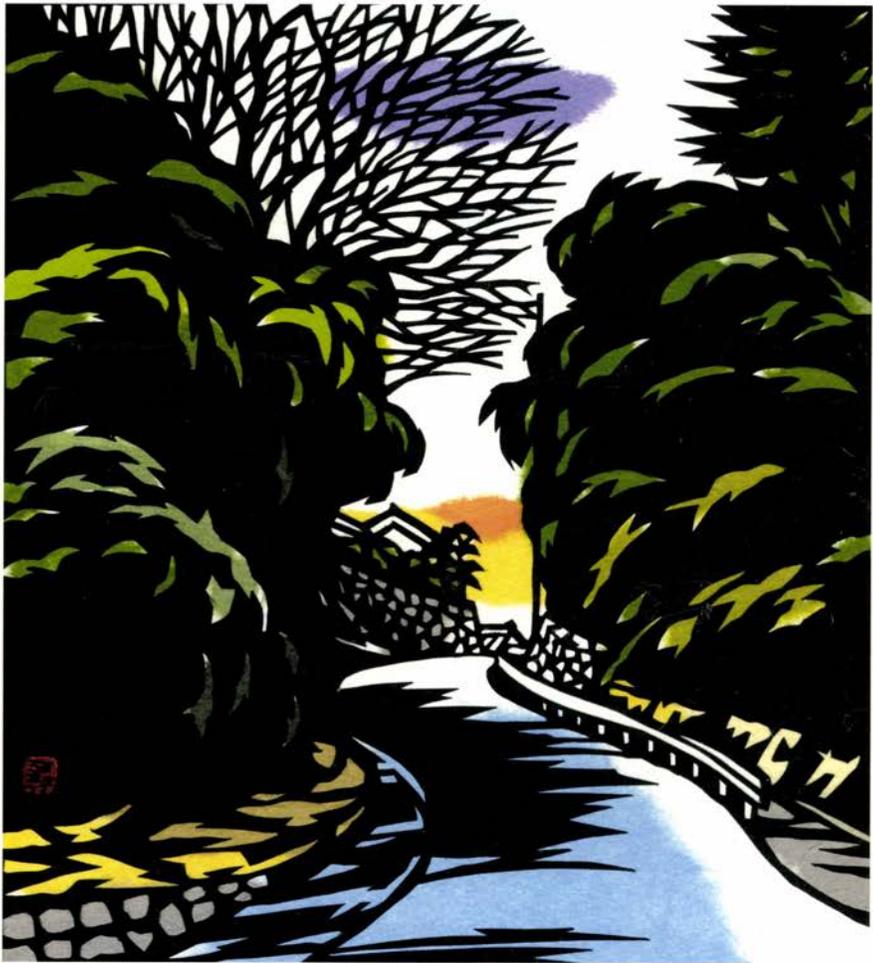


# 川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可  
平成十二年十二月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷一〇〇三号



日川協加盟

No. 1003

十二月号

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。  
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

☎530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : [bikenart@wonder.ocn.ne.jp](mailto:bikenart@wonder.ocn.ne.jp)

## アレグロモデラート

小島 蘭 幸

麻生霞乃先生に私は一度だけお会いした事があります。山内静水先生と清水白柳先生の推薦で同人になったばかりの私は、昭和四十二年七月、路郎忌句会に出席したのです。霞乃先生は課題「聖書」の選者です。霞乃先生に私の作品を見ていただける、直接披露が聞ける、それだけでも幸せだったのを覚えています。先生の軸吟です。

ゲッセマネの園のなやみを続けて来 霞乃

静水先生から霞乃先生の色紙をいただいたのは路郎忌句会から帰って暫くしてからでした。生駒の自宅を訪問して私のために書いていただいたということでした。

秋ふかし虫のアレグロモデラート 霞乃

私は嬉しくて嬉しくて、すぐに御礼状を書きまし

た。暫くして霞乃先生からおハガキが届いたのです。今から四十三年前のことです。

……御丁寧な御礼状いたみ入ります、これからが作句のシーズンでございます。せいぜい腕によりをかけてよい句をお作り下さい、あなたの「値切ったら僕アルバイトですと言う」のお作には感心しました。何の修飾もない句ですがアルバイトらしさが出ています。体験の句の力強さを痛感しています……

麻生霞乃

川柳雑誌改題第二号川柳塔十一月号

近詠 麻生 霞乃

事務整理

書類焼く火は落城の火とも見ゆ

この作品を拝見して川柳塔が大好きになった私ですが、この一件でますます好きになりました。

秋が来て、虫たちが鳴き始めると、一人静かに霞乃先生を思い出しています。そして音楽用語のアレグロとモデラートには「しっかりと周りを見て力強く歩みなさい」という先生のメッセージが込められていたんだと思う今日この頃です。



座右の句

院長があかん言うてるドイツ語で

(豆 秋)

私の句

夕焼けがやっぱり似合う赤とんぼ

長井善純

## 川柳塔 十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「伊丹坂」

■巻頭言 アレグロモデラート	小島 蘭 幸	(1)
八百号から一千号へ	前 たもつ	(2)
川柳塔 (同人吟)	小島 蘭 幸 選	(4)
自選集		(48)
温故知新		(51)
川柳塔の川柳讃歌 (72)	木津川 計	(52)
麻生路郎句抄		(53)
水煙抄	西出 楓 楽 選	(54)
誹風柳多留 一篇研究 64		(76)
小島 蘭 幸 新 主 幹 に 聞 く		(78)
愛染帖	新 家 完 司 選	(80)
檸檬抄「黒い」	三宅 保 州・山本 希 久 子 共 選	(84)
国民文化祭・おかやま2010		(87)

### 八百号から一千号へ

前 たもつ

私の川柳の始まりは、「川柳塔八〇〇号記念大会」と記憶に刻んできた。八〇〇号大会の印象は余りにも強かったからである。

平成六年一月十六日、なにわ会館金剛全室をぎっしり埋め尽した盛況に圧倒された。川柳家の名前は誰も知らなかったたので、選者の記憶はないが、入選した句の中の「六十年のジャンプを笑う昼の月」は今も覚えてる。

「川柳塔」を開いてみると、実際は平成五年から「川柳ねやがわ」に、本社句会にはその年の八月から出席している。

ともかくも八〇〇号の感動と共に、私の川柳活動が本格的に始まったということに間違いない。そして、曲りなりにも十七年近く川柳を続けて来て、幸せにも一〇〇〇号川柳大会に出会ったのである。

今回の一〇〇〇号の充実は八〇〇号の比ではない。確かに参加者は八〇〇号の四百二十余名にくらべ、百名近く多く、椅子だけの同じ金剛の間をいっぱいにしたことが一番の成果である。

私はこれまで第一回川柳塔まつりから、そ

一路集 「驚く」……………鶴田遠野選…(88)  
「楽観」……………小沢淳選…(88)  
「アツプ」……………岸本孝子選…(89)

初歩教室 「すんなり」……………鈴木公弘…(90)  
秀句鑑賞 「同人吟」……………山田耕治…(92)  
「水煙抄」……………柿花和夫…(94)

■句集鑑賞 河内天笑川柳句集「星のたわごと」……………(95)  
同人吟……………  
水煙抄……………

不朽洞会員 宮口笛生さんを悼む……………天根夢草・新家完司・江見見清  
追悼 澤田和重さん……………中原比呂志…(98)

中村れんげさんありがとう……………川上大輪…(100)

■エッセー 笑う門には福来たる……………奥田みつ子…(101)

■エッセー 束……………高瀬霜石…(102)

十一月本社句会……………夏目一粹…(103)

各地柳壇(佳句地十選/小川注湖)……………(104)

十二月各地句会案内……………(108)

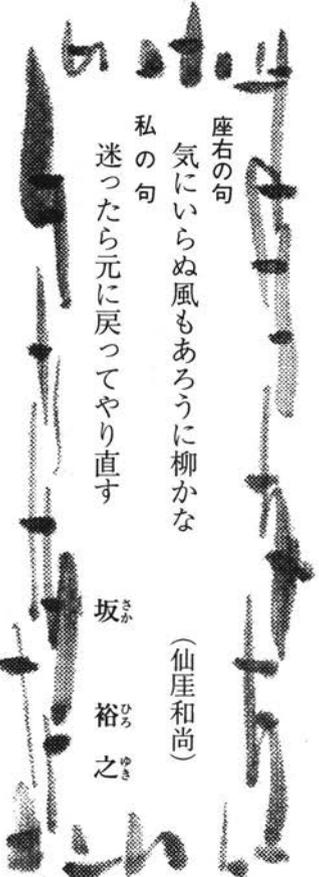
柳界展望……………(122)

■編集後記(ひとこと/波多野五菜庵)……………朱夏・富美子…(124)

座右の句……………(128)

私の句……………

迷つたら元に戻つてやり直す  
坂か 裕ひろ之ゆき  
(仙厓和尚)



他の記念行事の計画にもかかわってきたが、今回の大会の取り組みは凄かった。参加者五百人を目標に、「路郎読本」の編集をめざし、役員、常任理事、同人誌友が一つになった熱意が、「川柳雑誌・川柳塔通巻一〇〇号川柳大会」を立派に成しとげたのである。私に八〇〇号から一〇〇〇号のあゆみの中で、レ命ある一句が残せたかと問われると一言もない。しかし、九月号の「通巻一〇〇〇号のあゆみ」を参考に、十六回を数える川柳塔まつり創立75周年記念大会、麻生路郎・葎乃句碑建立記念大会などの行事を、「川柳塔」特集号で読み返し、私なりに参加できたことに自己満足しながら、改めて一〇〇〇号大会の余韻に浸っている。

今年になって私は持病が慢性化し、癌の手術をしたこともあって、一〇〇〇号を節目に川柳教室や添削、句会の活動を減らして、日曜日は原則として教会で聖書を聞くことを心に決めていた。今頃その歳で教会かと思われながらも知れないが、二十年程前から教会に顔を出してきた。

「教会でまだキリストに会ってない」という神を意識した句をつくり、平成六年四月、NHK川柳教室で薫風先生に丸をもらっている。八百号から一千号の歩みと共に信仰の道にも辿りついたということである。



小島蘭幸選

弘前市 高瀬霜石

金のない人にはこないいい話

閉店セール笑顔がどこかきこちない

冷飯を食えば背骨が太くなる

お経南無南無字幕スーパード欲しくなる

命日を忘れ誕生日を忘れ

ゲームセット鬼は仏の顔になる

三田市 北野哲男

作り手の顔も一緒に買う野菜

神仏もわたしも孫も餅が好き

アポなしで時どき母が夢に出る

仏壇にちよつと写真を置いてみる

蛇行して幅を拡げて来た河だ

同じ値でノンアルコール焼肉屋

和歌山市 木本朱夏

百日草百日咲いて律儀なり

薊咲く凜と悪女の風情して

逢いたいと書けばポキポキ折れる芯

この人も逝ってしまった句集読む  
釘を抜くすこしわたしに似て頑固  
白髪一本見つけた秋の手鏡に

大阪市 古今堂 蕉子

柔らかい心で孫の話聞く

水割りからお湯わり秋も深まる

遠慮なく長生きします君のため

非常ベル鳴ってる耳に頭にも

喧嘩からチューまでしゃべる女孫

灰になるまで女ですとは嘘でしょう

枚方市 小林わこ

一病と付き合う頼もしい薬

強ければいいというではない躰

フライパンの蛤とても強情で

どうしても白髪一本染まらない

天国に向かう足腰鍛えてる

頑なになって逃げ道見つからぬ

吹田市 山本 希久子

本日は晴天思いきり歩く  
私を中心にコンパスを回す  
恋人でないが親愛なるあなた  
私のウィークポイント泣きぼくろ  
葉草の香にゆつくりと身をゆだね  
時は残酷七十五年またたく間

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

教訓が沢山あつて生きにくい  
熟年の色かと柿の彩を着る  
秋深くおとなのためのかくれんぼ  
コスモスの群れから帰れないわたし  
自転車で秋といっぱい逢うて来た  
貝殻のボタンのシャツが暖かい

愛知県 早川 遯行

年金日まで糞虫になつて耐え  
失言を胸のリボンが許さない  
まッいいか賞味期限を三日過ぎ  
気の利いた小鉢が料理旨くする  
生き甲斐のように吠えつく犬がいる  
若者が眠りたくなるシルバー席

和歌山市 坂部 紀久子

自由を唱え逮捕をされる国がある  
銃口が向いてる今は言えませぬ  
ペンとメモ格好つけている机

ヒントばかり追つて自分を見失う  
家ならば今頃昼寝してる頃  
九回に神が仕組んでいたドラマ

鳥取市 鈴木 公弘

ひな壇に並んだだけのご招待  
読経する音痴が一人いて困る  
落盤事故の救出チリに乾杯を  
木洩れ日に集まる少し老けたひと  
舗装してそんなに雨が嫌なのか  
刈り終えた落穂は鳥に差し上げる

西宮市 秋元 てる

落葉舞う力一ぱい生き抜いた  
その程度のものだったのかあの涙  
御馳走さま自分に言うて箸洗う  
補聴器よ後れて笑う間の悪さ  
男手が欲しい男はいらないが  
川柳がくらしの横にいてくれた

西宮市 西口 いわゑ

忙しさをゆとりに変える萩の道  
響くもの求める道は果てしない  
お茶湯も姑の好みに濃くいれる  
彼岸花もわたしも天が大好きだ  
彼岸花浮世に未練などない姿  
三十三人にエール送った世界の目

枚方市 伊達郁夫

愛という水をやらねば砂になる

人間の資格を問うている鼠

過去を掘る埋蔵金を掘るように

呑み足らぬ顔を無視して飯が出る

世渡りのうまい男の借用書

褒められてピエロの椅子にまた座る

鳥取市 岸本宏章

ありがたい飲みたいたいときに水が出る

スマートに使えば生きた金になる

妻の留守妻への電話ばかりある

よく動く孫の子守りはもうできぬ

老人を見張るケイタイ持たされる

るんるんの男やめがいなくなる

八尾市 高杉千歩

千号へ集う五百を越す笑顔

正論を吐いたが時代錯誤かも

ロボットのほうが上手な阿波踊り

日によって味は違うが星三つ

プロッコリアアメリカ産へ浮気する

住所録奥さんの名が増えていく

東かがわ市 清川玲子

いいニュース悪いニュースも聞く茶の間

あらためて日本人だと思ってお茶

積んである本が眠りをさそい出す

お静かに今は金魚の昼寝どき

時たまのひとりがうれし同居して

大勢のうどん博士の居るさぬき

米子市 白根ふみ

欲という難儀を連れて歩いてる

炎天に馴染んでくれた百日紅

赤トンボ仏迎えに動きだす

折々を越えて味わい深くなる

方言が馴染む頃には劇おわる

次出会うところはきつと天界だ

檀原市 居谷真理子

歳月ががんじがらめにして解いて

あの日から阿修羅の哀をわが哀に

真実を知っているのは足の裏

日記には君の笑顔をとじこめる

本物の武器でないからすぐ飽きる

毒ガスをブスリブスリと出す孤独

尼崎市 春城年代

曼珠沙華の手拍子受けて兵の墓

とり繕う老いの心をさむく見る

すすき野に身をおき引き際を思う

半信半疑の来世なれど星月夜

可も不可もなく短い秋の中に佇つ

止まったままの時計がわが家にひとつある

香芝市 大内朝子

ひらげごま楽しく生きてゆく扉

煩惱が静かに燃える秋の章

自分史の悔い振り出しを恋しがる

年輪がわたしの姿変えてゆく

点滅の炎を抱いておんななり

望郷の思いじんじん夕茜

富田林市 中井アキ

次世代へ荒れ野にしてはならぬ里

心の壁に触れに來たのは冬の蝶

好きだから無視を続けている昭和

欲はまだ老妻の手にあり薄化粧

折り紙遊び無心に戻る子に戻る

靴紐が解けて想い出が絡む

米子市 吉田陽子

皇帝ダリアようこそ庭へ咲き給う

ドライブフラワー愛を受けたはいつの日か

意志のない口ポットきつと鬱になる

仲直りするのにお金ちよつといる

絵手紙を描いて励ます子が一人

のんびり屋時代遅れがつきまとう

大阪市 井丸昌紀

約束を守らぬ女に惚れている

手加減をできない亡父の深い愛

OKのサインうっかり見逃した

傾いているのは僕の方だった

総選挙次の狙いは村木女史

その内に秋刀魚切り身で買うはめに

大阪市 升成好

老眼にルーベ重ねる本の虫

顔つきが変った決意したらしい

見る人がちゃんと見ていた努力賞

潔く捨てれば楽になるものを

価値観を問わない人の輪がぬくい

アルバムに母ぼつちやりとミス昭和

大阪市 谷口義

口笛を吹く戸籍筆頭者

木守柿振込先はどこですか

妹の年金聞いたことがない

六人掛けに五人しか坐っていない

四十九日までの御布施を聞いてくる

スケールが小さくなった悩みごと

京都市 高島啓子

知っているはずと決められては困る

駐車場にきちんと入れてある車

結婚指輪している男得意そう

中年がぱりつとすると俗になる

エナメルの靴の男を信じない

火の通ったものだけにするバイキング

檀原市 安土理恵

またひとつ毀れはじめている背骨  
明日のこと明日にしようよなめこ汁  
折返すあたりで妙なめぐり逢い  
女郎花手折り一人を切り捨てる  
ひと眠りするたび消えている一つ  
葉脈をなぞりひとつを確かめる

高石市 浅野房子

やっと来た秋だゆつくりしておくれ  
生きている証し悩みの二つ三つ  
一進一退調子良い日も悪い日も  
手間はばかりかかる献立もう止めた  
久し振りアイシャドーなど出して見る  
甲斐性も無いのにお家建てはった

出雲市 石倉 芙佐子

ほろほろ鳥がほろほろと鳴く秋になる  
だんだんと冬の蟋蟀めく私  
あれから幾年貴方も私も傘寿ですね  
紫の帯メいまだ箱の中  
転んだ傷治らないのにまた転ぶ  
青い空神話の海は美しい

神戸市 山崎 武彦

新しい出会いを待っている綿毛  
さよならと言って生き方石に問う  
パンの屑こぼして父は国憂う

身銭切る鬼にもあった人間味  
ひと休みすればとカルテ呟いた  
どこまでも続く煩惱鈴鳴らす

大阪市 吉村 一風

無器用が好きだとうまいことを言う  
死ぬまでは生きているよと笑わせる  
妻の後押しあつて楽しい趣味かじる  
妻いてる安心をした水の音  
一病という相棒が守り神  
ほれごらん笑えば笑う青い空

奈良市 米田 恭昌

とばされた北の大地に魅せられる  
就活に茶断ちの祖母の応援歌  
何でやろ福耳もつてこの暮し  
合掌のまぶたに凜とれんげ草(れんげさん逝去 2句)  
嬰鏢と浄土見渡すれんげさん  
先輩が逝き温和な笑顔消えた秋(苗生さん逝く)

八尾市 内海 幸生

善人の顔をしたがる悪い癖  
色即是空分かった顔をしておおか  
鍋に箸突っ込みそうになるひとり  
亡母に似た人を見た夜の童唄  
温厚の顔を選んで負けている  
医者を変え薬も替えてみたものの

熊本市 永田 俊子

紙飛行機ババが本気で飛ばして

私の記憶連れて汝が引いてゆく

それからは何も知らない花時計

喝のひと声まだ聞きたいと言う野球

神の手を借りて救う地底の命

熊本市 高野 宵草

お互いが空気の仲でも出る叱言

貧しさで満足出来る修業する

コンサートから帰る歩調が乗るマーチ

手伝えば妻の料理が美味くなる

惚けまいぞ吾れに苦吟の予防薬

熊本県 岩切 康子

お参りの土産御利益有りそうだ

真の黄泉覗いた気になる噴火底

まだ早い敬老鉢を戴いた

夫の希望叶えて私すつきりす

発表会近づき声が慌てだす

札幌市 小沢 淳

猿知恵の悲しさ尻尾見えている

四季有情こんな大地をいとおしむ

妻献体止めるすべなく訳もなく

文化とはアグリカルチャー畑作り

金券シヨップ大阪までも軽く飛べ

札幌市 三浦 強一

楢山は元気なうちに見ておこ

焼き芋が好きでころころ笑う妻

ノーベル賞北のキャンパス沸騰す

仕分けから頭脳予算は削られぬ

少しだけ覗いて見たい余命表

砂川市 大橋 政良

影法師僕とおんなじ動きする

すり抜けた髪の匂いが若かった

返事だけ元気でいいが空っぽだ

吊り革を二本掴んでいる爺

迷い猫どこの生れか目が青い

黒石市 相馬 一花

店頭のリングゴお客に媚を売る

道草を食って楽しむ子の笑顔

ガムを噛みハンドル握る慎重派

覗いても逮捕されない万華鏡

鈴の音もラジオもクマは好きになる

黒石市 佐藤 古拙

亡母もした打水をして店開ける

根っからの商い好きで水を打つ

読経のリズムをつける咳払い

秒針の動きにも似た亡母のこと

透明な心で虎落笛を聴く

平川市 小寺花峯

卓袱台を囲んだ昭和丸く生き  
スーパ―残暑僕の頭は蜃気楼  
熱爛に夜がゆつくり通過する  
散歩するコースに何故か酒販機が  
一病と宜しくやって酒を酌む

弘前市 高橋岳水

年輪に詰めた等身大のメモ  
閉所嫌いでCTを撮られない  
家計簿に男の沽券浮いて出る  
人誹る言葉は持たぬ花の種子  
手を抜くと今の自分が嘘になる

弘前市 岡本花匠

乳母の傘きずなを太く耐えている  
永らえて児どもに戻る紙兜  
明日生さるいのちの笑顔模索する  
がんに臥す妻を偲んで箸二膳  
一輪挿し花の笑顔が和ませる

弘前市 富士慕情

日が昇る時間になると目が覚める  
背の立つ深さで子らを遊ばせる  
警報が安堵に変わる水の嵩  
打てば直ぐ折れる古釘だとしても  
紋付を着たから遺影撮っておく

弘前市 須郷井蛙

三食にオヤツ幸せな日が続く  
迷つても苦にはならない一人旅  
妻の轡打あつて今日名文句  
子のオモチヤ今は曾孫にも生かされて  
生涯の悪夢に残る欠いた義理

弘前市 今愁女

猛暑耐えた褒美か美しき十五夜さん  
めでたしは傘寿と喜寿の金婚譜  
嗜好品だと止める気はないスモーカー  
旅みやげ嫌煙船とすることに  
政治家は肅肅なんて言うけれど

青森県 松山芳生

ホテルホテル宿る過疎地の灯が温い  
擦れちがうあの世この世の散歩道  
わらべ歌 右脳左脳を揺りおこす  
蒟蒻のかたさで靡く人ばかり  
逍遙の森で慈顔にまた出会う

さいたま市 星野育子

ひと雨が夏から秋に塗り替える  
ケイタイを手にお辞儀するビジネスマン  
デパートのBGMにある知らせ  
世間の常識地検の非常識  
名医者も妻が倒れて家事見習い

八王子市 播本充子

たまにはと銀座のランチ誘い合う

今日は何の日きっちりゴミを出す

朝一の仕事迷惑メール消す

義母さんは我が家の宝ですからネ

夕焼けの里に有害ゴミあふれ

東京都 清原悦子

冬至柚子ひとつ忍ばせ荷を送る

クリスマスソング師走の街に酔う

脱ぎ捨てて安らいでいる古木立

人生の余白糸を編むことも

散歩道紅葉一枚ポケットに

東京都 岸野あやめ

富士山が好きと中国小富豪

酒の席美人酔うほど意地わるい

興味ない地デジ買わねば夜が明けぬ

やりくりは上手よ年金で独居

判押した方が悪いと叱られた

横浜市 菊地政勝

長生きの家系で貯金くずせない

デジタルのテンポに遅れついてゆく

功成つて脚色されるエピソード

最後まで愛を信じた馬鹿で良い

抑止力あるかもしれぬ置き薬

横浜市 小野句多留

継続が中途半端に喝を入れ

大筒の花火に三河の男子たる

主義主張微妙に変えて逃げ回る

自治会が孤独にさせぬ高齢者

町造り老人ホーム視野に入れ

富山市 島ひかる

サッカーを観るとブゼラまだ響く

還暦を過ぎると加速する時間

この人が古稀よと水着言い触らす

今日もはな今日も花だと生きている

剪定の録迷っている若木

静岡県 藺田猿杏

秋晴にローンも終り高枕

値上げする度にタバコをやめてみる

年金を出し合って買うランドセル

来賓が帰り庶民の運動会

着納めの浴衣に下駄も弾んでる

可児市 板山まみ子

獄中のノーベル賞に怒る国

上方の漫才みたい二人連れ

強がりも衰えてきて並の人

七十の五体満足当てにされ

雨降り楽しみ録画見てお茶に

犬山市 関 本 かつ子

じいちゃんもいいよ ばあちゃん一緒なら

酒の匂に糖尿病が抜けている

退屈は宣伝にない豪華船

ワンカップ取り替え終る墓参り

念押され多分に変わる記憶力

犬山市 金 子 美千代

四姉妹の要になつてゐる老母

幸せな母百までは生きたいと

消費期限に追つかけてゐるひとり

山頂で抹茶を点てる粋な会

再会の人人人の塔まつり

犬山市 吉 田 幸 子

あの日からやる気目覚めたお世話役

後ろ楯あつてへつぷり腰が立ち

一瞬のひらめき逃がさないメモ紙

外来種あなたは何処で生まれたの

私の血を吸つたにつつき蚊を逃がし

京都市 藤 井 文 代

記録的猛暑塗り替えもうごめん

散らばつた記憶たぐつて惚け防止

ハードル下げ忘れた記憶たどらない

からつぽの空気の中は癒される

訴える尺度が甘くなつてきた

京都市 榎 本 宏 子

橋の下たき火の中にある秩序

欲張つた福が皿からあふれ出す

違い知る屋根の傾斜も人生も

若いママエコに傾く子の未来

頭振りマイナス志向振り払う

京都市 坪 井 孝 一

ライバルに気品で勝てぬ残念さ

古路をゆくあの野仏に逢いたくて

迂回路が今頃判る古い地図

どこかで見た思い出せずに旅終る

あつさりとと言えるデュエツト君が好き

京都市 西 村 益 子

手間かけた料理おいしく食べている

罰あたると言われることはしたくない

甘いもの好き放題ではや卒業

ノンアルコール飲みつ振りも板につき

ピンチには顔を揃える家族です

京都市 三 宅 満 子

価値観の違う物差しもてあます

他人から見ればガラクタクコレクシオン

飽きもせず三食食べて越えた夏

唱歌ならマイク離さぬおばあちゃん

息抜きのカフェを目当てに一万歩

長岡京市 山田 葉子

義理欠いて心のネジを緩めてる  
いつのまにか監督するひとがいない  
かけらには暗号ひとつずつ隠れ  
おちこむと声のききたい友がいる  
前を行く兎が昼寝してくれぬ

大阪市 鶴田 遠野

悲しみ捨てに辿り着いたら故郷の駅  
内の人に内緒のハート抱いている  
目力で素敵な運を引き寄せる  
人生迷路助けられてた回り道  
狼煙だけは男の意地で上げておく

大阪市 吉内 タカ子

金木犀かおりの迎え退院日  
認知症夫婦ですもの思えない  
包帯の足で詫びてる介護妻  
身の丈の笑顔作りは難しい  
外交にはらはらすよ議員さん

大阪市 大川 桃花

猛暑にも負けず体重ふえている  
役目終え金魚育てている火鉢  
お婆ちゃんのハミング歌と限らない  
反抗期母はふんわり受け止める  
嫁さんが来てから老いも朝はパン

大阪市 寺井 弘子

幸せを演じて母の深い皺  
美しい嘘で終った過去の恋  
秋桜も私も揺れて風の中  
新開きて土付き野菜里を発つ  
妻の愚痴背中堪えている孤独

大阪市 津村 志華子

独り身は気楽でよいと言うておく  
転びなや無理をしなやと娘のデンワ  
泣き笑いわたしのドラマまだ続く  
青い空今日も命を戴いた  
姉さんの形見を着ると瓜ふたつ

大阪市 山本 加お里

名ばかりのポストもらって無理してる  
山登り手頃な杖に助けられ  
便利よい町で手頃な飯住まい  
はつきりと答える母は認知症  
夕刊の届くあたりで主婦の顔

大阪市 榎本 日の出

神様は努力した子の絵馬捜す  
三億円当たればけんかするだろう  
若者の町で拾ってきた言葉  
ゆく先は決っていると慌てない  
火傷でもしないと脳がよく眠る

大阪市 平 嶋 美智子

刈り後にひこばえ青く千枚田

牛車の轍のんびりしてた頃の里

頭の中からつばになり早寝する

ライバルに間のびした顔見せられぬ

家に居る時は心身隙だらけ

大阪市 澤 田 定 子

今は一番若くて美人クラス会

世話役も主役顔して運動会

資源ない日本外交もどかしい

織立つトランクルーム無縁の身

ゆつくりとした所作に見る育ち良さ

大阪市 江島谷 勝 弘

宇宙を考えると気が遠くなる

御先祖の調査頼めば殿だった

来年も猛暑に耐えるつもりです

魔除けです自転車保険掛けている

せめて二等三等ぐらい当りたい

大阪市 奥 村 五 月

反抗期ベツトにだけは逆らわず

遠慮せずオレが俺がの三次会

先の客話題の種に美容院

幸せと掴んだワラが沈みそう

動物に笑われそうな子にいじめ

大阪市 中 村 叡 子

学校の奉安殿が懐かしい

長寿者が殖えて淋しい世となりぬ

振り込みとなりて男の価値をさげ

雨の中ゴルフギャラリーぞろぞろと

気候変動大きく世界変わりゆく

大阪市 板 東 倫 子

吊橋を渡れば亡母が待っている

百寿翁が教育勅語空んじる

有難や不況に新米よく実る

へそくりが減って体重増える秋

年金も折半さばさばした別れ

大阪市 福 岡 末 吉

ごまをする術に長けての孤独感

ほどほどの夢も満たせぬ菌痒いさ

梁と棟互いにかばい信じ合う

小憎らし踊らされてる振りの妻

円やかな時を刻みつ妻の笑み

大阪市 伏 見 雅 明

寝言でもかあちゃんほんによく喋り

怖い夢みるのも生きている証し

こんなとこ誰か良心捨ててある

年金に夫婦のきずな強くなる

たこ焼きを分別くさい顔で食い

大阪市 榎本舞夢

やんわりと野心を包む京言葉  
逝くまでに時間をかけて遊びます  
バラの花渡すとつさに手を握る  
大変だ両手に子供背に赤子  
最後には伝えるつもり鬼になる

大阪市 岩崎玲子

もみじにも一葉ずつの自己主張  
懸崖は皆の笑顔集めてる  
コスモスの波ベットにし眠りたい  
ススキ摘み月との会話楽しみに  
ふるさとの父母が呼んでる彼岸花

大阪市 松尾柳右子

熟年に介護保険が追って来る  
亡母の事思うと空を仰いでる  
スケジュール多くて歳は重ねない  
慈雨あつて樹木喜ぶ我も良し  
秋空が悩み笑つて取つて行く

大阪市 小谷集一

聞き役に回ると会話弾みだす  
身の丈に歩幅を合せ自分流  
勞られ過ぎると老いが加速する  
なるようになってそこそ良い暮らし  
ありがとうさよならだけはきつと言う

大阪市 川端一步

師の百句写して重いなと思う  
人間を襲うた熊が呆けはじめ  
水ばかり飲んで元気の菊人形  
看護師のストレスどこへ捨てに行く  
ひさし死す知つて埃の本を繰る

大阪市 近藤正

一〇〇〇号記念大会若い呼名が冴えわたる  
めぐり読み路郎読本ひと眠り  
氷河期の就活みのる三年目  
地底から生還をして湧く歓喜  
アフガンにオバマが降らす弾の雨

大阪市 岩崎公誠

自己都合深い詮索などしない  
黒鉛を舐めて私見を泳がせる  
ではではと浅いお辞儀をして別れ  
淡淡と生きて笑顔が美しい  
自分史の天辺あたりに墨を塗り

大阪市 小泉ひさ乃

贅沢を宝石箱のように盛り  
平穩を願う女の台所  
自分の旬見極め出来る事をする  
三文の徳と朝活する戦士  
一〇〇〇号へ会いたい人に会いに行く

大阪市 小糸 昭子

愛されるキャラになれよと猫に言い  
チリ落盤無事帰還なら皆英雄  
都会にも蜜蜂巣作りして励む  
この頃の語調肅々耳につき  
船長の釈放海保悔しかろ

大阪市 原田 すみ子

家族写真いのちがリレーされてゆく  
水と安全タダの神話も遠くなり  
進むのも戻るも自由曼珠沙華  
験かつきかたづけ過ぎはやめておく  
木洩れ日と遊ぶこころの散歩道

大阪市 田浦 實

竹林が風とデュエット癒やされる  
ゆっくりが三日続くと怖くなる  
ゴキブリより弱気の虫が厄介だ  
シヨパン聴き心が和む秋の夜  
間伐しない山を豪雨が狙い撃つ

大阪市 坂 裕之

今日もまた頭を下げる種を撒く  
まず一步踏み出す勇氣青い空  
言い出せぬ感謝の思い膳に盛る  
万物の宿命時間戻せない  
どんぐりが思い思いに前へ行く

大阪市 熊代 菜月

お見舞の嬉しい日もあり人もあり  
心配もあるけど嬉しい退院日  
テレビ見て一人で笑うことになれ  
気がつけばもう八十を越えていた  
病院の壁がみていたメロドラマ

大阪市 津守 なぎさ

彼岸花見つけられない旅の空  
紅葉と温泉プラン虫の声  
千号の記念でつどう三姉妹  
お隣も誘う元氣な敬老会  
渋滞も楽し宿がまっている

大阪市 神夏 磯典子

大臣の名覚えかけたらすく忘れ  
政党の色が多くてまだ解けぬ  
逃げ道を小さな虫に教えられ  
葉の裏で虫は明日を考える  
苦しみを知っているのは影法師

大阪狭山市 矢野 梓

来客に見える所だけ大掃除  
持ち味はひよっと出てくる国訛り  
来年も着られますよう赤い服  
お互いに歩幅合わせて五十年  
はいポーズズームアップが嫌な歳

和泉市 横山捷也

宅配のおかずに独居まだ慣れぬ

古希過ぎた歩幅を少しゆるめよう

暗証番号忘れてしまいそうな不安

迷うことまだ残ってる老い支度

外食に飽きて独り身イモふかす

泉佐野市 山本蛙城

もう歳だ言いつつようけ食べてはる

円高が続くがヒマもカネもない

自惚れを消すため下向いて歩く

自転車のおなごぶつかるように来る

よう出来た人だ横には座れない

茨木市 井上森生

ギツクリが胸に来たかの大暴れ(闘病中 5句)

激痛禍まるで地獄の胸異変(水胸症?)

正体不明のち揺さぶる病魔の手

大往生いや阿闍梨の苦行かも

元気とは今日のからだと明日の夢

茨木市 藤井正雄

寝冷えするよと母の声夢の中

カップルのその後は知らぬ花時計

抜擢の椅子に座ってからの風

書き出しに迷う眼鏡を拭いている

狙ってた椅子若いのが来て座る

交野市 森本弘風

酷暑さえ彼岸の前に討ち死にす

トラ優勝無くなつてからのスポーツ紙

その辺でもう止めときと言う鏡

冷えた朝昨日の暑さ何処行つた

ハヤブサに積んだ七年前の技

河内長野市 井上喜醉

昭和から走り疲れて先が読め

草臥れた命を守る独り酒

痛くない腹探り合い傷がつく

嘘のない相談されて困り果て

永久に安保の魔法が解けぬ国

河内長野市 黒岩靖博

栄光の過去を引きずり疎まれる

愛してるそつと昔へブーメラン

フルタイム仕事一筋濡れ落葉

食べ歩きが趣味と婿どの宣うた

長生きをすぎ役所に忘れられ

河内長野市 坂上淳司

キリキリと痛む不思議な恋心

就活にねじり鉢巻して臨む

子ら巢立ちひっそり閑の共白髪

二人目のアルバム薄いの相場

内心はオンリーワンでいる双子

河内長野市 山岡 富美子

ニイーハオのトーン最近高すぎる

二番底薬一本が届かない

過不足のない言動が美しい

徹夜明け湯船に首が浮いている

イエスマンばかりで固め砂の城

河内長野市 水谷 正子

世界の目チリに集る救出図

神在す三十三の命無事

子供から男の顔になる祭り

ストレスもわっしょよわっしょよと振り落す

ああ不運栗めしの日に栗貰う

河内長野市 植村 喜代

毎日のようにニュースある世界

秋空へ憂さを飛ばしに出掛けたい

ショッピングカーいつの間にやら引きつれて

三分と言う泥棒に時世を感じ

人の心まで変る今と昔

岸和田市 森 元 ふみよ

孫嘆く年金目減り駄賃ない

肉屋さんベジタリアンと自嘲気味

戦中派酷暑も耐えて生き抜いて

夫婦和しメール打ってる珍風景

老老が荒野を制し腰伸す

岸和田市 土橋 房枝

ありがとう言葉に花を咲かせよう

恐怖心取り去るために思い切る

たいていの人思いがけない勇氣もつ

恋などというやっかいなものに逢う

恋愛とは孤独な二人出会うこと

岸和田市 雪本 珠子

人格が総理になると変わりだす

百歳の母に活力貰ってる

失敗をバネに人生模様替え

雨の日は優しい言葉欲しくなる

コンビニに孤独の影が二つ三つ

岸和田市 井伊 東吉

千号に見た塔友の心意気

夏物をいまだ終えぬ温暖化

教育に警鐘鳴らすノーベル賞

鹿兒島へ新幹線で日帰りも

節料理賀状予約と忙しい

岸和田市 堤 楯代

もう翔べぬ翔びたい夢はもっている

ころんだら最後とそっと歩いてる

大潮が引いてしまった祭あと

お年だけ聞かないことにしています

大丈夫命日だけは忘れない

岸和田市 原 さよ子

大切にされてもやはり家がいい  
気をほぐすためのまじない一つ持つ  
母に似た人にやさしく叱られる  
実力は同じ勝負はフアイトの差  
遊園地百円玉にきりがいい

岸和田市 岩 佐 ダン吉

一筋の道をよたよた歩いてる  
献血のテントに今はありがとう  
核のことヒト科が触れたあの日から  
優しくて君は迷ってばかりいる  
流されてなるかひとりの手を上げる

堺市 柿 花 和 夫

ただ酒は飲むなど父は酔いながら  
正確さを疎まれている万歩計  
旧友の敬語ふるさと遠くなる  
削除キー押して青春への懐古  
オブラートで包んだ叱咤通じない

堺市 加 島 由 一

唇で何も言わず黙らせる  
虫が鳴くわけを子供に教えられ  
キューピッドの射程に嫁がまだいない  
まな板の鯉が年貢を納めない  
丸木橋越えた夫婦の武勇伝

堺市 奥 時 雄

パスポート更新してのジム通い  
書きかけてあほらしくなる遺言書  
実印を預りますと妻が言う  
虫の音に涙溢れる青テント  
酔客の隣の席は空いたまま

堺市 羽 田 野 洋 介

空模様に合わせて今朝の靴選ぶ  
参考書読むほど増えてくる不安  
大風呂敷後の始末は誰がする  
くじけないまあだ白紙の明日がある  
一かけらが歴史を変える考古学

堺市 遠 山 唯 教

コスモスが揺れて小さな秋を踏む  
法律に触れぬ程度で散歩する  
少子化のふとん太鼓がおとなしい  
言いなりにならぬ高校生の孫  
期待して新内閣の顔をみる

堺市 大 隅 克 博

楽をして儲けた金は羽根がある  
ケーキより和菓子がほしいバースデイ  
グリーン車に初めて乗ったフルムーン  
二人には文字も言葉もないルール  
立食いのそばが未練の発車ベル

堺市 大久保 のん子

みどり児と一緒に笑うハヒフヘホ  
惚けもよし生きていくのが楽になる  
なら山は近い仮面を脱ぎ捨てる

薬包紙だけが私を知り尽くす

明日がある呪文のようにくり返す

堺市 荻野 像山

井戸かまど埋められ神は怒らんか  
吊橋の半ばで揺らされてしやがむ

誕生日次は分らんから祝う

起こす声とんがつて来た定年後

中毒にさせて税金吸い上げる

堺市 志田 千代

今にして兄嫁さんは偉かった

夫婦となりオカラのレシピ聞いてくる

生めや増やせ雀の子にも餌付けする

ゲゲゲのゲお墓は怖いとこだった

旅先は同室になる老夫婦

堺市 矢倉 五月

受賞者が出てサークルの大騒ぎ

澄み切った空の青さで脳洗う

アナログのテロップに負け地デジ買う

定年後夢の中までついて来る

暗闇にポツと母が待ち続け

堺市 西村 りつえ

あちこちで舌が学んだ隠し味  
肩寄せて寝た夜も今は大の字に  
躓いて気弱な息子猛者となり

笑い袋淋しい時に小出しする

小心はルールブックが離せない

堺市 宮本 かりん

口約束だけでは何か物足らぬ

ゆっくりの散歩いつもと違う街

ハミングであんたの小言聞き流す

花の芽が一斉に伸び自己主張

したたかな後姿にある涙

堺市 村上 玄也

言い切ってしまった後で辞書を繰る

足掻くから相手の思う壺になる

主義主張持たず世間に流される

マスコミの怖さ世論を支配する

逸る気を抑えきれないティーショット

堺市 源田 八千代

川柳子へ一喝路郎師と計氏

曼珠沙華お彼岸過ぎて咲き出した

血縁の深さ邪魔な日嬉しい日

渡りに船のはずがまんまと騙された

兼農の三連休は収穫日

四條畷市 吉岡 修

大人への兆しか少しずつ無口  
居酒屋の味知つてから人が好き  
四捨五入その差でこうだとはひどい  
ニンニクの口でデートに来てしまった  
老人と呼ぶと老人不機嫌だ

吹田市 須磨 活恵

負けておく方が気楽で肩こらぬ  
切磋琢磨好敵手に囲まれて  
いい友に恵まれ心豊かです  
万華鏡のぞけば後期高齢者  
少しだけ秘めごとがある冬帽子

吹田市 木下 敏子

秋灯下心のおしゃれする読書  
旬の物食べて機嫌のいい手足  
渡り鳥どこのお国が住み良いか  
政治家の舌を数えて見たい記事  
老いること忘れてつけた予定表

吹田市 太田 昭

美辞麗句並べ虚しい男たち  
手水鉢の水を野鳩に盗まれる  
七つ目の無い養子を振り続け  
短い秋を虫百態が乱舞する  
妥協した娘が妻となり母となり

吹田市 瀬戸 まさよ

敬老日忘れるほどに達者です  
落ちてゆく体力ガクンまたガタン  
物よりもお心遣いありがとう  
轉りも狂想曲に聴く夕べ  
傷ついた青虫青い涙出る

吹田市 大谷 篤子

墨をすり邪念すっかり消えている  
夕明かりメールをしたい人がいる  
握手した手の温もりを抱いたまま  
絵の中のチチロ鳴く声聞いた夜  
料理屋の秋刀魚は黒く焦げてない

吹田市 野下 之男

横車押して来るのが大國か  
龍馬どんまた来て欲しいこの世です  
寝転んで山鳩の愚痴聞いてやる  
おばちゃんの肩越しに見る文化祭  
幼子に囲まれオウム上機嫌

高槻市 峯村 勲弘

譲られた席のぬくもりフルムーン  
D51の響きかなたに草枕  
意外です草食系の力瘤  
休肝日ノンアルコールぐいと飲み  
海上の国境線は風まかせ

高槻市 井上照子

青い鳥逃げた時から日々涙  
拾う神縫って生きたこと何度  
娘にだけは甘えてたのみごとをする  
辛い世を生きのびたくてする検査  
甘い言葉電話で誘う乗るものか

高槻市 左右田泰雄

ふる里の素顔に触れる祭りの夜  
留守電にそつとさよなら置いておく  
お見事と膝を叩いて持ち上げる  
クーラの下でゴロリとする昼寝  
欲得が絡むと荒れて来る心

高槻市 執行稲子

泡になってしまったほらが大き過ぎ  
ジんクスの北向きベッド嫌と言う  
意外だと思ふまさかの人の妻  
流行に弱い私の自尊心  
紫のへアーに染めた日の若さ

高槻市 指宿千枝子

封印をするほどで無し遺言書  
一代で終った町の開業医  
逃げるのを止めたら気分軽くなり  
青鷺の根気にとても敵わない  
迷い込んだトンボと過ごす三時間

高槻市 乙倉武史

千号の記念へ集う至福の日  
路郎読本川柳魂を揺さぶられ  
ゆき当たりバツタリ政治明日はない  
コスモスは揺れても強い花の芯  
体育の日へ張り切った万歩計

高槻市 杉本義昭

反省を抱え明日へジャンプする  
仏壇を値切った分も拝んでる  
おみやげを買ったら龍馬ついて来た  
賽銭箱ひよいと覗いて拝む癖  
お別れの余韻しずかに受話器置く

高槻市 安田忠子

おふくろと中二の孫が呼び出した  
ほんまの顔うぬほれ鏡信じよう  
物忘れしながら今日も生きて行く  
知らぬ人におしゃれ誉められ元氣出る  
今の幸丸山遺跡見て思う

高槻市 生田義一

家計簿に婚五十年の歴史見る  
国技館英雄出でて立ち直る  
出ぬ声を絞って歌う戦友会  
炎天下ゲゲの里に家族旅  
あんなにもゆっくりしてた君が何故

高槻市 富田 美義

豊中市 松尾 美智代

引き返す道など持たぬ余命表  
掬つても混ぜても所詮ゆめは夢  
飾るまで花の悲鳴を聞き漏らす  
糞虫が触れてはならぬ顔をする  
衝動買ひ心の渴き治まらず

高槻市 佐甲 昭二

グルメ旅増えた体重持ち帰る  
初対面の不安を消した国訛り  
責任という鎖解かれる定年日  
ポケットのやる気が顔を出したがる  
内輪話聞かない事にする不安

高槻市 片山 かずお

村祭りここぞと古老取り仕切る  
妻にない彩のあなたに魅せられる  
シャイな子の背中をそっと押してやる  
下話したのに採める会議室  
先人の轍を杖として進む

豊中市 江見 見清

話下手補う一枚のレジユメ  
ポイントがたまつた頃に店が消え  
介護する瞳に映るありがとう  
とめどないお喋りだつて潤滑油  
結論を玉虫色にした深夜

検査値が歩きなさいと背を叩く  
一時間朝夕歩き食べすぎる  
年重ねやさしい色が好きになる  
自然に感謝今年も柿がたわわです  
熟すのはもう少し先我慢です

豊中市 松村 里江

幸せいる貴方好みにパンやける  
こぼれ種手頃な鉢を探してる  
集中心で女が化粧しています  
秋の灯に静かに開く民話集  
泣いたらアカンここであんたの意地みせて

豊中市 藤井 則彦

すみませんと一度言わせてみたい国  
奇数月小銭入れまで軽くなり  
声だけが大きくなったクラス会  
大嫌いと言うては愛をたしかめる  
シヨパン聴きながらほぐれるマッサージ

豊中市 水野 黒兔

廃校舎ぶらんこ揺らす秋の風  
鯛を浄土の声と思う里  
石けりで遊んだ路地にある昭和  
音量を落してラジオ深夜便  
子に孫に習うこと増え秋の暮れ

豊中市 安藤 寿美子

ほっといて ほっとかれても淋しいが

年金はミイラになれば不要です

番組に不味いものなしみな褒める

夜の雨葉刈りのすんだ庭に降る

朝の窓開かなんたら死んでます

富田林市 片岡 智恵子

忘れていた満期に赤いバラが咲く

自尊心の強い同士が溺れかけ

夜の雨ほてったものを皆冷ます

横綱では許せぬこともいま魅力

別れたい時期乗り越えた半世紀

富田林市 井上 じろう

今の世に昔気質で生きている

道半ば地獄極楽知らぬまま

いまいずこ かごめかごめの仲間達

年惜しむ一つ残したことがある

腰痛で飛び乗りできぬ寂しさよ

寝屋川市 森 茜

散らばった話まとめるピンセット

赤ちゃんが帰って急に雷鳴する

なき止まぬスピッツよりも蜘蛛愛し

ゴーヤ黄色に夏の日照りを遠くする

頑なに白髪通しているおしやれ

寝屋川市 平松 かすみ

絵手紙の秋になったと栗の穂

矢印にためらう僕の登山靴

日本の赤字立ち読みしています

また今日も同い年です死亡欄

おじいちゃん今朝もお返事ありました

寝屋川市 太田 とし子

披露宴祖母は小さく座るなり

よろこびと淋しさ交じる目を閉じる

カレンダーめくりたくない夜が来る

肩書きの無い者同士音痴です

前脳の冬眠避ける湯葉を煮る

寝屋川市 森田 麗

袋から飛び出す準備するマスク

話の流れ彼女の離婚教えられ

母元氣糠床愛し冬仕度

これしきで負けぬと膝のサポーター

挨拶で息子は母を支えます

寝屋川市 籠島 恵子

押し出してください返事する

魂が入っていない返事する

思いつきの深いところで咲く紫苑

これからは好きにどうぞとススキの穂

時々他人言葉になる夫婦

寢屋川市 富山 ルイ子

千号大会日本中から友集う

懇親会なつかしい顔顔に会う

半袖を出して仕舞ってまた出して

残り僅かだ品性を磨かねば

金木犀の香りを抱いて秋過ぐす

羽曳野市 福田悦子

母の海愛の深さは無限大

自転車に乗れたあの日は忘れない

任せなさい付いて来なさい女王蜂

欲深い女が神に乞う命

価値観を示すバラには刺がある

羽曳野市 三好専平

牛丼が安く豊かに生きており

酒煙草捨てて天国近くなり

ぶっちゃけた話農薬使ってます

伸びる草這う草天にのぼる草

なにもかも奪って愛は逃げてゆく

羽曳野市 吉村久仁雄

ドア一つ隔てた義父に出す賀状

よそ見してすぐに幸せ煮こぼれる

ばくばくと食べてすすく老いている

負けるたび懐深くなる息子

シャッター街風はよそ見をせず走る

羽曳野市 徳山みつこ

秋深しボンと弾けた栗の毬

花束に吹き込んでおくオメデトウ

木犀の香がわたくしを濯ぎおり

わたくしのエールご飯とおみそ汁

アイパッドよりわたくしは紙の本

羽曳野市 安芸田泰子

おでん煮て三日も留守にしよう

年金の愚痴の集いの日向ほこ

境遇が似ていて無二の友となる

ちぎれ雲遠いロマンの夢を追う

空白は何があつたか古日記

羽曳野市 吉川寿美

新米がふんわり炊けて仏さま

履きなれた靴が幸せ忘れ勝ち

花活けて花とところを一つにし

子を生してどっしり妻の腰まわり

笑いたくないが笑とく輪の中で

羽曳野市 永田章司

法話にも世相を入れて聞かせます

古希越えて更新迷うバスポート

三分のスピーチだから考える

白黒の写真が語る戦後の日

戒名を覚えられない親不孝

羽曳野市 酒井一壺

あちこちの痛む間は生きている  
出来すぎる息子で嫁の来手がない  
絡む人きつと淋しい人なんだ  
ライバルの笛の聞こえる距離にいる  
スペアキー鬼を一匹飼っている

東大阪市 佐々木満作

都会から消え行く虫のシンフォニー  
懐の深い相手に音を上げる  
何くその魂がある母譲り  
ことという見せ場作ってある芝居  
一年の懺悔除夜の鐘に託す

東大阪市 米田水昇

半世紀頼った人は天に逝く(中村れんげさんを悼んで)  
茶に書道川柳究め背はしゃんと  
れんげ草見事に咲いて安らかに  
白い雲乗って極楽めざされる  
秋の月今は天空どのあたり

東大阪市 北村賢子

救出へ互いに先を譲る愛  
野菜高騰野菜嫌いで救われる  
千号終えてほっとさわやか風渡る  
また一人知人が逝ったうろこ雲  
目立ちたいつもりは無いの赤い服

枚方市 丹後屋肇

鈴虫のテープを十五夜が聴く  
街頭のスピーチ野次を説き伏せる  
南溟の慰霊に注ぐ生一本  
詰襟のエールアルプス席が酔う  
価値観の違い一緒に暮らせない

枚方市 二宮山久

我孫を見つけかねてる運動会  
DNA受け継ぐ孫の運動会  
菅政権しつかりせよと尖閣島  
趣味増して老いたる我のエネルギー  
我人生駆け引きなしに生きている

枚方市 二宮紫鳳

虫の声宇宙に響くハーモニー  
どの旅もウーマンパワーの花盛り  
ストレスをボールにこめてストライク  
コスモスが咲いてシナリオ秋に入る  
孫パワーもらってはしゃぐ運動会

枚方市 海老池洋

夕焼け空ほっと人間取り戻す  
ほっとして靴下を脱ぐ仮面脱ぐ  
衣食住足りて敬老いまひとつ  
辻地蔵拌み笑顔にしてみらう  
折り紙の折り目曖昧許さない

枚方市 寺川弘一

酒好きというだけなのに仲がよい  
ほっとけよ所詮あいつはブーメラン  
言わしてくれぬ反対意見ガムを噛む  
化け方下手で真つ正直に生きている  
指切りをしてほくは軟禁されている

藤井寺市 高田美代子

頼りない人にたのんでから不安  
八十歳ぢやらんぼらんな日もありて  
それだけの事かアハハで済むのなら  
闘わぬと決めてマニキュア念を入れ  
これからもわたくし流で泳ぎます

藤井寺市 若松雅枝

肺活量鍛えてオペに備えてる  
オペの傷押えて痛み紛らわす  
まな板の鯉が跳ね出しオペ終わる  
オペ済んで未だ生きていた有り難い  
絆とや一つの屋根の温かさ

藤井寺市 鈴木いさお

羞恥心まだある内は大丈夫  
空しさは夜の観覧車に独り  
三人掛けなるべく真ん中は避ける  
カルテには酒をやめろと書いてない  
不器用な人だ方便使えない

藤井寺市 太田扶美代

わたくしの狭庭にあったユートピア  
同窓会みんなやさしくなっていた  
訳もなく時刻表見る癖がある  
子育てにとても似ている菊作り  
ソーメンをすすり終えたら秋だった

藤井寺市 伊藤アヤ子

つもりでは成果は出ないダイエツト  
秋雨が降って少しずつ色をつけ  
うさぎさん月の居心地いいですか  
また転けて新しい傷あちこちと  
話し合う人傍に居てあげたい

藤井寺市 吉田喜代子

白鵬関日本を学ぶ思慮深さ  
コスモスも猛暑に負けて傷ついて  
まだ暑い年賀印刷御用聞き  
音楽会全身楽器夢心地  
逝ってから大事な人と気付く冬

藤井寺市 俣野登志子

名月や笑い疲れの寄席帰り  
辛抱する皆痛いとこ持ったはる  
わたくしは夾竹桃に癒やされた  
膝痛め三步後ろをついて行く  
二つ買えば一つサービス売らんかな

藤井寺市 津田シルク

人間は怖いと犬のたち話

豊作の案山子だいいじにつれ帰る

政治家をまねて本音はしゃべらない

あれ以来本音で話せぬことに

明日を読む気力まだまだ残ってる

藤井寺市 増井ヨシ枝

煮崩れてカレーは母の味になる

夕焼けこやけ電話鳴らずに人も来ず

桃の種里は卑弥呼で盛りあがる

飼い犬がメシだ散歩だ扱き使う

来年も幸せにねと小指言う

箕面市 広島巴子

思い出の山里ぶらり風まかせ

野仏と水分ち合い一休み

おーい雲一緒に行こうゆっくりと

まだ若い思ってたのは自分だけ

値引きへはシルバーカード使います

箕面市 出口セツ子

夫婦だけの暮らし時計も遅れぎみ

惚けぬようたまにケンカをふっかける

生きている証に句作しています(川原章久様を悼みて)

信じたくなって捜している句会

知りあいがだんだん欠けてくる孤独

守口市 井上桂作

せめてもの輝き欲しい老いの坂

数えれば残る人生幾許も

どこまでも好奇心をば忘れずに

掘り下げて心通じる歌を詠み

幾重にも川柳極め世に問えば

八尾市 宮崎シマ子

昔の人は偉かったと昔の人が言う

ダイナミックに我が田を囲む彼岸花

月に虫贅沢すぎる秋の庭

彼はいいお喋り続く秋の暮れ

白バラを妻に捧げて負け戦

八尾市 寺川はじめ

元旦生れ答出ぬまま古希の坂

古希の会病と呆けの座談会

親の夢子の現実で論される

声ささずひたすら歩む蟻の列

首縦にうっかり振って高いつけ

八尾市 村上ミツ子

待ちに待った秋漸く来てくれる

ちよつと待て毒キノコかもそのきのこ

中国と仲よくしたいこれから

恋してもいいか亡夫にきいてみる

日本にもあった頭脳という資源

大阪府 桑 田 ゆきの

礼節を教えた国が駄々こねる  
朝鵬が生きよと告げる散歩道  
スーツ着てハローワークで畏まる  
政策が軋んで独楽が回らない  
観覧車最上空で有頂天

大阪府 初 山 隆 盛

新涼の風にネクタイ合わしてる  
縦に横に自信を持った首を振る  
おくゆかしい心のうちが光る人  
うなずいてくれたほどには票がない  
何を求めて山河を駆ける山頭火

大阪府 米 澤 俣 子

がらくたばかり形見に出来るものがない  
何やかや言うも年金ありがたい  
見習おう華奢なコスモス芯がある  
忘れないために荷物はひとつだけ  
百選の夕日と歩くスニーカー(夕陽百選の町)

大阪府 野 田 栄 呼

車椅子歩ける幸を教えられ  
欲出さず今日輝かせ見る明日  
探し物買った後から顔を出す  
山緑の風渡りゆく故郷の秋  
二百歳ほんとに居たらどんな顔

神戸市 木 村 貴代子

国産品探す苦勞に負けそうで  
五十年前の努力にノーベル賞  
ノーベル賞必死にかくすお国柄  
高層の窓に親しく満ちる月  
好奇心かき立て若い輪の中へ

神戸市 両 川 無 限

根は昭和土の香りにいやされる  
愛の強さと愛のもろさを知る指輪  
たくさんの愛を育ててきた根っ子  
空白のページに落ちていた涙  
やわらかい言葉で無理を押しつける

神戸市 田 中 章 子

疲れ眼にとつてもやさし昼の月  
パワースポットそれはあなただけのいるところ  
第三者言いたいことを言ってくる  
政治家にグレイゾーンがつきまとう  
持ち味を生かす料理は高くつく

神戸市 山 田 婦美子

だんだんと夢が縮小されてゆく  
古希の坂越えて夫婦の夕ごはん  
幸不幸何か足りない二人きり  
ペン一本夢は宇宙をかけまわる  
反省を重ねて今日も捻子を巻く

神戸市 山口 美穂

後日談の面白くきいている

親馬鹿でいいの見守る子の長所

さざ波はたてない深い海だから

エコポイント車も免許もないわたし

裏の努力あって見栄張る大舞台

神戸市 早川 孝子

褒め過ぎて次の言葉が出てこない

アイデアをポケットに入れ温める

土壇場でやはり女は腹据わる

万歩計秋のリズムに整える

ありがとややはり笑顔が一番だ

神戸市 山口 光久

一歩退くことを覚えてから余裕

弱点を庇う手立てにくたびれる

無名でも理論武装の名コーチ

愚痴ひとつ言わぬ友なら遠ざかる

あちこちへ寄り道してのブーメラン

神戸市 伊勢田 毅

手作りの玩具競った昭和の子

虫メガネ生命線が消えていた

川渡る浅瀬を探す母の石

四面楚歌陽気な妻に救われる

有頂天おごりで運が逃げてゆく

相生市 中塚 礎石

近道をこばむ古風な自尊心

一陣の風に心の裏表

合掌の透き間を抜けてくる懺悔

爺さんも父も苦勞をした除草

彼岸花たどれば父母の墓がある

明石市 糀谷 和郎

検診後妻だけ医者と呼ばれてる

歯車にすぎぬが明日を刻んでる

幾千年駈けて熟成する歴史

大根の煮具合さぐる冷めた串

反省の弁は辛目の味にする

芦屋市 黒田 能子

人間をむき出しにするバイキング

疲れてる人に頑張れとは言わぬ

適当に力を抜いて泳ぎ切る

のびのびとした足に合う靴がない

天地異変竹はすつくと天に伸び

芦屋市 竹山 千賀子

未来の夢つめて届いた引出物

満点の笑顔に降りた玉の輿

先生の一筆だけで生き返える

秋風に木の実ころころ宿さがし

亡母の夢見たくて枕替えてみる

尼崎市 長浜美籠

非通知の電話とろうか取るまいか  
リセットをするチャンスかな深む秋

肯定も否定もしない寺の門  
杓子定規に話すと風も他人めく

蛇行する話を余所に梅茶漬

尼崎市 山田耕治

偶然という言い訳を聞かされる

一杯目がおいしいのよとしおらしい  
片隅に出るグラウンドを去るニュース

学校の鐘を朝夕聞いて住む

いつのまに出来たか駅の裏表

尼崎市 軸丸勝巳

敬老の日のファミレスに三世代

短いが秋は味覚を置いてゆく  
誕生日米寿はそこと子が囁す

ゆったりと長寿味わう亀の甲

腹に藁巻いて老桜春を待つ

尼崎市 藤岡りこ

打ち水に蛙三段跳びファイト  
血統だけが自慢の犬を飼っている

きつと今ごろ亡兄と亡両親出合ってる

夫より電化製品よく喋る

熱っぽく旅の話を友傘寿

尼崎市 加川靖鬼

宜しくと言われよろしくやっている  
掴むまで露かダイヤか分らない

目を閉じる視界が深く広くなる  
木枯しに耐える花芽の耐夏期

人の世よ勝った価値より負けた意義

加西市 金川宣子

空腹をいらいらさせた披露宴

柔らかい笑顔残して孫帰る  
深い仲ならぬ程度のお付き合

初デートドキドキ渡る虹の橋

夫の背に三歩下がって指図する

川西市 米原雪子

近頃のニュースに不安ばくせんと

味覚の秋体重そつと棚上げに  
鍵っ子に愛を補う日曜日

いくつもの鍵持つ主婦の起動力

あきらめて買うと出て来た探し物

川西市 西内朋月

通帳を広げ数えている余命

禁煙へ挑むつもりになる値上げ

昔むかし青い議論をした飲み屋

簡単に越せると思う溝の幅  
入院の前も焼酎飲んでる

三田市 久保田 千代

身だしなみ整えるのがやっつとです

涼風に風鈴揺れて母の忌に

歩き方走り方まで親に似る

生き様を心に刻む予定表

てのひらを返すと夢が遠くなる

三田市 堀 正和

ハテなんの祝日ですか定年後

ピチピチのフラダンスなら見てみたい

パソコンも後期ベースが合ってきた

タメ息を吐き出してきた途中下車

もう僕にチチンブイブイ効きません

三田市 福田 好文

夫婦でないあんなに喋るはずがない

お迎えが来ない来ないと医者通い

ハードルを下げた見合で断られ

腹ばいで寝ると軒がピタと止む

裸婦の前 妻が急かせる美術館

三田市 上垣 キヨミ

挨拶にことば床しい人が好き

来年も挑戦したいダイエツト

趣味ひとつ走る月日を追っている

木犀が咲けば亡夫の夢を見る

二博士の榮譽世界に知らしめず

三田市 石原 歳子

行き摩りの人にもらった萩の花

日本海魚談議に花が咲く

葉を洗うレースのような葉に安堵

お互いの老化を認め合う夫婦

秋雨に亡母想い出すなめこ汁

三田市 白井 二英

点滴は時が解決してくれる

聞き取れぬ言葉もナースうまく聞く

福耳の人の意見に力あり

キーキ出た時のコーヒートンシユガー

苦勞した人なんだなあ禿げている

西宮市 山本 義子

母さんは従順一途とも言えず

まないたに女系家族の跡がある

ときどきはギア入れかえるのも家族

おはぎ供えほとけの分も食べてます

金字塔に縁のなかつたわが家族

西宮市 片山 忠

通ぶつた男がたのむたまご焼

苦勞した女で酒に手厳しい

おばはんと呼ばれアイヨと返す妻

リフォームをしてから病氣しなくなる

倅せですよ三度のめしが食えるなら

西宮市 亀岡 哲子

歌舞伎座になったよ四季を見た友よ

大根になれぬ間引菜味やさし

包丁研ぎさすが堺の地の育ち

新米は出たが二人の朝はパン

阪神と何のゆかりもなければ

西宮市 足立 茂

習うほど迷路に入る奥深さ

合掌の指の間にある邪念

替え歌で好きと告白する演歌

食料難の頃思ひ出すロバのパン

昼行けば見つけられないママの店

西宮市 藤本 直

いい朝だ小幸福と記しておく

花嫁の支度素直な娘に育て

毎日が新しい日で君が居る

美味しいものすぐ飽きますと亡母教え

肩の荷を降ろそう二番でええやんか

西宮市 緒方 美津子

溝掃除ただそれだけで仲直り

富士山にはやぶさの雄飾りたい

家族の和支えてくれた床柱

あの笑顔外されたことまだ知らぬ

溜りますたまります一人居てゴミ

西脇市 七反田 順子

正論を通す夫にシワ五本

黒猫のタンゴ聞いてた良き時代

お立ち台ヒーローだけがライト浴び

止めにした旅の誘いにまた乗った

負けん気と達成感とで白寿まで

姫路市 古川 奮水

大物は何時も付近にピケがいる

切れ味も癖も女房の裁ち鋏

口下手がまた前に出て世話を焼く

田舎にも異国の嫁の姿見る

大正も昭和も好むシャネルの5

奈良市 山本 柳昌

ほどのよい揺れにまぶたが閉じてくる

ほどのよい距離でふたりの仲が良い

食べる物皆美味しくて軽やかだ

軽快な神輿のリズム血がさわぐ

まだ揺れる臓器どうぞの遺言書

奈良市 岩本 浩二

シネマ出て暫し余韻のティールーム

プライドを捨てれば楽に生きられる

轟音をあげて華厳は霧に落ち

贅肉をぎゅうぎゅう詰める試着室

自惚れて褒め上げ詐欺に引っかかる

奈良市 辻内 げんえい

うやむやの結論なのに異議は無し  
墓参り孫の世代は誰が来る

後ろ姿見せた積りが息子は見てぬ

苗木植え子の成長と競わせる

雨乞いが効いて豪雨にみまわれる

奈良市 天 正 千 梢

あとからゆっくり理屈を考える

きつちりと道を歩いてくれる杖

プラスマイナスゼロになれば御の字だ

妻正座何か不吉な予感する

あみだくじ今日の止り木きめている

奈良市 阿 部 紀 子

戸籍から消えず成仏できぬかも

早苗から急に開いた孫娘

性善説信じられない国となり

個人主義いきつくところ無縁社会

来年はびよんぴよんはねる年で欲し

生駒市 飛 永 ぶりこ

笛生さん具徳の微笑黒い杵

貫いた品と情熱 雲霞(れんげさんを悼み)

片男波いつも私を風にする

風の精枯葉とダンス今佳境

近未来シェフと介護をロボットに

大和郡山市 坊 農 柳 弘

人許す愛の起伏にある絆

あくせくはするなど吊し柿笑う

会者定離すべてをほぐす爛徳利

恋は未だ言葉にならぬ曼珠沙華

沈黙黙考自分探しの師走の灯

奈良県 渡 辺 富 子

千号記念祝う仲間の笑顔よし

わくわくと星のたわごと抱いて寝る

あの世より母呼び戻す嬉しい日

灯を分けて星のたわごと読むふたり

運命線蛇行しながら生き延びる

和歌山市 牛 尾 緑 良

決断はまた大安をやりすごし

生きている証しの中でまた悩む

ここだけはクールでいたい鉤括弧

もう伸びることない僕の棒グラフ

後期高齢まだ先輩と呼ばれない

和歌山市 武 本 碧

感涙にむせび心のエステする

イエスマン玉虫色に咲いている

心まで貧しくはない日が昇る

耳たぶのまろさで心地よい会話

いいリズム見つけたらしい足の裏

和歌山市 田中みね

上司の顔立てた見合いでひと目ぼれ

鯨幕いつかあなたの世話になる

単純なお人よいしよに乗りやすい

欠点はひとの話を取るあなた

こんな筈では天狗よお目が覚めたかな

和歌山市 福本英子

お名前を忘れた人も懐しい

猛暑から義理欠く癖が抜けきらぬ

デジタルの柱時計は愛想なし

良い顔するのに少し努力する

物忘れしても一人じゃつまらない

和歌山市 古久保和子

笑顔って素敵しあわせお裾分け

目薬一滴もしも明日が見えるなら

身辺整理本の行方は見届ける

年金を受け取り妻は進化する

ビニールの傘で都会の雨凌ぐ

和歌山市 玉置当代

秋茄子のほたたと煮る母の味

うちの猫隣の犬と仲が良い

運転免許返上したら暇になる

秋風に母偲びつつ栗を剥く

女人禁制まだ破れない壁がある

和歌山市 岩本美智子

コオロギのソロは厨が舞台なり

月青し道遥かなり我思い

虹の橋渡ると青い鳥がいる

一年の垢を落として光る墓

仏前へ好きならうどんで年を越す

和歌山市 松原寿子

白すすき逢えず余白に風が吹く

辿り着いて見れば恋慕が砕け散る

深い傷きれいさっぱりシュレッダー

住む人もなく荒野広がる母の里

甘くみた三面鏡に鬼が棲む

和歌山市 堀富美子

割り切った日から不思議な力湧く

朝方の夢はリアルな絵を描く

自転車をやたさせた纏め買い

自分との戦消すのも生かすのも

饒舌の友の温さが心地よい

和歌山市 喜田准一

深山来て秋の瀬音の寂しさよ

さり気ない笑顔でダメを押しに来る

寄り道もなく男の幅がない

自惚れも凹みもあって泣き笑い

真ん中を取った意見が丸過ぎる

和歌山市 松尾和香

過去は過去リセットさせて生きてゆく

ひとり旅背中を押した千の風

然りげない言葉にマナー弁えた

失敗を重ねて丸くなる余生

安らかに北向きに寝る風の道

海南市 堂上泰女

闇の夜に虫が奏でるマンドリン

托卵の精神はずかしくないか

子を労り元氣装うてる電話

踏まないで下さいうちの青い芝

自画像を拡大してはいませんか

田辺市 岡本昇

聞えてる顔で聞えてない素振り

好天の避難訓練でれくさい

トンネルに置き去りされた過疎の里

それにしても世襲議員が多すぎる

一億人寄っても同じ顔がない

鳥取市 倉益一瑤

ドリンクを飲んで熱中する遊び

三代が一緒に入る湯が溢れ

わたくしを殺して群れの中にいる

青空を一気飲みして消した鬱

幸せと書けるノートを持っている

鳥取市 奥谷彩子

ジョークとばやし僧笑わせて説く法話

欠け茶碗ファイトファイトのいのち盛る

蒼天にこぶし蓄たちの未来

生かされて無欲で無位の石も積む

雪月に働きづめの父も酔う

鳥取市 吉田孔美子

治療食に飽きた愛猫もて余す

土と施肥蓄は好きに操られ

酔うほどに家が恋しくなつて来る

ほろ酔いのあなた大好き帰りましょ

大吟醸に家のみレシビ本を買う

鳥取市 加藤茶人

弁当も子のおさがりで今日豪華

アラフォーと浮かれテレビは罪作り

〇円が高くつきそな契約書

泣き真似も泣いても娘等の処世術

恋芽生え愛の成就へ砂時計

鳥取市 宮脇道子

無の世界草を筆つて老いの日々

白萩が涙のように散つて行く

老いの手に皺が消えてる大事だ

来世は美人に生れ恋したい

朝顔が小さく咲いて秋が来た

鳥取市 永原昌鼓

介護して夫婦の絆堅くなる  
悔しいが古いのオシメは外せない  
赤い糸介護する側される側  
古いの身へ介護のツケがまとい付く  
恙無く今日も終わった灯り消す

鳥取市 鈴木一弘

かゝすかならず虫の音老い楽し  
先達の辿った道を傘の杖  
迫られて本音押えたお人好し  
焦っても声が届かぬ仏さま  
修羅場越え独り立ちした千切れ雲

鳥取市 池原天馬

彼岸花やつばり刈れぬ先祖見え  
地籍調査先祖の努力敬服す  
役所ではどんな名刺も役立たぬ  
実のなる木立枯れすすみ猪里へ  
けいたいの連絡ないはたがい無事

鳥取市 岩崎みさ江

移ろえばセピアになって行く昔  
地滑りが始まる胸の活断層  
ハヤブサのごと恋しい方へまっしぐら  
まだ主役できると思う喜劇なら  
てのひらのサプリメントに呪文かけ

鳥取市 岸本孝子

孫娘つぼみのままでいてほしい  
酔うまでは財布の中身覚えてた  
欲張ってみたってたかが両の手だ  
まだ女捨て切れなくてダイエツト  
ほろ酔いが女ひとときわ光らせる

鳥取市 夏目一粹

年金があるから無職とは言えぬ  
延びつづく平均寿命ああ哀し  
ふと忘れふと思いだす山頭火  
生きるためたまに欠点見せておく  
すべて無と思えど欲が顔をだす

鳥取市 中宇地秀四

清廉に生きて無芸の無位無冠  
直球が一発きいてホツとする  
虫の声消えて世間が肌寒い  
妻の留守酒の肴はチンで済む  
親孝行子供手当は酒にする

鳥取市 高浜勇

やさしさを袋に詰めて売ってます  
コンビニで若さを少し吸ってくる  
複雑なところの仕分けなど出来ぬ  
がたがたと崩れてもなお石を積む  
らくらくとみんな生きてる顔してる

鳥取市 平尾菜美

学んでもすぐに忘れる仏事です  
裾分けは笑顔あるうちいただこう  
誘われるうちが花です参りましょう  
十八番あなたのねうち上がりそう  
燃費よい御飯代りの餅食べる

鳥取市 稲村遊子

わたくしの磁石貧乏神が好き  
天秤に掛けてカエルと釣り合った  
スパイクが欲しい私の歩く道  
遅しいコスモス笑みは軽やかに  
ときどきは鞆の中身確かめる

鳥取市 山本益子

八十路来て漢字検定パス通過  
デイサービスイラスト比べに困り果て  
村まつり鎮守の森は人いきれ  
年かしたら好奇心の目迷い道  
ミステリー彼岸花へと誘いこむ

鳥取市 中村金祥

さっと引く見事な夏に脱帽だ  
ひと仕事終え体重を確かめる  
朝飯が旨いぞ今日もさあやるぞ  
検察に弁護士がつきややこしい  
お笑いでも見ないと今日は寝つかれぬ

鳥取市 武田帆雀

獅子頭かむって過疎の後継者  
女流棋士アマのおじさんいじめてる  
葬儀屋と言うセールスがやって来た  
奥さんはつつかけはいて種を蒔く  
補聴器も入れ歯もいらぬ菊の中

鳥取市 太田幸枝

愛あれば年を取らないイヤリング  
苦しんだ昭和がなぜかなつかしい  
竹槍の時代を越えて傘寿坂  
日帰りの旅にストレスふきとばす  
庭にまだ姑が植えたる寒椿

鳥取市 西川和子

助走路が短くなって飛びあぐね  
体力は無くても口はまだ達者  
エベレストも家も地球の上にある  
前線に振り回されている地球  
はったりや無視や真心まで荒れる

鳥取市 近藤佳子

カーテンの隙間から朝やってくる  
住人が替わった当座来ぬ雀  
彼岸花十日遅れで咲く猛暑  
遠い日の夢一つずつ偲ぶ夜  
故里が見えるお宿で目が醒める

新米を手みやげに行く同窓会

鳥取市 山宮 愛恵

同窓会中学生になる瞳

そして喜寿何が支えか議論する

墨の香に癒されて聴く雨の音

筆を手に紙と向き合い深呼吸

鳥取市 土橋 睦子

人が好きプラス思考でマイペース

キッチンに集う親子の充電日

三度飲む薬を持って旅に出る

悟れない齢を重ねて百八ツ

思い切り良いから褒める冷凍魚

鳥取市 土橋 はるお

美しい花に刹那の雨が降る

あいさつは省いた方がよろこぶぞ

ちぎれ雲頑固な雲もいるようだ

熱中症に案山子みんながやられたわい

ドンドロケ鳴ると西瓜が転びだし

鳥取市 池澤 大鯨

知った顔も少なくなった無人駅

わが野心ドライフラワー吊される

咲いちゃえば二度と蕾に返れない

わが歳を誤解したまま古稀をすぎ

幹事して開会までに酔っている

思いやり葉っぱは蓄しかと抱く

鳥取市 吉田 弘子

新しい発見夜のウォーキング

事故のたびその道の専門家いて

さよならとまたねの響きふと思う

ダイエットする決心が揺れて秋

鳥取市 春木 圭一郎

四畳半一間スタート二人なら

一つずつ増やして今の家がある

長寿者も所在不明では困る

トラブルも笑いのネタにできないか

やれるだけやったら心平靜に

鳥取市 福西 茶子

妻の指金も銀にも縁がない

処分値の服で来年翔んでみる

カルシウム摂るとやさしくなれますか

手の内を喋りいっつも負けている

キッチンに居座りアリの冬仕度

鳥取市 有沢 せつ子

回忌する母の形見の服で行く

子ら揃い宴賑やかに十七忌

鈍行にない特急の揺れに酔う

正直なからだで無理はもうきかぬ

百円の漢字の本が役に立つ

鳥取市 田村 邦 昭

色褪せたアルバムだけは恋を知る  
スマートを売りものにしてまだひとり  
いい予感足がなんだか飛んでいる  
いい時期に酔っているから先がない  
ちぎれ雲愛がだんだん遠く去る

鳥取市 横 田 春 名

苦虫は噛みしめるほど増えている  
それぞれに笑顔の居場所持つ家族  
好きな場所探しあぐねる日々続く  
揉め事は母に回して丸め込む  
友の汗沁みた野菜に手を合わす

倉吉市 山 中 康 子

涼風にやっと我が身をとり返す  
吐き出せば楽になれるに何故迷う  
修復の効くうちに直そうね溝  
燃えたくてくすぶる欲に火をつける  
娘の長所探してうんとほめてやる

倉吉市 猪 川 由 美 子

米も野菜もできる姿を子は知らぬ  
イチロー偉業人には言えぬ苦悩あり  
ライバルの居ぬ間に記録伸ばします  
七十五日経たず引退忘れられ  
幹事長の福耳効果ダメでした

倉吉市 山 本 玲 子

欲と金バランス取りに苦勞する  
実りの秋先祖に詫げる休耕田  
母さんのよいしょこらしょが始まった  
切り口の線も艶々水ようかん  
メモ帳を炬燵において冬ごもり

倉吉市 野 口 節 子

安直に指切り出来るお人柄  
株分けの花が咲いたよ近所中  
巻返すカード片手に左遷の地  
老々で遊ぶ近場のバスツアー  
近隣に地肌の合わぬ国がある

鳥取県 西 谷 悦 子

にんげんの川百態の中流れてる  
生きる道びつくり箱が置いてある  
ふんばって辛苦渡った靴である  
わたくしの弱さ克服するも我  
飛んでみて無理は利かぬと解る齡

鳥取県 松 川 行 男

やっと秋 水筒の水減らなくて  
力抜けそんな呼吸がむつかしい  
どんな患者も処方箋出しますよ  
担当医笑いをまいて往診中  
もう暮れですか あなたと指を折ってみる

鳥取県 佐伯やえ

九十のおばさんと弾く大山賛歌

つじつま合せの話仲間にはいらぬ

ついでという便利にいつも助けられ

靴はちびたが心はいつもしゃきしゃきと

田舎ぐらし身につきました赤とんぼ

鳥取県 岩崎和子

シャンソンの枯葉を歌う好きな秋

蛇口からこぼれる水がやつと冷え

仏さま拜んでやつと始まる日

町内の奉仕作業日いつも晴れ

喉飴がいつも食卓瓶のなか

鳥取県 山本正光

尖閣へ日の丸高く揚げるべし

検察もたかが人間裁かれる

腕組んで歩くことなく逝った妻

平凡な老いの日々だが酒すこし

猫の鳴くように似ている出雲弁

鳥取県 細田裕花

プランコが揺れて始まる物語

本当の空が見たくてハイジャンプ

ノーサイドみんな仲良くうさぎ跳び

ときめきを増殖中の積乱雲

幸せは未来志向の色で咲く

鳥取県 北村稔

父さんが早く帰った楽しい夜

ねえあんな今夜私は雨のよう

川柳でノーベル賞が出てもよい

うれしけりや笑いかなしい時は泣け

生んだ子を虐待なんて分らない

鳥取県 石谷美恵子

家族中コメント書いたお札状

二流だがいい人柄に惚れている

噂にも賞味期限があると知り

銭もつとひとは足音まで変わる

秋に入る口惜し涙を引きずって

鳥取県 山下節子

一輪車孫が得意の顔で乗る

輪作を土砂災害が狂わせる

介護する人を気づかい爪を切る

腹減った育ち盛りの合言葉

公民館二流ばかりのコンサート

鳥取県 斉尾くにこ

広げてる両手に来ない赤トンボ

ジュゴンとなつて青空泳ぐ日曜日

打ち解けてはだかんぼうになった悔い

必要とされて局は光りだす

歩きだす心の荷物詰め替えて

鳥取県 深田 俱久

松江市 三島 崧丘

22年今年の漢字思案する  
人生の要所要所に酒の席

あやとりがうまくて女子の輪の中に

ふる里のハミング涙湧いて来る

時移れど我は軍歌と共に老い

鳥取県 竹信 照彦

お骨移動精霊の抜き入れをする

お骨にも精霊ありという和尚

お彼岸に来た精霊は何処から

ご近所は祭りご当家黒い服

迎え火も送り火も仕来たりだろう

鳥取県 田中 一眸

蜂の一刺し覚悟の紅は赤々と

深いシワ阿修羅の晴れる日はいつか

口笛で三途の川を渡りたい

玉音が流れ反転した正義

深い穴這い上がる気を留めている

松江市 松本 知恵子

祝千号大阪の灯を後にする

介護する深い処で世を見ている

真実の深さ寝言の夜の底

水漏れがないのか隅を確かめる

一隅を照らす月あり時を待つ

出雲市 森 茂美

九条が脳裏を走る社会面

用意した返事並べて考える

女房も困った顔で横に居る

被災者の声が聞こえる社会面

おみくじを枝に結んで鳩を呼ぶ

松江市 川本 畔

ほつほつと吹き出した白い萩

浦島太郎みんな知らない里の顔

知らぬ寺知らないままにお経読む

秋風が少し笑ったようだった

ゆで卵一つ残して出ていった

松江市 小川 注湖

ボーナスでやっとなつじつま賃カット

茶髪の子やる気と根気見せている

一芸を持って順待つ忘年会

北のアナ大本営を思い出す

米寿祝いたつぷり聞いた昭和談

姿見に女袖の秋を着る

紺紺農一筋の古日記

手押し車頼り彼岸の墓まいり

湯豆腐を崩し地酒の味を呑む

大根の潔白刻む鍋料理

出雲市 小白金 房子

島根県 持田 多輝子

千号の鐘を鳴らしに友集う

塔の灯の明々点り揺ぎ無い

絵師と書家一度に亡くし淋しい日

旗手の役嫁に譲って従っていく

手繫いで仏の声をきき歩む

出雲市 伊藤 玲子

美作市 大石 あすなろ

あり得ない旅の話はもうよそ

思い切り夢を見ている一人部屋

迷わずに食後のくすり飲んで

気は若いドレミの歌を口ずさむ

限界という跳び箱を積んでいる

出雲市 岸 桂子

美作市 福原 悦子

時々尻尾を出して気張らない

お前も独りわたしも独り猫拾う

朝顔が昨日の思案からませる

一夏で八キロ減っていた猛暑

マニフェストみんな咲かすと樹が枯れる

島根県 伊藤 寿美

美作市 山本 玉恵

農に生き悔いることのみ思いだす

とりえなど少しもなく老いの日々

友は逝き残り少ない我が余命

テーブルにママの幸せ盛るお皿

成りゆきに任せ主治医を信じてる

煙幕を張って先手を打っておく

巢立つもの大きな愛に包まれて

お荷物になるのを嫌う万歩計

力にはなれぬが愚痴は聞いてやる

外面がよくてどうやらもてるらし

ささやかな願い晩学実らせる

奥座敷亡夫の書斎で対話する

輝いた時を忘れた顔の皺

夕暮れに心の焦るベンがある

二流だが役に立ちますボランティア

平凡な女で終るも幸せか

欲も得も捨て生きのびて来ましたが

愛の起伏に命をかけて今日までを

こめかみに未完の夢を溜めて今

生きて来た頂点もどん底も知らずして

真庭市 国 米 きくゑ

幻の長寿だったと言うショック  
認知症答えの出ない白い刻  
腰痛を押して立つてる吟舞台  
藍色に指まで染まる茄子の味  
燃えている十指澄んだ眼手話の恋

真庭市 福 嶋 智恵子

ノーベル賞日本の頭脳誇らしい  
宇宙好きでも地球人素晴らしい  
きっかけは下手なボールが弾んだ日  
田が稔る和む心の原風景  
今時のファッション案山子競い佇つ

竹原市 石 原 淑 子

目には眼を隣の国の牙を観る  
気がかりを一気に吐いて雨が上る  
揚げ茄子に柚味噌母の味になる  
ノーベル賞資源の無さの生んだ知恵  
後や先隣近所の計が続く

竹原市 岩 本 笑 子

助けて下さいアナログの断末魔  
宮島の朱色は海のと きめきか  
カマキリのオスは本望だったのか  
満月の眠る女神は私です  
ガンを眠らせ三度三度の葉飲む

竹原市 時 広 一 路

お喋りもその内消える花畑  
見渡す限り全て舞台の雲のシヨ  
八十路まだ未練があるか葉飲む  
古い独り花の種でも播こうかな  
喧嘩相手の無いのが淋しい独り住む

府中市 馬 場 利 子

失敗を重ねて歩幅狭くなる  
風向きが変わると空の青いこと  
世の中は救い救われ風の中  
幸せは平凡に生き夢を抱く  
夕焼けに明日の迷いが消えてゆく

府中市 藤 岡 ヒデコ

しつかりと目を見て話してくれる  
空振りの時も本気で出す力  
遅く来た秋に文句を言ったとて  
しんみりと過去偲ばせる秋の風  
我が里の松茸を知る人も老い

宇部市 平 田 実 男

会長にされてまあるくなりました  
天下った人へ馴染まぬ生き字引き  
自治会の水戸黄門にされました  
いたわられその嬉しさと淋しさと  
ちよい悪の女のほうへ男の目

美祿市 安平次 弘道

コツペパンぐらいでお世辞など言えぬ

聞き役に回り地酒をぐいとあけ

ジャンプするたびに気になる青い恋

絵にかいた餅が目線の上になり

赤エンピツ持てば口だけ医者になり

東かがわ市 伊勢 八重子

紅葉を背負い山家の柿すだれ

長い道一緒と決めた角隠し

人情に触れて戻った落し物

桂浜眼下に龍馬凜と立つ

夕やけ小やけ唄が流れる里の道

東かがわ市 川崎 ひかり

本質が見えないままに会終る

送迎のないふる里の無人駅

頂点で待っていたのはブルータス

追伸を書く頃消えた力瘤

亡母呼べば少しゆらめく仏間の灯

東かがわ市 原 賢

目線下げ見れば許せることばかり

たかぶりを押さえながらに孫論す

自己主張出来ずにそっと吐く紫煙

ほどほどの距離を保った友だった

ポケットに恋眠らせたままに古い

高知市 小川 てるみ

朝の水ごくり命を漲らす

人生の要へ釘が定まらず

少々の毒は薬として生きる

ばつさりと切った尻尾が生えている

花束へ一言添えてある温み

高知県 小澤 幸泉

聖書読むわが人生をふりかえる

逝く年のあとふりかえることもなし

激動の世間にひとり杖で立ち

われもまたヤコブの梯子かけ登る

病床のやみに晨の光入る

松山市 古手川 光

毒茸ついうっかりが恐ろしい

木枯らしが吹くと恋しい蝉しぐれ

白も杵も暇を出されて寂しがる

神さま何か悪いことしましたか

チャンネルをどこに変えても騒がしい

松山市 高橋 宏臣

見過ごした景色の中で花をつむ

刺のない薔薇に息の根止められる

曖昧に生きて研いでる米二合

見てきたように描いてあります地獄絵図

ナルシストの鏡にヒゲを書いておく

松山市 宮尾 みのり

唐津市 市丸 晴翠

頭脳派のカラスに主婦がまた負ける

ホスピスの静寂覚悟せよと言う

竜頭蛇尾過疎はますます過疎になる

年金が足りぬ足りぬと遊び癖

カラオケのドレスへ誰も批評せず

大洲市 中居 善信

あれは幻二度と出会いは無いだろう

僕の癖万年筆が知っている

スパーを梯子するほど暇でない

しがらみも義理も持たない都市砂漠

黒は黒振れない芯を持っている

西予市 黒田 茂代

すつきり髪まとめて秋の中にいる

哀しみを掬って秋風に乗せる

亡き人に貰った菊が凜と咲く

おうし座の生まれです詩になりにくい

躓いて転んでわたし流に生き

福岡県 林 さだき

父と遊んだ記憶などなし父の忌よ

遊びから見付けた僕の処世術

入門書ばかり読んでる遊び下手

遊ぶこと知って長生きしたくなる

本棚の行方心配する老後

おまけだと思えば楽し八十路坂

順調に惚けて来たなと共白髪

メス三度入れた体が行く八十路

再会の友爽やかに老いている

動かない脚を励ます万歩計

唐津市 樋口 輝夫

思春期の子をおろおろと叱る筆

漢字読む力ためすか書道展

交番の手配写真に似てる友

整形後まだ出てこない試着室

生き延びる意欲をもらう介護の灯

唐津市 山口 高明

参拝の心身清む五十鈴川

笑つても泣いても僅か持ち時間

三度目の正直知らぬ風の神

ご近所も承知している石頭

若者の思考回路が解らない

唐津市 坂本 蜂朗

間違つて見せて生徒に慕われる

お若いと言われ帰宅しのびている

若い娘に褒められ家で見える鏡

ブレーキをきしませ進む喜寿近し

肩肘を張る友人に酒を注ぐ

唐津市 井上勝 視

老妻を氣遣っているエゴである  
凡人も復活したい欲はある  
余命でも一日ひと日の夢はある  
見え透いた嘘もニコニコ聞ける齡  
設計の夢に寿命が不足する

(前月分) 鳥取市 吉田 孔美子

家族でしよふるさとしてしよう馴染めない  
こんな事常識外よ出番なし  
朝と夕百八百度氣が変わる  
食べる物畑作りをやり出した  
社会から逃げて畑に精を出す

(前月分) 松江市 小川 注湖

大皿盛り家族の笑顔集めてる  
白い飯味噌汁の味日本人  
黄金の笑りの秋も過疎淋し  
共学の憧れ娘門で待つ  
ローンが済み一軒持ちの家主です

## 寒中見舞募集

本誌平成23年2月号掲載

締切 12月23日

川柳塔社事務所宛

一九五七年を送るの辞

岸首相が三悪追放を叫ばれたが  
貧乏は何処までも続き  
暴力はびくともしない  
汚職はいまだに氷山の一角  
と、いうありさま。

こんな世相の中で、我等は貧者の  
一燈の如く、文化のともしびをとぼし続け  
て来た。

顧みて悔いなき一年であった。

(川柳雜誌・昭和32年12月号)

——路郎

一九五八年を顧みて

ナベ底景氣という言葉は  
年中ナベ底景氣の私達には  
ピンと来なかつたが  
勤評問題や

警職法改正問題の騒ぎでは  
嫌な思いをさせられた  
サックドレスの流行は  
幾らか印象的だったが  
フラフープの流行には  
呆れる外はなかつた。

(川柳雜誌・昭和33年12月号)

——路郎

# 自選集

小島蘭幸

前 たもつ

一〇〇一本の灯が輝いてますように

一冊の本と輝きだす書棚

師も父も私も銀盃が似合う

祝杯はひとり小さな灯がともる

あつけらかなと母手術日を決める

仁部 四郎

政岡 未延子

育メンの息抜きになれ洗濯機

息抜きに妻とデートでバーゲンへ

息抜きに裸足コースを公園に

野仏が「後期」の坂の息抜き場

マスコミを叱って「後期」息を抜き

林 瑞枝

三宅 保州

許される軽いジョークかトカゲの尾

吐息ふと視線は腰にバリモード

また一つ生命の賛歌聞く廊下

恍惚の瞳が澄んでくる午後の椅子

青い眼のカメラに脱いだ祭り獅子

豊作の松茸籠に秋の天

子連れ熊必死で里に下りてくる

口三分耳は七分と決めて生き

考えを変えて一日若かえる

暗記することは聖書に教えられ

不思議にも頭さげれば風が止む

諸国漫遊何でも知っている鯨

蕾から急に大人になる石榴

逆立ちが出来てるんるんの一日

探しても眼鏡かくれて笑ってる

極楽を見てきたように説く僧侶

非常口あって安心してしまう

命日の頃に今年も咲きました

売り言葉買ったら高くつくものを

どいてどいて若葉マークのお通りだ

宮西弥生

脆いから秋の出会いに近づかぬ  
北海のプリプリ届くエアポート  
山越えの風は無色で美しい  
熱爛の向うで噂が騒がしい  
いつ時の火遊びだった曼珠沙華

八十田 洞庵

感情を気ままに見せる海が好き  
ファミコンの孫にきびしい舞扇  
まだ売れぬ絵を書いている絵の具皿  
迎えに出た兄も帰らぬ夜店の灯  
真実を追うペン弱者への味方

両川 洋々

愛つづるペンの先から春覗く  
三途の川原で淋しがり屋の鬼が待つ  
割り引いて聞こうしよせんはマニフェスト  
氣象庁予報を笑う雪おんな  
神へ誓う告白に嘘ないはずだ

板尾 岳人

石橋を叩いて渡る受精卵  
ナポリから帰って来ない赤トンボ  
消しゴムを買いに出掛けた広辞苑  
淡雪が解けて燃費のわるい恋  
秋草秋雨降る旅支度(樟八尾ランドホテル西尾会長)

奥田 みつ子

一〇〇〇号に記念の一步残せたか  
梢わたる風が気力に火をつける  
賞讃に酔って己を見失う  
再スタート昨日と違う私です  
旅路はるか今はうつつか幻か

河井 庸佑

反論を真摯に受けるのも器量  
手の内を読まれたらしい防御策  
板挟み悩み尽きない辛い役  
発想の転換活路探り出す  
さりげなく打った一手を見透かされ

川上 大輪

開花宣言したのに私開かない  
途中下車してから気付く勘違い  
喋りたくてうずうずしてる腹の虫  
レンジでチンした友情は冷めやすい  
不健康な場所はやっぱり面白い

木村 あきら

落葉かきお隣同士芋を焼く  
円高でサントの袋チトすほみ  
肩書を外し張子の虎になる  
残り物食べてカアさんよく肥り  
枯れてまでダブルで墜ちてゆく松葉

小西雄々

年末の空に一枚戯画うかぶ  
訃報欄ゆれる心に師走風  
手の平に広がる海へ妥協案  
パソコンへ指の動きは負けぬ喜寿  
亡母からのエール難聴気にしない

斉藤 劼

肩ぐるま遙かに祖父の背を越える  
日本一の桜支える幹である  
ぎくしゃくはよそう地球の仲間です  
上を向き歩こう遙か花野まで  
太陽がぎつしり詰まるりんごです

塩満敏

ふるさとの傘寿の祝い出来ました  
ほどほどにせえと沖繩怒り出し  
美しい笑顔優しい母だった  
飛行機で父母の墓参にやって来た  
火曜日は熟女と遊ぶ楽しい日

新家完司

一千号祝賀大会万歳  
出席者五百数名皆仲間  
心底感動木津川計講話  
期待大小島蘭幸新主幹  
副主幹拝命恐縮千万也

恒松町紅

旅をしたあの頃思う車椅子  
顔色がいいねと何かくすぐられ  
久しぶり貴方もですか杖比べ  
兵隊の頃思い出す針を持つ  
酔っている顔だコスモス笑ってる

津村柳伸

尻尾振る犬に着せたいニユールック  
主役の座降りる白菜夏野菜  
断りもお詫びもせずに減る年金  
万病に効く温泉の顔馴染み  
生活の知恵リフォームが上手くなる

遠山可住

ご先祖の声にぎやかに森の風  
夕立ちを忘れた空よ人乾く  
老々の内緒ばなしが通じない  
手作りの田舎が売れる道の駅  
まだ死ぬぬ八十路へ兄も姉も居る

都倉求芽

千載一遇この大会に僕はいる  
長引いた残暑血液蛇行する  
うやむやにされて無念な花言葉  
夢は夢 運は運とて歩く日々  
楽観と用心 自分に言い聞かす

土橋 螢

気の毒な人を探しに行ってくる  
稲刈って米売るまでの重労働  
南無ナムと呟くようになってきた  
雲千切れちぎれて冬がやってくる  
清らかな水を育てている皆

西出 楓 楽

セピア色にならぬ思い出だつてある  
本当のこと言う時は嘘めかす  
好奇心つつかい棒にして生きる  
珍客へ普段のままを見てもらう  
しゃべってもしゃべり足りないといとこ会

### ◇お知らせ◇

\*第35回 全日本川柳2011年仙台大会

日時・平成23年6月12日(日)

会場・仙台市国際センター

\*第17回川柳塔まつり

日時・平成23年10月10日(月)

会場・ホテル・アウィーナ大阪

\*新年号より新家完司さんの「せんりゆう漫歩」  
の連載が始まります。

## 温故知新

川柳句文集『川柳寄席』(昭和51年発行)

不二田 一三夫

子が嫁に行くのでコンビ解消し  
兄弟にしておく人気上昇中  
名コンビ師匠をもつたいたなくも撲ち  
高座では妻家へ帰ればお師匠はん  
家庭まで妻突っこみをもってくる  
奇術師が家庭で名刺見つけられ  
奥さんへある日付け人ウソを云う  
昼も夜もお早うさんと楽屋入り  
二つ目になって母親やつと折れ  
しゃべくりのお手本高座のセントルマン  
芸人の不運知らぬまに死んでいた  
芸人が国会議員に成り下がりが  
都落ちしてからコンビとも別れ  
芸人の何かわびしい肩が好き  
一人になれば芸人目を伏せる  
熊がおじぎしてると人間が思うだけ  
娘三人みな惚れられて嫁つちまい  
言論の自由NHKに締めだされ  
人間は愛しあうもの陽は一つ  
まだ恋の目でないことがもどかしい

# 川柳塔の

## 川柳讃歌

72

木津川 計

曲想の浮かんだ作曲家に優れた曲が生まれるのである。イメージを描けて建築家はユニークな設計図を書け、テーマを鮮明にして作家の名作は誕生したのだ。

出会いがある。触発もある。転機も来れば、やる気も起る。一〇〇〇号記念を目前にして同人諸賢の溜めに溜めた川柳のマグマが噴出した、としか思えない。今号の溢れんばかりな佳句秀句を前に、僕は「川柳塔」の新たな地鳴りを体感している。

「ころころ」乳房が二つあるように

居谷 真理子

「君にふたころろわがあらめやもモンロー(薫風)の誓いもころころ二つで揺れて。

延命は不要と妻に書かされる

三浦 強 一

「ころころ二つ」はここにもある。思いやりというか、急かされる終末というか。ああ。

階段の手摺り悲しいほど光る

岸 桂子

道しるべが人の世の悲しみなら、手摺りは頼られて痛切。手ぶらで歩けるうちが花だ。

声あげて泣ける子供が羨し

原 さよ子

「涙」地の底の岩塩の如きもの(小野十郎、顔で笑うて心で泣く大人の悲しみ。男には花束よりものし袋

堀 正和

「酒なくて何の己れが桜かな」「花の下より鼻の下」「花より団子」と男は味気ない。香典不要知ってお参りする葬儀

福田 好文

香典は貧しき人の相互扶助であった。金持ちから貰わぬようになり今や8割が不要に。狡いとも思う分別とも思う

升成 好

「よくやった」と褒める。「よくもまあ」と貶す。「ようやる」で褒め殺す使い分け。喘み合わぬ一日だった食べ残す

大石 あすなろ

言いたいこと言えぬは腹ふくるる思い。不満足は消化不良だけでなく、食べ残しとも。会わないと会えないにある裏事情

星野 育子

片や恨み、他方は慙愧でどうして会えようか。離れ離れのままも忘れられない不幸せ。地球から預っている現住所

早川 遯行

自分の持ち家ではない。借家でもない。地球からの預りものと思えば、破壊はできぬ。多数派の中でひとりになっている

岩 佐 丹吉

志を同じゅうしても好き嫌いはあり、仲間割れもある。本来無一物同様な間も一人か。便りないのは元気な証拠とは言えぬ

富山 ルイ子

「会わない、会えない」に似て、「知らせたい、知らせない」相剋が随所にある地上。見舞いには来るなど言ってお待っている

柿花 和夫

「おおきに」がサンキューでもノーサンキューでもあるように、読みとるむつかしさ。不整脈のちの鳴咽とも思い

和田 つづや

不整脈は心臓の力所で血液が滞留して攪拌するから血栓が生じ梗塞に。正に鳴咽だ。余生という残り時間を鈍行で

吉川 寿美

急行に乗り、特急で急ぎ、あつという間の老境である。だから鈍行で取返しをつける。

〔上方芸能〕誌発行人

# 麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

不死鳥

水の垢

大男母を軽々船に乗せ

人妻の襷を外すその早さ

尺八をすてて自炊にかかるなり

椅子ばかり残してみんな寝てしまひ

その座敷仲居の方が庭を向き

奥さんの自慢の花がサツとこけ

屋根に出て膝頭抱く閑があり

売文社を興して

風すこしあれど船出の四十一

一平へふせうぶせうに顔を見せ

貧しさのながながしくも四十一

支那炭をつぎつぎ南画出来上がり

大金にこっちの事は聞いてゐず

いふまでもなく合服も月賦なり

マーケット女房の財布借りて買ひ

考があつてのこととかろくうけ

職人へ寝たよ寝たよと取り合はず

借金でくれた見舞とつゆ知らず

凧つひに黒点となるうれしさよ

雲助の戻りは月を見て帰へり

道真を訪へば只今お手習ひ

日本びいき箸の持ち方まで習ひ

戸張孤雁氏逝く

裸女の線にも悲しみのただよへり

寄贈品しみがあるとも云へぬなり

# 水煙抄

## 西出楓楽選

和歌山市 柏原夕胡

まごころが愛のかたちになつている

終わつたと思う終わらねばと思う

繊細な心オブラートに包む

好物をバクリしあわせが広がる

甘えたくて毎日泣いてばかりいる

五欲たつぷりカボチャに変わる馬車に乗る

豊中市 池田純子

父さんも母さんも居た秋祭り

あの世にもふる里便を届けたい

月観てもススキを観ても母が居る

いにしへの奈良の都に人の列

秋風に雅楽の調べ奈良に酔う

朱雀門くぐり天平人になる

紀の川市 宇野幹子

ポインセチア女の夢は燃えている

口ポットに教えてもらう労働歌

溺愛の海に嵌つた一人っ子

すんなりと妻から解く赤い糸

深読みがすぎて分からね風向き

美容院出て本望のコンパクト

岩出市 藤原ほのか

耳寄りな話にのつて火達磨に

風になりやつとあなたに辿りつく

マナーなど気にせず今日も弾きたい

光りだす母の形見の石ひとつ

福耳と言われてくじを買つてみる

点と線描いて君に会いにゆく

塩竈市 木田比呂朗

ああ遂に地デジの祝縛年を越す

飲み会が溢れ出してる予定表

クロネコで今度は賀状出すつもり

始めだけ付ける日記を買ってくる

スコッチのソーダー割とキザな奴

二十五時門灯だけは待っていた

昭島市 野口 忠

シャツを着て小便小僧ちよつと照れ

何にでも首を突つ込む半可通

普通ならよいと思つた子が鷹に

一球で延長戦にけりをつけ

妻の名の預金密かにポディービル

極楽へどう行くのかもナビに聞き

今治市 渡邊 伊津志

借りている方が人間らしい貌

無礼講の中に侵せぬ線があり

焦るほど言いたいことが遠ざかり

逃げのびてからの風にも気を配り

悲しみの極み言葉が消えている

目に見えぬ風を捕えている名画

和歌山県 森下 よりこ

明日あるを信じ頑張らないことに

祭りのあと片付けるのもお年寄り

盗まれた本尊人手から人手

私の回り子供手当に縁がない

ちよつと期待したがそれだけだった孫

暑過ぎた夏のせいです柿不作

富山市 有澤 嘉 晃

松茸をお裾分けする換気扇

医師よりも妻の一言気が重い

それぞれの暦で生きている親子

包丁のリズムで判る料理好き

四字熟語生かし持論を埋め合わす

人並みに生活できる有難さ

八尾市 赤木 妙子

熱帯夜月は涼しく満ちてくる

雨音で目覚める幸も久し振り

今日生きる幸だピチピチ初サンマ

かくし味は指先ほんのひとつまみ

世辞言えぬ父の遺伝子継いだらし

季を守り鳴き終え眠る蟬の夏

河内長野市 谷 久美子

世を渡る天命までの一里塚

解るのに時間がかかる省略語

器量だけ良くても食べて行けません

階段を上り切つたら物忘れ

夫婦喧嘩今日は一日貝になる

皺の手をしっかりと繋ぐ孫愛でる

東大阪市 西田 いくひろ

しゃれている嘘なら笑い事ですむ

禁煙を始めて鉛をしゃぶつてる

減速の暮らしにやつと慣れた古稀

世の中が歪んで軋みかけている

処分するスーツに未練まだ残る

想い出をたぐると過去が蘇る

佐渡市 高野 不二

混んでいた旅に満足して帰り

酒だけはおとろえませんと言う八十路

一日の日課眼薬粉薬

見当がつかず賀状を買いそびれ

いい事の思い出だけがある昭和

岐阜市 平野 あずま

団欒の輪が盛り上がる敬老日

粗衣粗食昭和を生きてきた自信

愚痴聞いて貰い心に消化剤

強運の運命線信じ込み

ねじれよし翼賛会の過去思う

豊橋市 藤田 千休

リストラの海で派遣が溺れてる

平成から見れば昭和のレトロ調

金遁の術か諭吉がすぐ消える

タフガイと言われ病弱とも言えず

激動の昭和を生きた力瘤

京都市 清水 英旺

雨一夜どれ十六夜の月めでん

人間のしたことだから許せない

過去未来より輝いていた今

革命児になるかなれぬか三代目

無口だが寄越す手紙の長いこと

大阪市 太田 としお

油蟬あれだけ鳴いて七日間

弥勒菩薩きつと野心はないだろう

勝ちました右に左にホームラン

ハネムーン派手にはできぬ三回目

植民地支配野心夢見た過去の傷

大阪市 笠嶋 恵美

同姓の呼名の度に顔探す

無理せねば定期検診良い結果

超嬉し親子四人の顔揃う

平城京遠い昔が呼びに来る

ぐち言わぬ私こわれてしまうから

大阪市 高杉 力

キタミナミまだ言い出せず阿倍野橋

妻の留守なんぞないかな冷蔵庫

受験期の子に豚まん土産買う

旅に出て夫婦の会話弾んでる

エキサイトつい出してしまう大阪弁

大阪市 田中 都

親切に囲まれている独り者

もう少し骨太になれ総理殿

もう怒る気力がなくて日々好日

また来年別れを惜しむクラス会

ポイントを集めて期待ふくらます

大阪市 橋村容子

泉大津市 助川和美

小さいが魅力タップリ日本国  
こだました故郷の山へ今一度  
朝散歩乳母車にはお犬さま  
早口に喋った人が先に逝き  
人間もとげがとれると甘くなる

大阪市 前川善之

何事もピンチはチャンスあわてない  
布ぎれのバッチワークの暖かさ  
国と国領土問題妥協なし  
極楽に行ってみたいが急ぐまい  
方言はその地方での宝もの

大阪市 松田聰

不発弾戦争の跡今もなお  
辛い時苦しい時に父想う  
いい夫婦一たす一が十になる  
団欒に亡妻の顔よみがえる  
油断して腰のまわりは浮き袋

池田市 上山堅坊

良い服もメタボの腹を庇えない  
虫食いの言葉通じる近い仲  
百均を千円持って闊歩する  
子供が乗る魔法に見える一輪車  
文化価値あまり認めぬ仕分人

言ってくれ父さんの子で良かったと

人は何故淋しくなると海に行く

スーパリーの帰路冷凍とける立話

俺のこと詠むないいつつ目が笑う

子の世話になるまいと履くスニーカー

泉佐野市 稲葉洋

経読んで誰かと対話出来たよう

いい事がありそう冬の日本晴れ

おでん鍋具も偏ってひとり者

永らえて後期分母の一分子

一年の懺悔の声か虎落笛

茨木市 島田誠一

上ばかり見て横ヤリに遅れとる

平和でも国は全身傷だらけ

外堀りの埋まるを知らず内輪もめ

年長に花をもたせて丸く生き

国のため値上げいとわず愛煙家

河内長野市 梶原弘光

まとめ買いまた禁煙を先送り

地底から元気をくれる鉱夫達

老人会ジュニアシアニアに仕分けされ

持ち歌が底つきそつと席ずらす

僅差でも大負けしたと悔しがる

河内長野市 木見谷 孝代

燃えつきた蟬の亡骸美しい  
それぞれの尺度で決める物の価値  
人の価値とやかく言われたくはない  
弔辞ではさらりと褒めてもらいたい  
介護する人へこそ要る助け人

河内長野市 辻村 洋子

下駄箱が子の成長を知っている  
嫁入りに持たせた下駄は箱のまま  
いらいらの元は小さな誤解から  
飲みこんだいらいらまでも見るカメラ  
お茶お花花嫁修業出来てます

河内長野市 針生 和代

無我夢中生きた証の深い皺  
山車の音遠いあの日を連れてくる  
コスモスの迷路に入る一輪車  
過疎の土地価値は無くとも母の里  
北向地藏慈顔に会える万歩計

河内長野市 山本 エミ

雨戸開く隣の達者聞いている  
当ても無く八十路ことさら靴磨く  
喜びは手料理上手いい夫  
接骨院馴染の顔で華盛り  
もうチヨット派手に咲きたい古希の華

河内長野市 山室 光弘

肥える秋何故に守れぬ腹八分  
取りあえず節煙にして先送り  
母さんの鼻歌今日も平和なり  
意のままにならぬ世間と妻の口  
歯に衣を着せて上手な社交術

堺市 近藤 治子

とし重ねとりわけうれし孫の声  
とことんを追求しない親心  
お兄ちゃんだからと我慢させられる  
品格の宜しい犬が主人づら  
年上が頑張っているさぼられぬ

堺市 澤井 敏治

貯金より先に命が目減りする  
親に背を向けてケイタイ見る子供  
左遷地と言うまいそこも人がいる  
指差呼称確認をして薬飲む  
一勺の酒を甘露と知った今

堺市 内藤 憲彦

核心を一気に攻めるコップ酒  
帰り道お地藏さんに会釈する  
男なら嘘をまことにする努力  
川を越えればそつと古里の風  
禁煙をしたが小遣い減らされた

吹田市 二宮 栄子

リハビりに話はずみ歌も出る  
豆台風帰った後の部屋掃除  
独り住み日暮れ淋しい秋の日は  
蛇口の湯受けて苦勞の亡母思う  
いつか逝く浄土のみやげ善を積む

高槻市 島田 千鶴子

ひと雨で秋色になる朝の風  
彼岸過ぎまだしてません衣更え  
無欲にはなれない朝の薄化粧  
手鏡が内緒でみてた笑い皺  
交差点の中で捜しているむかし

高槻市 初代 正彦

礼状を投函するとほっとする  
知らん間に主人の癖を見抜く犬  
犬までがうたぐり深い顔して  
泣き虫も立派に育ち今は親  
おととつとこぼさんようにキユツと飲む

豊中市 荒卷 夢

落蟬の風に吹かれてころころと  
赤松の幹の曲がりの色つぼさ  
この命いつまでと問ひ爪を切る  
まどろみに入りつつ消える名句かな  
たぎるものなければこの世モノトーン

豊中市 源田 啓生

私には未だ残つたロスタイム  
騒いでる間は不安消えている  
大國にとことん言えぬもどかしさ  
しくしくと四辺の鳥が泣いている  
ポランティア神がポイント貯めてます

富田林市 古田 千華

夏終り闇夜がガツと口を開け  
乱歩読む良夜の窓に河童見た  
へら釣りの竿の曲線美しい  
フツフツと泉のように湧く予感  
かすみ草惑わず役目果して

富田林市 山野 寿之

春を待つ恋から愛へ長い旅  
五欲みな抱いたまんまで秋の坂  
天秤の真ん中辺にいる私  
ありがとう言われるあなた好きになり  
正論を吐いて世間を狭くする

寝屋川市 岡本 勲

火に油そそいだようなホラを吹き  
のれんだけでは食えなくなつた道頓堀  
見込まれるのか無理難題を出す上司  
好きだから無理はだまって聞いている  
各駅停車で行くと決めてる我が余生

榎屋川市 小谷 滋彦

八尾市 中島 春江

うまい酒ほろりほろりと秋夜長

肅々と生きてはおれぬ高齢者

掛け違いボタンの位置が罪つくる

紙の辞書引けぬ子どもが優等生

空海の山追いかけて遍路行く

羽曳野市 宇都宮 ちづる

万歩計軽やかにする金木犀

不作らしい曲がった胡瓜主人公

チラシ見て要らぬ物まで買って来る

下駄箱で欠伸しているヒール靴

虫の息それでも汗の町工場

枚方市 河田 洋子

親の歳越えておまけの命です

これからも越えたい坂が待っている

高い山越えればみえる青い鳥

親の歳越えても母に近づけず

割引きと聞けば買いたい癖がある

箕面市 寺井 柳童

環状線暑さしのぎに利用する

もう少し髪の毛あれば七・三に

千円にひたすら我慢ETC

逆転に遅くて速いと金攻め

彼岸花数珠玉競い遅い秋

ほがらかな人にもあった悩みごと

事故現場わき見運転しています

よく眠り食べて歩けと医師言うが

苦にするな眠れぬ夜も朝が来る

古い先を思案するより今を生き

八尾市 前田 紀雄

冬支度大根菊菜種を蒔く

毬栗が秋の風情を連れて来る

継続が記録を作る源だ

何となく境界線が騒々しい

腹案も特効薬もない不況

八尾市 山根 妙子

眠るよう来世に渡るそれが夢

歩道橋渡りまちがえ遠まわり

スピーチの終り待ってるオードブル

家中のあちらこちらにメモがあり

説明書読めないような小さな字

大阪府 神野 千恵子

ベランダがいい頃合の庭弄り

世渡りが下手で自然と仲がよい

ねじ一本頭の中でカラコロリ

昨日今日明日と予定は同じまま

深々と下げた頭が軽すぎる

大阪府 畑中節子

大根の間引き終えたぞさあ太れ

雨音を聞いて落ちつく農休み

栗のいがはじめてコロリひとり旅

刈田畦棚田百選彼岸花

竿売りの声遠くから風に乗る

大阪府 若月祐作

縁台に線香花火懐かしむ

虫の声秋の夜長に亡母の影

夜なべして居眠りしてた亡母おもう

お別れの知人が続くこの猛暑

いざ本番ラストでまたもずっこける

神戸市 木村忠義

猛暑日に元気をくれた百日紅

剪定で存在感の増す植木

免許証名札代わりに持ち歩く

正しくよりも賢く生きると決め

缶よりもやっぱいいいな瓶ビール

神戸市 山根弘子

日が暮れて砂場に残る三輪車

田舎道古き名残りの水車小屋

大海をゴール目ざして泳ぎ切る

世の中を上手に泳ぐ口達者

日焼けした元気な子等の地蔵盆

尼崎市 小池幸子

飢えた日の記憶無駄食い許せない

八十路坂何時まで出来る身の世話を

アバウトが私らしい味を出す

罪深く生きた自分に悔いの刑

保冷剤酷暑の今夏救世主

加東市 安達厚

名月の丸さに心洗われる

祭り雨神も天候ままならず

貧血に検査のためと血を採られ

人は街猿は里へと移り住む

写経する心が文字になって出る

加東市 黒崎美紗子

畑仕事やめるにおいしい夕焼けよ

平凡な暮らし素通りする神社

ゴミ出し日忘れないよう気をつかう

ほどほどの元氣静かを望む日々

松茸に見えたそっくり細工物

篠山市 石田久子

少しづつ猫背になった影を見る

なにもかも打ち明けて来る墓掃除

ニガ瓜の蔓が浮気し隣まで

お友達PPKで旅に立つ

ここだけの話が早く風にのり

篠山市 酒井真由

三田市 辻開子

米作り続けて生きて半世紀

真心やこの世のことはこの世にて

歳月が笑い話にするだろう

月天心家々の屋根寝静まり

台風の目の中にいるディナーショー

篠山市 沢山啓子

分け入って言葉の森に夢探す

恥多い履歴に赤く曼珠沙華

人という森になじんで人になる

藍の香にしたたか酔って白木綿

計算は不得手神もわたくしも

篠山市 谷田多美子

爪真つ赤それがお洒落と思う人

幼な日の故里の夢北斗星

般若経あげつつ邪心こみあげる

昼の雨猫の軒と一人酒

おとうちゃんススキと萩です七回忌

三田市 尾崎一子

里山の大きに抱かれ眠る夫

誕生日まだ若いやん孫エール

好奇心挑む力が若くする

患者さん言葉一つで元気になる

ひとり居の亡夫をしのぶ秋夜長

孫の世話出来る幸せ噛み締める

体感の温度差あつて部屋別に

孫という宝が増えて元気づく

加工品産地の顔が見たいもの

秋の食ストレスたまるダイエツト

宝塚市 丸山孔一

戒名は短くて良い無くて良い

なんでやる収支合わずに日が進む

踏切の警報聞いて走らない

娘出張犬預かりに新幹線

大仏も切羽詰まれば歩くかも

西宮市 泉水冴子

貧乏が骨の髄まで沁みている

ロボットが世界征服しそうだな

パラサイトシングルという甘えかた

保証人ビジネスという落とし穴

ウイスキー昔の顔でリバイバル

西宮市 吉井菜々子

ご覧あれ空一面の鰯雲

長生きしてねわたくしの拠り所

仕舞風呂柚子もわたしも逆上せてる

おやすみの落語にすこしウイスキー

夕星がきらりとときめく人がいる

奈良市 大久保 真澄

剥がしてもはがしてもまた欲の皮  
妖怪に日本の政治操られ

核廃絶傘の下から折っても

子を育て子に育てられ親の顔

食欲ないなんていつべん言いたいわ

奈良市 尾畑 なを江

乗り換えて田舎だんだん遠くなる

大袈裟な話割り引き聞くことに

幸福にする約束の頼りなさ

こんなにもダメになったかああ日本

ゼロ金利筆筈の方がましかもね

奈良市 加門 萌子

揚羽蝶ひらり亡姉か亡母なのか

美しい海が荒れてるヒト科ゆえ

テレビでは食べてばかりとおふざけと

一億が絵白痴化と大予言

不機嫌な世ですな季節またがって

奈良市 前田 弘恵

お相撲さん勝っても背に土つけて

何年も親の居場所知らぬとは

特売日欲が欲出し買いきる

野菜値の上がつたままで秋迎え

イクメンがイクメンよりも持てている

奈良市 矢野 良一

ナツメロにセピアな記憶蘇る  
隠れてた秋を大雨連れて来る

鈴虫の声が誘う古都の道

やっと咲く十日遅れの彼岸花

田の黄金赤く縁取る彼岸花

奈良県 谷川 憲司

おばちゃん値切り倒してあきれさす

ドック入り不安あれこれ結果待つ

再検査医師の指示多多じつと聞く

山林が荒れ農漁業危うくし

トラツクのスーパードルマ頼る過疎の街

奈良県 牧野 隆之

今もなお母が生きてる視野の中

ひとときを夢の世界に招く虹

色褪せた虹の掛橋赤を足す

言の葉の魅力にふれたチングルマ

減反の瑞穂の国の見えぬ飢餓

和歌山市 磯部 義雄

出たところ勝負でいつも火傷する

妥協する心はちぢに揺れ動く

分別を知らぬ躰で子を泣かす

禁煙は値上げのお陰妻笑顔

鉛筆で直線ばかり引く愚直

和歌山市 上田紀子

アドリブが冴えてる今が絶好調

大輪を咲かす人の輪笑いの輪

シンデレラの気分システムキッチンで

自己主張まっ赤なバラに叶わない

捨て切れぬ欲とエゴとのせめぎあい

和歌山市 土屋起世子

食べ放題チラシの文字が私呼ぶ

儲け話びくびく耳が動いてる

天下取る耳と仲人言ったけど

エリートになれず小芋の泥をとる

母の道辿り背を押す風に逢う

岩出市 村中悦男

里みやげ隣の人も待っている

古里に植えた記念樹来いという

労作にこたえ白菜堅く巻く

泥ついたまんまが良いと里みやげ

年に合う畑の仕事に生かされる

海南市 小谷小雪

手をとって目と目を合わせ介護する

母の手をとって辿ろう九十九坂

出る杭になってみたいが恐ろしい

散髪をされて庭木も軽い肩

どんぐりが怒ったように落ちてくる

紀の川市 北山絹子

ああ夫婦大事な事を聞き洩らす

はるばるとたま駅長に会いに来る

妻不在秋の夜長を持って余す

母子手帳命の重さ知っている

人間を垣間見ている夜の月

紀の川市 辻内次根

貧しさも中学卒も隠さない

感動の涙忘れてる月日

失敗の思案のなかで目が覚める

幸せな家族で布団干してある

まだ生きるつもり部屋の片付かぬ

田辺市 大峠可動

満月が欠けても笑う曼珠沙華

饒舌が過ぎて理性の色を抜く

自己嫌悪七ツ転んでまだ起きず

彼岸の合掌火刑を知らぬ浮世から

感無量一つで足りぬ玉手箱

橋本市 石田隆彦

わくわくの明日の予定を抱いて寝る

老犬がゆっくり揺らす忠義の尾

ネクタイの裏にたまっている悩み

はやきたいことが詰まっている煙草

幾何学を学んだような蜂と蜘蛛

鳥取市 近藤 秋星

猛暑から一気に秋が駆けて来た

人生に今日という日は二度とない

八十歳さらば逝く夏逝く秋よ

天敵の冬が近づく音がする

コスモスが菊にバトンを渡してる

鳥取市 津村 律子

うっかりを許す夫に感謝する

亡母さんの前では嘘はつけません

一二三もどかしいけどすぐ立てぬ

あふれる湯うさがドンドン消えて行く

湯たつぶり肩までつかり客気分

鳥取県 橋谷 静江

神仏を信じて生きる今日も無事

身体の関節油されてくる

夢だけは大きく持つて生き抜いた

亡母の味覚えています三姉妹

何事も誉めて上手に孫使う

鳥取市 松原 ひとみ

天命を受け入れた背な清々し

ソーメンへ味方のはずが夏肥り

ハイカラ決めて後で泣くカード払い

自家用に一味違う天日米

みょうがの子食べ過ぎたのか健忘症

鳥取市 山口 千代子

歳老いて体形だけが丸くなり

良いことばかり続くと恐い予感する

満腹になつてウエスト止まらない

仕えるも親孝行も古語となり

秋風が肌を撫でれば淋しくて

倉吉市 前田 喜美子

日向ぼっこ猫が一匹無人駅

命綱揺らす年金受給額

栗ごはんちよいと忘れるダイエツト

あと五分時計にらんで床の中

ボール蹴り孫のお守りも楽じゃない

米子市 小塩 智加恵

長靴で新米かつぎ友が来る

がんばりをほどほどにして老い楽し

外出の無い日は門を閉めておく

爺婆の達者なうちに曾孫ほし

田舎道知らない同士こんにちわ

米子市 後藤 美恵子

当事者が敬老会の準備する

独り居のだれ憚らず咳をする

車椅子亡夫を押しして兄も押す

影が悄気ないよう今日も胸を張る

折れそうな梢が花芽だいて

米子市 竹村紀の治

目覚しに昨夜のバカを嗤われる  
空腹と暖簾に負けた酒の虫  
母さんのカレー大好き腹時計  
ホロ酔いを超えてブレイキ甘くなる  
肩を組み校歌斉唱古稀の会

米子市 見山温子

モーツアルト聞いても名句浮かばない  
彼岸花秋風吹いてやつと咲く  
異常気象不作に畑泣いている  
カーテンも家主と共に色あせる  
蚊一匹に振り回される熱帯夜

米子市 野川宣子

織り交ぜた情け馴染んで老いふたり  
なつメロで昭和の風に出会ってる  
目をとじて出会える母は若いまま  
咳ひとつ私の居場所確保する  
今朝もまた恙無いよう手を合わす

鳥取県 飯野菖子

びつたりと願ひ適わぬ人生路  
玉の汗黄金の波美しい  
箱の中ひなは春まで出られない  
雑草に負けぬ根性生きている  
秋の風息子に彼女連れてきた

鳥取県 岡本幸枝

声かけも希薄になった寂しい世  
純潔を唱えば死語と笑われる  
晩年は老々介護いうきずな  
小銭でも文句云わない鎮守さま  
介護うけ尊いものを学び得た

鳥取県 岡村孝明

頂上はさわやか千の風に会い  
仏滅をいとわず拳式合理主義  
三Kを承知で仕事探してる  
町長杯きそわせ地域活性化  
イベントへゴルフ加えて盛り上げる

鳥取県 田口清帆

夕焼けて漁火の沖暗みゆく  
稲刈って遥かに残る地平線  
誰が何時どこで上げるか消費税  
幸せと最後に書いて返信する  
風鈴をそっとしまつて夏終る

鳥取県 前田孝子

気まぐれな雨は紫陽色に降る  
秋ですねあなたの色に染まりそう  
秋の夜はもったいなくて眠れない  
生きている証しに深く息を吸う  
夫婦愛変な所がよう似とる

松江市 相見 柳 歩

きらきらと光る生き方してみよう  
ハートには仏の遺伝子が育つ  
忘れよう誰かにしてあげたことは  
親になる前に学んで親になる  
新しい軍手で包むこの星を

松江市 錦 織 禮 子

千両役者地獄の集中力  
張りついた守宮真白い腹を見せ  
美しい月に見とれて深爪を  
十人十色満中陰の贈りもの  
モンゴル歌舞民族衣装と馬頭琴

松江市 松 浦 登志子

酷暑にて十日遅れの庭仕事  
久しぶり喋り足りずに梯子する  
定年にアイロンかけを卒業し  
旬の物食べて目指すは旬の人  
笑う声大きく響き秋の空

雲南市 菅 田 かつ子

ひと休みして蟻螂のマイペース  
惚けてないキャツシユ番号まだ確か  
頑固さをそつと包んだ真綿雲  
持ち味を思えば鈍も憎めない  
来る年へ向けて小さな夢を蒔き

雲南市 武 島 ちよえ

秋晴れの縁にカマキリ腰を据え  
数踏んだ人の意見にある重み  
おおげさに頷いている聞き上手  
仏壇に好物供え願ひ事  
冷水をごくくん全身駆け巡る

雲南市 福 間 博 利

新米は里の温もり抱いてくる  
血圧がコースを決める散歩道  
さがしもの手近かなどこにキットある  
異常気象ゴギブリ出ない台所  
日の丸が大きく見えた舞鶴港

広島市 岸 本 清

実る穂にへのへのもじが満足げ  
ふる里は母のゆりかご癒される  
低い雲人の気持もくもらせる  
心にも耐震装置備えたい  
手を引いた孫に石段手を引かれ

竹原市 國 實 力

親の背を見ずに素直な子に育ち  
妻に贈った大きな宝子が二人  
夕焼けの瀬戸にこころを泳がせる  
ベイオフの記事丁寧に読む夜更け  
北に住む息子もやはりカープファン

竹原市 若年 幸子

ケータイロツク亡夫の謎がほどけない

茜雲思いのたけを打ちあける

しつかりと生きて夕日の優しさよ

好きな事出来る倅せありがとう

登り詰め少し淋しい観覧車

宇部市 高山 清子

世の変化浦島気分八十路坂

マニフェストドミノ倒しになる気配

一ツ覚え二ツ忘れて進む老い

名指しされる前にこっそり席を立つ

阿波市 三浦 千津子

出番ない切り札抱いている平和

悪役のいないドラマに眠くなる

妻が引く手網捌きに逆らえぬ

クツシヨンの役目で摩擦やわらげる

金木犀ほのか至福のティータム

大洲市 花岡 順子

嬉しいとやたら涙が出て困る

生き方をまた山道に試される

互角だと思ふ苦しいときの意地

追い風に背中あずけているゆとり

御破算にして新しい風を入れ

香南市 桑名 孝雄

十六年誌上でお逢いしましたね(大会参加 3句)

イメージに合ったお方でホツとする

句会場政治パーティーとは違う

飲み仲間酒で薬を流し込む

八十歳酒飲む奴は生きている

香南市 近森 功

散髪をして飼犬に吠えられる

盃の出番を急かす小さい秋

夫婦旅もう折返しきかぬ齢

ねたふりをするには惜しい生き字引き

北九州市 小松 紀子

何だっけ固有名詞が浮ばない

澁みなく命燃やして古稀の秋

相棒は猫トイレまでついてくる

友は良いやさしい彩にしてくれる

年だよネ記憶落ちたと笑い合う

福岡県 豊田 愛

ひそと咲く褒められもせず蕪の花

太陽を避けて夜明けの草を抜く

軒修理家継ぐ人も無きものを

生温い雨にダリアの首垂れる

青柿のたわわを風が抱き落とす

福岡県 本田 さくら

口蹄疫涙で牛と別れた日  
満天の星空に聴く明日の運  
彼岸花案山子と何を話すやら  
安保反対若い情熱燃えた日々  
したたかに生きた証しの太い指

唐津市 岩崎 實

何食べる何でもいよいよ食べにいく  
大学へやれば戻らぬこの僻地  
栄えたる炭鉱跡へゴミ処理場  
女偏関係します好き嫌い  
中庭をむかしとんぼが一回り

山鹿市 三谷 たん吉

スズメ減りトンボも消えた小さい秋  
核持たぬだからこそ有る力出せ  
武士道で信念貫け豪快に  
肅粛とやるは回転遅い奴  
かくすればどうなるものか先読めず

札幌市 佐藤 登美子

サンマから鱈に変わる年金者  
口コミで行列できるラーメン屋  
出来秋に先ずは安堵の父の鉢  
秋祭り食のハシゴをする至福  
パークゴルフ夫婦の趣味も秋の陣

東京都 井上 つよし

枝豆とビールで耐えた熱帯夜  
どのチャンネルに回して見ても腹が立ち  
傘寿かな部品あちこち痛み出し  
秋の空一期一会の蒼さ哉  
さよならも背筋伸ばして拳手の礼

東京都 高岡 弥生

反抗期子供終わって次は母  
将来の性格見える九歳児  
アスファルト暑すぎ散歩出来ぬ犬  
久しぶり秋の海見てホッとする  
三面鏡横顔母に生き写し

八王子市 上原 酒坊

よい人を演じ続けて胃が破れ  
気忙しい世の中泳ぐヒレがない  
悠長な友の氣質を嫉妬する  
世渡りの保身のためにとぼけ顔  
くるくるとまわる日傘に妻がいる

横浜市 巖田 かず枝

忘れ物しそうで安い傘にする  
誘われる内が花だと出掛けてる  
平和賞贈った国の心意気  
エコー診私の中にテロリスト  
目的は飲み会だったゴルフ会

静岡市 渡辺芳子

大阪市 吉川弘泰

長生きをして曾孫にも逢えました  
川柳会一期一会の縁生まれ  
何億の人のいる中逢えた人  
人間の柔和あふれる句会です

大山市 奥村百合江

一年は遅くて早い指を折り  
一年の締めくくりには暮に酒  
諭吉さん足早に行く年の暮れ  
晦日そば除夜の鐘聞き屠蘇が付き

大山市 奥村百合江

大阪市 吉田知之

来年もまたよろしくと種を取り  
秋雨がほどよく降ってナス活きる  
ホテルの朝夜より豪華バイキング  
持病ある機嫌とりなし旅に出る

江南市 脇田雅美

別居して親の温もりしみじみと  
票集めたマニフェストうやむやに  
何くそとペダル踏んでも歳は歳  
貰い物ついなんぼかと値踏みする

木枯らしから護るすつぱり冬帽子  
緞帳から見える役者の影法師  
一張羅着込んで選者披露する  
座布団がわたしの枕昼寝用

河内長野市 内海綾乃

大阪市 安藤なつこ

ヒョウタンが緑のカーテン窓を覆う  
家の中呼び鈴だけが鳴り続け  
払っても蜘蛛元気また網を張る  
おみくじで吉が出るよう祈ってる

成り行きに任すと見せて棹を差す  
ジャマにして捨てたうちわが今欲しい  
上向いて秋空見てる扇風機  
これからと言うてるうちに五十年

河内長野市 木太久正一

大阪市 平井露芳

憧れのハワイ航路が夢だった  
大空に叫んで憂さを晴らしたい  
町内の至急回覧計報です  
もう一年過ぎたか香る金木犀

河内長野市 松岡篤

好物はせんべいですと鹿が言い  
五十ミリ降れば側溝悲鳴上げ  
動脈が広うて起きた不整脈  
死ぬまでに何んぼ打つのか心拍数

就活の黒のスーツで滝の汗  
上げた手の落とし所が見つからず  
後輩の祝儀の額が気にかかる  
買う時は先ず百均で探し出す

朝寝坊夜が元氣な反抗期

百歳は死なず役所の太っ腹

一寸の虫と言つてもわからぬ子

ロボットと心通わす障害児

岸和田市 中岡 香代

吾亦紅秋の七草しる情け

彼岸花真つ赤に咲いた墓地の側

町おこしせんべい汁が客を呼ぶ

ごま豆腐一粒のせた胡桃の実

羽曳野市 松本 静子

賛美歌に心を癒す処方箋

苦痛耐え師走の齒科の治療室

紅葉樹一期一会を目に納め

紅葉の冬を急げと責めて来る

羽曳野市 安本 美喜

彼岸花咲いて秋冷深くする

どこも彼も絵筆執りたい枯れ始め

いつまでも女学生やと言つた亡夫

満月もあてにならない今朝の雨

阪南市 坂口 公子

枚方市 小川 良吉

ゆつくりと歩になり歩く共白髪

さまざまなご縁つながり傘寿越え

傘寿越えゆつくり米寿仰ぎ生く

虫の音で癒す文化の里の秋

枕抱き明日の楽しい夢を呼ぶ

ハンカチに住所氏名の母白寿

ノーサイド女房に聞かれ辞書を引く

温暖化まだ暑いよと彼岸花

八尾市 田邊 浩三

すぎてから気付くおだやかだった日々

姑の資格無いのに親になり

甘えたら駄目になるぞとふるい立ち

名札など無くても情が通じあう

大阪府 小栢 こずえ

井の中でいくらブランコ漕いだつて

山頂で動くともなく動く雲

コーラスも一寸休憩虫の闇

訂正しお詫びもしますで済むメディア

大阪府 高木 道子

取り入れを済ませながめる秋の空

子供見て父母の苦勞を思いやる

秋祭り近しい人の盛り上り

メ切りが迫りあたふたペンをとる

大阪府 中井 記久乃

大阪府 西川 冷子

天高くラッパ吹く息溜める息

空蟬のかじり付いてる百日紅

朝歩き犬も挨拶交しつ

価値観の違う人とは噛み合わせぬ

神戸市 白川 淑子

大阪弁何処に住んでも話してる  
ハンドルを握れば人の変る嫁  
話し中すぐに割り込む淋しがり  
四角張る理屈やんわり丸い知恵

尼崎市 市坪 武臣

龍馬伝あの人材が出て欲しい  
曲がろうか曲がつてみよう阿弥陀くじ  
バイキングいつもメタボと和解する  
病む母に見せてやりたいいわし雲

加東市 岩本 美緒子

細くなった脚も湿布はりまくる  
残り二枚早も十月面映ゆい  
乾いてる筆を潤す秋の風  
会いたい人沢山いてる年賀の卵

川西市 岡嶋 洋子

三面鏡きれいに見える場所に置き  
補聴器と老眼鏡と入れ歯です  
異状なしお酒欲しがる診断書  
妻の鼻あやしい臭いかぎ当てる

篠山市 永井 かほる

手入せず伸びほうだいの山さけぶ  
採りたての野菜持味生で食べ  
鉢巻も木綿にまさるものはない  
木綿糸今なら楽に糸通る

西宮市 株元 玲子

ありがとう何度も言われ恥ずかしい  
ボランティア自分のためになりました  
通い続けやと仲間になりました  
厄介な痛み仲良くお付き合ひ

西宮市 寺井 秋果

中秋の名月賞でた熱帯夜  
充電はほどほどと言う老躯にて  
窓際の椅子で流れを読んでいる  
肩書きが取れてボールが弾みだす

三木市 山口 久子

十五夜にウサギいないとひ孫問う  
イワシ雲秋風高く大漁かな  
名月にさそわれ歩く老夫婦  
雨上り夕日に焼ける秋の山

兵庫県 日野岡 和之

宝刀は抜いてはならぬ天の声  
健康は先ず足からと一万歩  
健康法三日坊主を繰り返し  
瀬戸際に未練残さぬ心意気

和歌山市 坂部 かずみ

握った手開いてみたが何も無い  
玄米を食べて口中ワ音です  
片付けのつもりが何時も雑ぜ返す  
新生姜いくら食べても温もらぬ

鳥取市 大前 安子

黒煙を吐く汽車にある青春譜  
可愛さに上げた拳は汗握る

すんなりと決断下ろす脇の汗

すみません たった五文字に見える意地

鳥取市 坂本 智子

陽差し浴びカラスの衣光つてる

驚いたただの紙切れ大当り

人生模様 アップダウンの道つづく

政治家は アップタイトに息抜けず

倉吉市 倉繁 泰輔

失せ物は探してるとき出てこない

過疎の村柿は たわわに実ってる

夕餉には一升壺が待っている

別嬪に囲まれ私超緊張

境港市 中井 虎尾

天高くスカイツリーの伸びる秋

牛を見りゃその目の中に俺がいた

ホタル族危倶種の保護はないらしい

稲刈りだへのへのもへじ役目終え

米子市 猪森 スミエ

二歳児が今日も茶の間を湧かす芸

反省はこれこの通り猿の芸

流行は何処吹く風と割烹着

難問に挑む拳が脈を打つ

米子市 加藤 正二

悪妻も黄泉に逝つたらよい仏  
持病抱き上手に生きる万歩計

老い一人 国勢調査洩らさずに

日本国長寿極めて病んでいる

米子市 後藤 宏之

木造の古い駅舎のお年より

用の時だけだねと TEL があり

墓そうじてんとう虫もお手伝い

露ほどにそんな素振りは見せぬ彼

米子市 田村 周子

清水の大杉みてる何もかも

弁財天池の鯉までいぶし銀

清水の庭にひそやか秋海棠

暑さ去りあつという間に掛ぶとん

米子市 中原 章子

寄り添って涙の人の手を握る

女より男の嫉妬根が深い

省エネの見本のような無愛想

ひと様にうちの採め事話さない

米子市 成田 公一

狭かったやつと極めた頂上は

句帳持ち 賽銭持 たぬまま参拝

十人も寄れば一人は遅刻する

息抜きのもりがいつか熱中し

米子市 湯 浅 久 司

背の荷物負うた分だけ落ち着いた  
うれしいなやつと定年さみしいな  
遺産分け平等叫ぶ遠隔者  
いくらかの遊びがあつて仕事する

鳥取県 大 塚 美代子

囲まれた塀の中から咲く牡丹  
酔い醒めの水に小言を少し入れ  
稲刈りを前に雀が味見する  
恋をした少女るんるん宙を飛ぶ

鳥取県 加賀田 志 延

絵手紙に惚れて毎日描き送る  
見繕いせぬ間にひらく自動ドア  
いつからか足が遠のくバイキング  
渋滞の脳ミソに要る信号機

鳥取県 下 田 茂登子

氏素性今さら言つて嫁は来ぬ  
この仕事決着つけてもの申す  
トラブルがあるから距離をきめている  
最後まで出してはならぬこの啖呵

鳥取県 吉 野 いさお

手綱より効きめ確かな甘い声  
古株を上座に据えて口封じ  
旅の宿訛りに触れて酔い回る  
取り巻きが打算で囲む独裁者

松江市 柏 井 日出子

慈悲心が里の仏間で甦る  
ご近所と急接近の秋さやか  
高齢と気づかず鏡真正直  
イタリアンスブーンくるくるちさい幸

松江市 山 根 邦 代

髪のがび爪ものがびます生きている  
用件はないが元気な声を聞く  
ハガキから溢れる心受けてます  
お招きに鏡が笑う服選び

出雲市 川 島 和歌子

病んで見て歩く幸せ今気付く  
老いてまだ生きる喜び鎌を持つ  
反省の心を癒す苦い酒  
相談に一肌脱いで加勢する

雲南市 渡 部 好 榮

今何を思つてるのか勇ましい  
もの言わぬ花にも思いあるだろう  
今日と言ういち日走る武勇伝  
諦めをつつんでくれた彼岸花

安来市 原 煩悩児

千の風になるつもりだよ墓要らぬ  
格好付けだけは止めてよ葬式に  
孫や子に話せぬ原爆体験談  
出雲弁で孫と通じ合う絆

秋ラララぶどう貰って梨返す

竹原市 土井輝恵

私のひとり言です聞かないで

他人へはありがとうさん言えるのに

幸せは古希が過ぎてても友と旅

竹原市 六田半徳

何時の間に挟んだ葉落ちている

孫誘い自分も参加書の稽古

お祭りにカラオケ唄う九年ぶり

日めくりの枚数減って気もめる

四国中央市 篠原久

合鍵にさよなら添えて手渡され

ワンバックの卵猷血引き替えに

気はこころ乗る前剥がすサロンパス

一本気の男で避ける曲り角

唐津市 北村松風

薄墨で筆を使った悲しい日

猛暑にも彼岸に咲いた曼珠沙華

蜂不足受粉助ける古い筆

この猛暑人も野菜も泣いている

唐津市 吉富節子

後戻り出来ぬこの世に何残す

人生の独楽の回転おそくなり

親分の喝が聞きたいもう一度

弱り目の老いに鞭打つ熱射病

白玉の臍に亡母の指浮かぶ

ここからの先は独りで往く気概

生きることいよいよ楽し実る秋

スカイツリー下向きジャパン空向かせ

網走市 角谷幸甚

## 第1回 高田<sup>やどりぎ</sup>寄生木賞

- ◎選者 樋口由紀子(兵庫) 木本 朱夏(和歌山)  
渡辺 隆夫(神奈川) 梅崎 流青(福岡)  
高田寄生木(青森)

- ◎作品 5句 2010年に作句されたもの。

〔B5判用紙使用〕

(既発表・未発表問わない、時事・雑詠・印象吟題詠・サラ川等、また他の受賞作品でも可)

- ◎切 2011年1月31日

- ◎会費 1,000円 ※発表誌込み

(現金か郵便為替「川柳触光舎」02240-8-82005)

- ◎投句先 〒038-0004 青森市富田2丁目7-43  
野沢方 川柳触光舎

- ◎賞 大賞、特選賞(各選者)、秀句賞(各選者)

- ◎発表 「触光」22号 2011年6月

# 誹風柳多留——一篇研究 64

清 同。

492 朝ッぱらしかるをきけは松とうし

増田 前の句につづく情景。吉原からの朝帰りで叱られている息子が亭主。  
しやうとうし様御かへりと女房すね

天五楼<sup>2</sup>

山田 昭夫・増田 忠彦  
山口 由昭・小栗 清吾  
伊吹 和男  
清 博美

清 贊。

490 材木屋ついで歩いて空を見せ

異口同音によしくと松洞寺 傍<sup>二</sup>3  
角田川妻がといつてはりこまれ 九<sup>一</sup>14

山田 材木屋で立てかけている木材を客に見せている情景。下から上方向に見上げて行く  
と、そこは空。

清 贊。 材木やあばらの見へる気煩ひ 四〇<sup>二</sup>29

491 妻よばりおきやれとけなす松洞寺

稿贊としておくが、今一つスッキリしない感を持つている。

増田 松洞寺は紅葉狩りの名所だった浅草竜泉寺町の禅寺正灯寺。「妻が妻が」と口にするのはここでは止めにしておくと、その正灯寺で悪友が恐妻家の連れをけなしている。近くの吉原への誘い文句である。

伊吹 贊。小栗氏の説からですと、妻らしい扱ひもせず妻よばりはやめてくれ、どうせ正灯寺の後は吉原で、と妻が亭主をけなしているという解は成立しないでしょうか。

山田 伊吹説前半に贊。けなしているのは連れの仲間。

493 しなれるとたいこ三日にあげずに來

増田 蟲屑にしてもらった旦那に死なれたタイコモチ、跡とりの息子を二代目の旦那にしようとなくらんで三日にあげず足を運ぶというもの。あるいは、ドラ息子の方のタイコで、うるさい存在だった親父殿が死んだ後、もう恐いものなしと誘い出しにくる、ともとれるか。

牽頭持くやミに來たがはじめ也 傍<sup>二</sup>15

山口 前半贊。後半説は「死なれる」の言い方がおかしい。

小栗 そういふストーリーですか。

山田 礎後半贊。礎引用句はそのイントロでしよう。山口兄疑問は、「息子が親に死なれる」ととれば問題ないのでは……。

清 同。

494 天ちくの唐のと玉藻なれたもの

増田 三国伝来の野干だったとされる玉藻前伝説。江戸にも渡り妾も少なくはないが、玉藻前は天竺・唐・日本の三国の後宮をとれたものだ。謡曲『殺生石』には、「天竺にては斑足太子の塚の神 大唐にては幽王の后 褒姒と現じわが朝にては鳥羽の院の玉藻の前とはなりたるなり」とある。

山口 賛。たぶらかすことに慣れているのであろう。

清 賛。

495 朝かへりつねの身なればいひやせぬ

増田 「こんな身重の体でなければ申しはしません」と、朝帰りの亭主を責める女房。

朝かへり女房が言うつと御尤も 明四礼7  
清 賛。

496 ちつとおやすみと格子へ台のもの

増田 格子と台の物からは吉原を思わせるが状況が浮かばない。ご教示を得たい。

駄労働。まだ通りも閑散とした清掻の格子に、一休みしなさいと内証からおやつ代わりの台のものの差し入れ。

山口 内証からではなく、すでに客の付いた朋輩からかもしれない。

小栗 引け四ツ近く、客の残り物を、まだ揚げてもらえぬ遊女へとも思うが、そんな親切なことをするわけもないと思うし。

山田 この格子は張見世の格子ではなく、座敷の出格子でしょう。出格子の台の部分に、台の物を置いて「ちとおやすみ」と遊女が客に言っている図。

清 山田説なるほど。

497 しよく好ミするハやう家のむすめなり

増田 贅沢な食好みをするのは楊家の娘だ、の句意。

楊貴妃は天上の味の奇菓などとされる荔枝を好んだという。この貴妃を敷きながら、楊枝見世の看板娘の男選びをいうものかと思う。元句の前句は「やくそくをする」である。

小栗 賛。楊貴妃そのものの句と想っていたが、なるほど礎稿の方が面白い。

清 なるほど。

498 ばいしよくを一わり入して札がおち

増田 一割方は女色の接待も加えたまいないで、目指す商談を落札させたの意。点取り俳諧の利かせを考えるべきかどうか。

御出入りとかくはしこをのぼらせる

御用たしかけまをねたるにハこまり 明三義2  
安八義3

山口 賛。落札した値段に一割の接待費もはいつているのではないか。

小栗 山口説賛。

清 同。

499 炭をつげやいといけんがさへかえり

増田 火鉢の前にしての長説教。親父殿が息子に對してであろう、隣部屋に控える女房に「炭をつぎ足せ」と異見が冴えかえる。

火をいぢりけして異見にひまをやり

拾一〇7

山口 賛。長い意見。

小栗 賛。雪を暗示。

伊吹 同右。雪の日の朝帰り。

清 同。

雪の朝息子真顔で帰毛する

安三満2

## 小島蘭幸 新主幹に聞く

## 聞き手・編集部

とても個性的で、簡潔、そして深いのです。川柳と全く同じでした。

★お好きな画家は？

……平山郁夫画伯。先生のふるさと尾道市瀬戸田町に平山郁夫美術館があります。幼少期の絵画も展示されており、是非鑑賞していただきたいですね。

★お好きな音楽は？

……ロックミュージック

★愛読書は？

……ありませんね。しかし、これからは葉原道夫さん編集の『麻生路郎読本』を常に身近において、事あるごとに読みたいと思います。

★お好きな映画は？

……古いですが、ステイプ・マックイーンの「大脱走」

★お好きな男優、女優さんは？タレントは？

……高倉 健、市毛良枝、タモリが好きです。

★動物はお好きですか？

……犬を飼ってから、他の動物も好きになりました。

★ベツトは飼ってらっしゃいますか？

……飼っています。シエットランド・シープドック種の犬で名前はチョココといいます。

★お好きな花は？

……紫陽花

★お好きな色は？

おぎのカー君の異名がありました。

★川柳を始められたきっかけは？

……同級生の友人に誘われて。山内静水先生の二男です。

★それはお幾つでしたか。

……十五歳でした。

★川柳の先生はどなたでしたか。

……山内静水先生。

★山内静水さんの印象、思い出を。

……情熱の人、呼名が素晴らしかったです。一番の思い出は入院中、外出許可をもらった先生と一緒に三原市、やつさ川柳会二十周年記念句会に出席したことです。あの時の先生の嬉しそうなお顔を忘れられません。

★蘭幸という雅号の由来について。

……小学生の頃からのニックネーム「ランチヤン」に本名・和幸の幸を取って蘭幸です。

★川柳以外のご趣味は？

……美術鑑賞です。特に絵画が好きになったのは、地元の美術教師をされていた有原拓先生の個展を拝見してからです。拓先生の絵は

★主幹就任おめでとうございます。蘭幸さんを解剖したいと思います。お答えしたくない質問にはノーコメントでも結構です。

★お生まれはどちらですか。

……広島県竹原市。竹原で生まれ、竹原で育ち、竹原に住んでいます。

★差支えなければ生年月日と干支は？

……昭和二十三年三月二十日、子年です。

★ご家族は？

……妻、二女、私の三人家族。長女は嫁ぎ男の孫が一人おります。

★お仕事はまだ現役ですか？

……平成十九年三月三十一日付で退職。以後無職。

★ご自分の性格の長所と短所を。

……長所は大らかなところ。短所は大雑把。

★子供時代をどのように過ごしましたか？

……勉強はせず、自然児の如く、釣り、川海で泳いだり、昆虫採集、鬼ごっこ等々。外でよく遊びました。その割に運動神経はあります。パッチン(メンコ)も得意で、〇〇あ

……赤

★お好きな食べ物は

……握り寿司

★お酒は飲まれますか。それはどれのくらい？

……飲みます。ほんの少し。

★山と海とではどちらがお好きですか？

……海、ただし最近はお眺めるだけです。

★健康法はありますか？

……ありません。強いて言えば愛犬との散歩。

★最後の晩餐には何を食べますか。

……以前、蟹のフルコースが食べきれなかつたので、最後にもう一度挑戦したいです。

★最近、腹の立ったことはありますか？

……ありますが、忘れることにしています。

★佳い川柳ってどんな川柳でしょうか？

……作品の中に作者がいること。

★お好きな川柳家と作品を教えてください。

……麻生路郎先生。

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

他にも好きな作家、川柳は数知れずあります。

★老いを詠むことについてどう思われますか。

……どんどん詠んで欲しいです。ただ暗くなりがちなので、ポジティブに明るく詠んで欲しいですね。

★一〇〇号記念九月号、「私の一句」に出された「小児病棟みな美しい妻をもつ」につ

いてお聞かせください。

……二女が一歳で入院した時の実感句です。

小児科病棟で、我が子を必死に看護する若いお母さんたちの美しさを詠みました。妻へ感謝の一句です。

★川柳をしていて良かったと思ったことは

……転勤先で柳友に会えたこと、心の支えになりました。

★川柳を止めたいと思ったことがありますか

……ありません。

★句会のない一日のスケジュールは？

……愛犬との散歩。車で母の送迎。家事。

「川柳たけはら」の編集等々……。

★どんな時にどんな場所で川柳を作っていましたか。

……深夜、家族が眠ってから一人居間で……

締切り間際は場所を選ばず。

★蘭幸さんは広島県竹原市にお住まいですが最低でも月一度の本社へは、どのようにして来られますか。また片道の所要時間は？

……自宅から三原駅まで車、三原から新大阪は新幹線、新大阪から地下鉄を利用して、片道約三時間です。

★座右の言葉は

……継続は力なり

★川柳塔同人・誌友に何かひとこと。

……川柳塔・水煙抄への投句、各地の句会、大会に積極的に参加して、友達の輪を広げましょう。

★最後に川柳って何でしょう。

……川柳は人間陶冶の詩。麻生路郎先生の言葉です。

★ありがとうございました。



頼山陽の銅像の前でチョコと

# 愛染帖

新家 完司 選

羽曳野市 酒井 一壺

釣り糸が絡んでからのお付き合ひ

(評) 同じ時に同じ場所に居合わせ、釣り糸が絡むまでは偶然の成り行き。アクシデントを幸運に変えたのは、お互いの人柄と努力。

藤井寺市 太田扶美代

悔しくて作り笑いがやっつです

(評) 「コンチクショウ、クヤシイー!」と叫んでいる心の中を見透かされないように、平然とこやかに……。これがなかなか難しい。

唐津市 仁部 四郎

はにかんだ顔で写った頃もあり

(評) 「ああ、私にもこのような頃が……」と思わせる初々しい写真。誰しも、経験を重ね世知に長けるにつれて、純真さを失っていく。

大阪市 小泉ひさ乃

ユニクロを着て映える人映えぬ人

(評) テレビのCMで「おっ、いいな!」と思つたらユニクロの宣伝だった。ユニクロで映えない人は、アルマーニでも映えない。

暗証番号押すとき口で言うている

(評) 根が正直なのだ。一人しか入れないボツクス式のATMならいいが、並列のオープン式では悪党が聞き耳を立てている。

加東市 中上千代子

大丈夫あしたの予約くらいなら

(評) 一ヶ月先いや、一週間先のことでも確約はおほつかない。が、明日くらいなら大丈夫だろう。まだ元気だと思っている。

神戸市 山口 光久

休肝日無いらリズム狂わない

(評) 飲兵衛の屁理屈。確かに、生活のリズムが狂うと体調も狂う。ただし、定量というリズムも大切。痛飲で通院に陥らぬよう。

藤井寺市 鴨谷瑠美子

耐えることだけは自信もっている

(評) 厳しくしつけられ、敗戦後の窮乏を乗り切ってきた世代。少々のことでは音を上げぬ世代が、傷だらけの国を立ち直らせた。

神戸市 田中 童子

雑巾を買ってしまった自己嫌悪

(評) 雑巾は買うものと思っている世代には理解不能な心理。お金が惜しかったのではな。横着になった自分を嫌悪しているのだ。

紀の川市 辻内 次根

計報欄よくある歳へあと五年

(評) 「よくある歳」とは、死んでもビックリ

されない歳。あと五年とは心細いが、みんなに合わせる必要はない。遠慮せず長生きを!

四条畷市 吉岡 修

指揮棒がはつきり見えぬお国ぶり

あの月がでこぼこだとは思えない

鳥取県 斉尾くにこ

屈託ない笑顔遺影はこれとする

打ち込んだ未練送信せず終わる

塩竈市 木田比呂朗

昼寝した右脳がもとに戻らない

年金にデフレは味方だった苦

大阪市 古今堂薫子

感嘆符も少し出番増やさなきや

冗談が好きなき老人目指して

豊中市 水野 黒兎

汽笛鳴り里の柿の実色を増す

戯れに猫語を話し秋うらら

八尾市 中島 春江

もつたいないとケチの境が分け難い

親切も世話をするのも相手みて

池田市 上山 堅坊

川柳が手頃な杖になつている

GPS小さな星が僕を追う

豊中市 安藤寿美子

年金は心肺停止までは取る

孫の部屋用意したのに来てくれぬ

鳥取市 鈴木 一弘

曼珠沙華どれも戒名彫つてある

無添加で生きたしソバの花が好き  
炊き出しという日本のボランティア  
弘前市 高橋 岳水  
八王子市 播本 充子

こだわりの米を米屋で買ってくる  
目覚めれば夫がパンを焼いている  
堺市 羽田野洋介

重箱の隅つつくほど暇じゃない  
念のため自分に本音問うてみる  
堺市 志田 千代

正直に詠んだつもりのも句でもめる  
黙祷の間秒針追っている  
海南市 三宅 保州

年寄りの亡くなるドラマ多すぎる  
老人になればあなたもわかります  
大阪市 榎本 舞夢

物忘れ違った人に礼を言う  
ゴミ捨てるだけでも化粧忘れずに  
米子市 加藤 正二

古い独り万年床の巣をつくる  
控え目は精神力を倍使う  
大阪市 小谷 集一

快晴にひびく竿竹売りの声  
老けたなどみんな思つて皆言わず  
大阪府 畑中 節子  
西宮市 藤本 直

子ども代わりに慈しむお人形  
和歌山市 柏原 夕胡

すり切れた丁シャツ肌によく馴染む  
菜園を見渡し夕餉考える  
大阪市 西川 冷子  
香南市 桑名 孝雄

イチローに一郎ややこしい日本  
悲憤慷慨軍歌うたいに飲みに入る  
鳥取県 細田 裕花

独りの日静かに自分チエックする  
細胞も元氣傷口すくなおる  
和歌山市 牛尾 緑良

美辞麗句あれが赤信号だった  
ピアスまだ老後のことは考えず  
奈良県 渡辺 富子

日に二回ラジオ体操しています  
日に一度夫連れだしウォーキング  
堺市 大隅 克博

方向は決めてジグザグ散歩道  
陽が落ちて一人去りまた一人去り  
橿原市 居谷真理子

一面の稲穂にお礼申し上げ  
歳月は味方逆らいさえせねば  
弘前市 福士 慕情

外国の牛乳飲んだことがない  
抜歯抜歯抜歯後期高齢者  
和歌山市 古久保和子

鉢植えにうどん一杯分の葱  
秋刀魚より高い大根添えて旬

野垂れ死にだけはせんぞと飯を食う  
伊勢神楽ビーヒャラドンと秋連れて  
吹田市 太田 昭  
藤井寺市 増井ヨシ枝

手加減をされているのに敵わない  
ひとことでないとな聞をとじる  
京都府 松本としこ

お祭りが終わるともとの過疎になる  
お似合いと言われてふえた夏帽子  
三田市 堀 正和

ひとつだけの母の指輪をつけて寝る  
褒め言葉一歩下がって聞いている  
豊中市 荒巻 夢

うろこ雲やつと納得出来る秋  
夜よりも朝の作句が生きがい  
枚方市 丹後屋 肇

ハムレットたちがうろつく泌尿器科  
双六の行き着く先の自己破産  
鳥取市 岸本 孝子

旅仕度のど飴だけは持っていく  
ひとつそりと私の好きな隅の席  
弘前市 高瀬 霜石

デザインで買った革靴足を咬む  
手を振ってくれるが誰かわからない  
吹田市 大谷 篤子

岩崎 公誠

鳥取県 佐伯 やゑ  
すばらしい夕焼け 救急車が走る

篠山市 酒井 真由  
露草が閉じる合掌のかたちに

堺市 村上 玄也  
総入れ歯外すと急に老けた顔

唐津市 樋口 輝夫  
プライドという面倒な荷が重い

大阪府 米澤 俣子  
接骨院ゲートボールの顔で混む

米子市 高田 振作  
恍惚の母が歌うは安来節

尼崎市 市坪 武臣  
迷ったり悩んだりして味が増す

西宮市 緒方美津子  
手にビタリ納まるカメラ値が合わぬ

堺市 澤井 敏治  
ポストまで行くと帰りは手にビール

鳥取市 武田 帆雀  
蜥蜴の子チヨロチヨロ軒は遊園地

海南市 小谷 小雪  
仲直りしましょうお茶を入れました

堺市 加島 由一  
宴会をはやく抜け出す反主流

芦屋市 黒田 能子  
サプリメントで足りず青汁飲んでいる

高槻市 富田 美義  
私の前後を風邪が行き来する

西脇市 七反田順子  
忘れ薬飲んでるようにすぐ忘れ

青森県 松山 芳生  
前向きになれて捨て去る負の記憶

鳥取県 山下 節子  
この星の介護人間だけ出来る

京都市 都倉 求芽  
奥さまもボトルのお茶はラツバ飲み

和歌山市 武本 碧  
人間の眼をして守る介助犬

和歌山市 喜田 准一  
末席の椅子で互いに仲がよい

河内長野市 梶原 弘光  
鼻唄は万策尽きた時もある

鳥取県 大塚美代子  
湯加減をきいた昔の火吹竹

高槻市 片山かずお  
数合わせらしいな後で呼びに来た

八尾市 高杉 千歩  
フィナーレが穏やかすぎるのも不安

河内長野市 黒岩 靖博  
振り返る過去は短くおぼろ月

香芝市 大内 朝子  
川柳と酒でこの世の春を生き

八尾市 田邊 浩三  
訳有りじゃないのに嫁かぬ我が娘

米子市 白根 ふみ  
風鈴が淋しがるから片付けろ

大阪府 初山 隆盛  
枕カバーに髪の毛たと抜けている

岸和田市 森元ふみよ  
金持ちが金の話で大喧嘩

羽曳野市 吉村久仁雄  
明日への不安にベダルこぎ止めず

京都市 高島 啓子  
寝てクシヤミすると両足が上がる

宇部市 平田 実男  
お金より愛と言った若かつた

八尾市 宮崎シマ子  
言葉の無理重ねて変になるお世辞

鳥取市 岸本 安章  
誉められてやつと持ち味だと気付き

高槻市 安田 忠子  
カンカン照り日傘さしたいバスの中

浜松市 岡田 史郎  
またビリの夢に焦って目が覚める

米子市 中原 章子  
だんなには聞かれたくない音がある

大阪市 田浦 實  
重い鎧脱いでいく老い心地良い

羽曳野市 徳山みつこ  
おでんぐつぐつさぞ大根がおいしかろ

河内長野市 坂上 淳司  
なまんだぶで布施を袂へ入れる僧

八尾市 村上ミツ子  
遠慮なくどんどん進む腹時計

豊橋市 藤田 千休  
買わなけりややたらに当たる万馬券

堺市 矢倉 五月  
回る寿司一人じゃ皿が積みにくい

岸和田市 井伊 東吉  
再々のチラシ忙しい葬祭屋

大阪市 谷口 義  
わたくしの食べたい物が売っている

鳥取市 土橋 螢  
寝て起きて食って元気がよくなった

寝屋川市 籠島 恵子  
走るのは苦手その他もいろいろと

羽曳野市 永田 章司  
パスポート不要の世界夢かなあ

橿原市 安土 理恵  
たしなみとしておつきあい大ジョッキ

加西市 金川 宣子  
秋の虫出番来たのに遠慮気味

大阪市 奥村 五月  
十月も頑張りますと扇風機

鳥取県 岡本 幸枝  
膝まくらなんかしたこと無い夫婦

岩出市 村中 悦男  
反対の意見喉までためて出す

大阪府 高木 道子  
お出かけの顔で老犬待っている

奈良市 矢野 良一  
昼間から雨音聞いて湯に浸かり

熊本県 高野 宵草  
座椅子まで回転にした旦那様

大阪市 坂 裕之  
電話切り受話器眺めて無事祈る

三田市 上垣キヨミ  
割れた音私の茶碗かも知れぬ

鳥取市 夏目 一粋  
仏壇の花水涸れに耐えていた

唐津市 市丸 晴翠  
当番の札がさまよう過疎の町

大阪市 福岡 末吉  
漫画ネタ豊かわが家と水田村

和歌山市 玉置 当代  
ハンドクリーム擦り込む秋も深くなる

寝屋川市 岡本 勲  
よい汗を流して四国遍路旅

鳥取市 福西 茶子  
幸せの色はやつぱり空の青

東かがわ市 木村あきら  
住民は川の怖さを知っている

寝屋川市 森 茜  
日の当たる常連さんの席がある

米子市 成田 公一  
無気力な医者に当たたらぬよう祈る

海南市 堂上 泰女  
孫来訪疲労蓄積是好日

大阪市 松尾柳右子  
栗御飯食べさせたいな孫や子に

三田市 福田 好文  
僕の古希妻子何にも言わず過ぎ

鳥取市 倉益 一瑠  
簡単に蟹を送れと来るメール

奈良市 辻内けんえい  
高齢者さすがと言わず智慧を持つ

奈良市 尾畑なを江  
ひとり言思い切り吐く床の中

大阪市 伏見 雅明  
黙々と今日もお伴の方歩計

松江市 松浦登志子  
階段が腰膝痛のバロメーター

唐津市 岩崎 實  
苗植えた子どもに稲がみのります

鳥取市 近藤 秋星  
金持ちにはもう新米を食べている

大阪府 小栢こずえ  
祭り好き歳には勝てず早寝する

明石市 梶谷 和郎  
女湯へ上がる合図の咳をする

高知市 小川てるみ  
私のむかしが残る通信簿

唐津市 山口 高明  
館長も理事も役所の天下り

鳥取市 津村 律子  
あなたの努力家族を守る平和賞

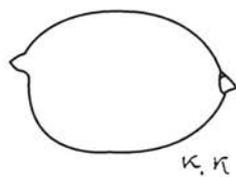
高槻市 左右田泰雄  
老いてなお食欲だけは意気盛ん

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)

(投句 七六〇句)



「黒い」 三宅保州選

限りなく黒い尻尾が掴めない  
 黒い手がのびて蜥蜴の尻尾切り  
 3Dでわかる程度の腹黒さ  
 秋霜烈日黒いシミ塗るフロツピー  
 問いつめてみたら身内はみんな黒  
 黒幕が水の流れを塞ぎ止める  
 難民に黒い太陽しか見えぬ  
 黒皮の手帳私も持っている  
 黒電話とても質素に生きていた  
 烏賊墨のバスタ食べたなら笑えない  
 あご髭で見透かされてた白髪染め  
 真っ黒な顔が優しい野良仕事  
 すすだらけ笑われ役になっておく  
 相手の顔浮かべ年賀は墨で書く  
 物真似の特別賞は付け黒子

鳥取市 福西 茶子  
 和歌山市 磯部 義雄  
 生駒市 飛水ふりこ  
 交野市 森本 弘風  
 堺市 奥 時雄  
 堺市 村上 玄也  
 砂川市 大橋 政良  
 藤山市 酒井 真由  
 松山市 高橋 宏臣  
 河内長野市 谷 久美子  
 大阪市 鶴田 遠野  
 大阪市 太田としお  
 大阪市 小谷 小雪  
 大阪市 吉村 一風  
 河内長野市 梶原 弘光

「黒い」 山本希久子選

リストラの町でカラスがよく肥り  
 黒星で人生終わりたいくないな  
 私より先を歩くな黒い影  
 UVカット忍者が街に現われた  
 真っ黒な親父の辞書に嘘はない  
 蒼天へ心の黒が萎みゆく  
 少年の闇画用紙を黒く塗る  
 コスモスが揺れて暗雲振り払う  
 黒枠のあなたにずっと見守られ  
 黒い空吹雪く海から津軽三味  
 少年の黒い瞳に嘘はない  
 真っ黒になって二学期始まった  
 暮参り夫の化身か黒揚羽  
 これは譲れない学生帽は黒  
 夢は濃く描けと鉛筆5Bに

大阪市 榎本日の出  
 神戸市 田中 章子  
 豊中市 池田 純子  
 芦屋市 竹山千賀子  
 和歌山市 古久保和子  
 米子市 政岡未延子  
 大洲市 花岡 順子  
 八王子市 播本 充子  
 倉吉市 山中 康子  
 弘前市 福士 慕情  
 羽曳野市 酒井 一壺  
 河内長野市 植村 喜代  
 和歌山市 堀 富美子  
 西宮市 緒方美津子  
 大阪市 寺井 弘子

はくろのような心の傷がまた癒えぬ  
 黒髪が似合ったはずの日本人  
 黒と見ぬ母がいたから今がある  
 七五三親の黒子が目立ち過ぎ  
 烏賊すみを吐くよにまさか子の家出  
 黒粋のあなたにずっと見守られ  
 真つ黒な親父の辞書に嘘はない  
 昭和史をめくれば父母の泣き黒子  
 日延べして棺の遺体髟伸びる  
 黒ネクタイ外して語り合う喫茶  
 礼服は全部ウエスト受け付けず  
 黒髪に似合うドレスは持つている  
 黒を着る席で意外な人に会う  
 着ないけど持つてる黒いランジェリー  
 黒服にラメ足し今日は歌舞伎座へ  
 目立たないつもりで黒にした誤算  
 フォーマルの黒が際立つ非日常  
 煩惱ちらり墨染の衣から  
 極彩色の果ては黒すくめで決める  
 UVカット忍者が街に現われた  
 黒い服着るたび瘦せる預金帳  
 もう二度と喪服は着たくありません  
 似合うのは黒いセーターだけになる

鳥取県 松本 文子  
 大阪府 神野千恵子  
 大阪市 岩崎 玲子  
 鳥取県 西谷 悦子  
 京都市 榎本 宏子  
 倉吉市 山中 康子  
 和歌山市 古久保和子  
 弘前市 高瀬 霜石  
 堺市 源田八千代  
 豊中市 江見 見清  
 八尾市 田邊 浩三  
 藤井寺市 鴨谷瑞美子  
 府中市 藤岡ヒデコ  
 神戸市 白川 淑子  
 大阪市 古今堂薫子  
 可見市 板山まみ子  
 泉佐野市 稲葉 洋  
 八尾市 村上ミツ子  
 羽曳野市 徳山みつこ  
 芦屋市 竹山千賀子  
 鳥取市 岸本 安章  
 高石市 浅野 房子  
 豊中市 安藤寿美子

緊張感へ黒一点が効いている  
 黒猫もベリカンも家素通りす  
 くるくると勝訴の文字が走り出る  
 精悍な顔に浅黒さが似合う  
 暗黒の民はひたすら銃を追う  
 黒がわらの家が大好き一人住む  
 阿と呼が合つて黒子も暮が下り  
 限りなく黒い尻尾が掴めない  
 6Bの濃さでライバル攻めてくる  
 真つ黒い種から白い花が咲く  
 憧れた都会で黒い空気が吸い  
 目の黒いうちにやりたいことばかり  
 一本の電話の裏に黒いワナ  
 一幅の墨絵と暮れる北の冬  
 暗黒の時代を生きて平和ほけ  
 裏方の黒子の汗に來ぬ拍手  
 さのこ雲の黒い記憶を出られない  
 黒い雨末代までも語り継ぐ  
 何が出る検察庁の黒靴  
 冤罪が晒す司法の黒い霧  
 黒髪が似合ったはずの日本人  
 SLがシャッター音の中走る  
 SLの自負はあくまで黒光り

和歌山市 柏原 夕胡  
 鳥取県 石谷美恵子  
 京都市 都倉 求芽  
 高槻市 片山かずお  
 篠山市 遠山 可住  
 鳥取県 佐伯 やえ  
 香南市 桑名 孝雄  
 鳥取市 福西 恭子  
 紀の川市 宇野 幹子  
 大阪市 神夏磯典子  
 札幌市 小沢 淳  
 岸和田市 堤 檀代  
 東かがわ市 清川 玲子  
 弘前市 高橋 岳水  
 八尾市 高杉 千歩  
 大阪府 米澤 徹子  
 藤井寺市 大田扶美代  
 日高市 根岸 方子  
 八尾市 宮崎シマ子  
 札幌市 三浦 強一  
 大阪府 神野千恵子  
 吹田市 大田 昭  
 大阪市 津守 柳伸

黒いドレスのダミアにバリの粧をみた

寝屋川市 森 茜

腹黒さヒトに負けるといふカラス

樞原市 安土 理恵

リストラの町でカラスがよく肥り

大阪市 榎本日の出

枯れ葉舞う行方知れずの黒揚羽

大阪市 津守 柳伸

深読みの向こうに黒い曼珠沙華

鳥取県 齊尾くにこ

昨日の恥部真つ黒に塗りつぶす

三田市 久保田千代

6Bの濃さでライバル攻めてくる

紀の川市 宇野 幹子

自分史のところどころを塗りつぶす

奈良県 渡辺 富子

年輪を重ねて黒に慣れてくる

京都市 高島 啓子

苛立ちにゆるりゆるりと墨を摺る

尼崎市 藤井 宏造

蒼天へ心の黒が萎みゆく

米子市 政岡未延子

存在感寡黙な黒に負けている

河内長野市 山岡富美子

平凡な女は髪を黒く染め

鳥取県 細田 裕花

目の黒いうちにやりたいことばかり

岸和田市 堤 檀代

三年後見据えて黒い石を打つ

和歌山市 福本 英子

黒いから黒いと言ったまでのこと

河内長野市 坂上 淳司

黒で通せばそのうち箔がついてくる

和歌山県 森下よりこ

仏さんのように眠っているピアノ

西宮市 吉井菜々子

塗りつぶす黒は最後にとっておく

大阪市 升成 好

秀句

焦点を絞ると黒いまるになる

岩出市 藤原ほのか

無から無へ男黙って墨を擦る

大和郡山市 坊農 柳弘

憧れた都会で黒い空気吸い

札幌市 小沢 淳

墨壺は匠の技を信じてる

大和高田市 鍛原 千里

墨痕で鮮やかに書く無の境地

紀の川市 辻内 次根

美しく黒を着こなし火種抱く

大阪市 柴本ばつは

哀しみは脱いだ喪服に畳み込む

高槻市 島田千鶴子

礼服の黒が泣いたり笑ったり

香芝市 大内 朝子

喪服脱ぎ楽しいことを考える

京都市 高島 啓子

白黒を付けずに生きる処世術

三田市 福田 好文

人生を黒子で生きた母徳ぶ

河内長野市 針生 和代

モノクロの写真と昔話など

八尾市 村上ミツ子

真つ黒になる悪人の影法師

鳥取市 土橋 螢

黒豆をここと母と会話する

大阪狭山市 矢野 梓

黒帯を締めて日本の顔になる

東かがわ市 伊勢八重子

腹黒さ写してみたいレントゲン

箕面市 出口セツ子

運命を変えたあの日の黒い雨

東かがわ市 川崎ひかり

濃淡の魔法が描く水墨画

神戸市 山口 光久

漆黒の森より暗いネオン街

堺市 柿花 和夫

存在感寡黙な黒に負けている

河内長野市 山岡富美子

目覚めよう黒い地球にしたくない

宝塚市 丸山 孔一

黒幕が水の流れを塞ぎ止める

堺市 村上 玄也

秀句

黒電話とても質素に生きていた

松山市 高橋 宏臣

しがらみにまみれ闇から抜けられず

松江市 松本 文字

人間を絞ると黒い汁が出る

大阪市 井丸 昌紀

# 第25回 国民文化祭・おかやま2010 (10月31日)

本年度国民文化祭は岡山県久米郡久米南町、久米南町立久米南中学校体育館で開催された。事前投句、高校生・一般の部は3193名、小・中学生の部は5943名、当日参加は870名。大会各賞は下記のとおり。

## ◎高校生・一般の部

文部科学大臣賞

青空へごまかしなどはみせられぬ

愛媛県 山内美恵子

国民文化祭実行委員会会長賞

桃をむく昭和の傷を剥くように

東京都 齋藤由紀子

岡山県知事賞

げんこつを開いたあたりから晴れる

岡山県 西村みなみ

第25回国民文化祭岡山県実行委員会会長賞

お団子を子供の顔で食べている

福岡県 斉城 余白

岡山県教育委員会教育長賞

畳替えみんなが集う日のために

岡山県 林原みく代

久米南町長賞

産声がひびく戦が始まるぞ

埼玉県 篠崎 紀子

第25回国民文化祭久米南町実行委員会会長賞

ひらがなにすれば差別の無い握手

千葉県 潮田 春雄

久米南町教育委員会教育長賞

張り替えた畳に新しい童話

東京都 近江あきら

(社)全日本川柳協会会長賞

雲海へ山脈ひよいと顔を出す

愛媛県 大野モモエ

岡山県川柳協会会長賞

まな板がコトコト青空を産んだ

鳥取県 門脇かずお

## ◎小・中学生の部

文部科学大臣賞

伝えたい君は一人じゃないことを

山口県 鐘分 友香

国民文化祭実行委員会会長賞

残さずに食べて伝えるありがとう

山口県 吉津 巧

岡山県知事賞

いじめっ子心の中は泣いている

山口県 中村明日香

第25回国民文化祭岡山県実行委員会会長賞

空を見る何も無いのに空を見る

岡山県 高橋 志門

岡山県教育委員会教育長賞

君がまた咲き始めるのまつてるよ

静岡県 松永 仁香

久米南町長賞

子どもの日ちよつとわがままいでしょう

広島県 橋本 唯恋

第25回国民文化祭久米南町実行委員会会長賞

朝のケンカ弁当食べて忘れたよ

山口県 藤村 有紀

久米南町教育委員会教育長賞

れいぞうこ化石が多いうちの家

岡山県 池田 百花

(社)全日本川柳協会会長賞

木や森があついあついと伝えてる

広島県 弘岡 実

岡山県川柳協会会長賞

弁当は食べ物たちの遊園地

広島県 久保 慶太

驚く

鶴田 遠野選



暑いのに目出し帽つけ客が来た  
驚いた振りして彼にしがみつく  
驚いた振りして続きを喋らされ  
白骨が年金受けて生きている  
大好きな彼女にあった喉仏  
武富士がお金に困る世の流れ  
驚いた顔をしてない冷凍魚  
深々と御辞儀アデランスがずれる  
凡打率六割強のイチローよ  
何度でも驚いてやるだまし舟  
单身赴任妻が突然やつてくる  
広大な国が欲しがる無人島  
今日だけは俺が払うと驚かす  
大げさに驚きお化け喜ばす  
驚いた振りをしておく子の手品  
鏡の向こう自分と違う人がいる  
裸婦像にときめく事もなく老いる  
亡骸と暮らせる人もいる時代  
驚きも鮮度は三日ほどだろう  
こんなにも喋れる方が酒の席  
出目金はえらいびつくりしたらしい  
ああびつくり鼻チアブロン着けていた

正和 准一 哲男 富子 幹子 隆盛 弘一 柳弘 末吉 満子 典子 五月 茶子 玄也 悦子 芳生 裕花 英子 志華子 ばっは

久々に妻の素顔を見てしまう  
人相までも変えてしまったダイエツト  
胃袋で酒と薬がもめている  
驚いた振りして手品盛り上げる  
驚いた顔で聴いてる聞き上手  
役所では安政の人生きて居た  
誤作動を時々起こす非常ベル  
驚いて見せるバアバの得意芸云  
ゴキブリに驚くふりはやめなさい  
自死という友の噂を聞くお通夜  
驚きの悲鳴に蛇のほうが逃げ  
調子よく合わせた後で誰ですか  
永田町と比べ驚く龍馬伝  
雷鳴にしがみつくな妻でない  
みんなの日集めて白寿の食べつぷり

賢子 美津子 輝夫 いくひろ 愁女 寿之 充子 順子 千鶴子 慕情 正雄 嘉見 蜂朗 像山 毅 佳 倫子 直 弥生 時雄 孝一 泰女

驚いてやらねば老母が哀しがる  
天災人災 驚いているひまが無い  
驚きの事件に馴れた怖ろしさ  
覚えぬい噂 驚くほど燃える  
吃驚のたびに心臓確かめる  
驚きもたまには見よう万華鏡  
偏差値と全くちがう倫理観  
驚いてみよう我が齢と生きざまに  
初恋から今でも好きと来た便り

賢子 美津子 輝夫 いくひろ 愁女 寿之 充子 順子 千鶴子 慕情 正雄 嘉見 蜂朗 像山 毅 佳 倫子 直 弥生 時雄 孝一 泰女 土橋 螢 天 軸 初恋から今でも好きと来た便り

楽観を許さぬモナリザの微笑  
アメリカへ平和依存の日章旗  
手ごたえはいまいちだけとまあいいか  
楽観視してる間に島とられ  
趣味多彩楽観的に生きている  
なるようになると未来に夢を描き  
楽観はまだまだ出来ぬ風の向き  
この味でお客が客を呼んで来る  
楽観の票読み足を掬われる  
そのうちに何んとかなるさ資金繰り  
子の育ち大器晩成母の愛  
健診を楽観視した後の悔い  
楽観は禁物ですと聴診器  
楽観の時計遅れを気にしない  
楽観が過ぎて足許掬われる  
ほとぼりの冷めるのを待つ天下り  
格下の相手を甘く見た誤算  
楽観で仲よく生きたノウテンキ  
楽観にあしたの保証などはない  
マイホーム何とかなるとロソクむ  
風邪ぐらいと言ふ楽観は危険だよ  
楽観が表彰台を遠くした

遠野 碧 小雪山 山久 セツ子 扶美代 伊津志 注湖 遯行 登美子 節子 正雄 慕情 准一 かつ子 いさお 一花 ふみ 朝子 一弘



楽観が悲観となつてのしかかりケルン積む祈りの山を甘く見た

長生きに楽観出来ぬ預金帳  
借金が何だ気楽にマイホーム

責任が無くて楽観論ばかり  
百歳を過ぎてても指を折っている

楽観視出来ぬ地球の温暖化  
野党なら気楽に言えたマニフェスト

今日楽観明日は悲観の株相場  
子は好きな時に産めると三十路の娘

何のかの言うても日本住みやすい  
戦争を楽観論で始めたか

シナリオは神のみぞ知るケセラセラ  
平成の竜馬がきつと現れる

楽観的な人の傍ら温かい

佳

楽観な医者に見立てに眠れない  
蟻の列横目に歌うキリギリス

ここ五年悩んだことは何もない  
楽観の隣に無知が棲んでいる

乗り越える山の高さを気にしない

時期がくりや柿もミカンも熟します

アツハツハ大きな口へ運が来る

いつまでも冬の時代は続くまい

軸

普天間を楽観してた鳩ポッポ

日の出  
隆盛  
俣子  
光久

(編) 洋

満子  
くにこ

章司  
倫子

茶子  
美千代

四郎  
強一

としお  
悦子

和郎  
淳司

公誠  
公一

裕之

泰女

みつこ

播本充子

アツプ

岸本 孝子選



アツプした髪に女の香が匂う  
医者代がアツプアツプの老いふたり

小遣いアツプ家計仕訳に言い出せず  
血が騒ぐアツプテンポの阿波踊り

レベルアツプ目指した夢に縋りつく  
髪アツプ清楚な女の身繕い

真央ちゃんを真似ても脚は上らない  
デジタルの皺がアツプに耐え切れぬ

アツプダウンきつい山道膝わらう  
アツプした髪のはつれが色つばい

ギブアツプするには早い喜寿米寿  
二合では酔えなくなつた酒の量

今日よりも少しアツプの明日にする  
横文字の社名グレードアツプする

昇進の度に故郷が遠くなる  
アツプダウン八十路の坂がきつくなる

髪アツプした娘が急に大人びる  
イメーシアツプブルーの色を変えただけ

オーデオロン一吹きドレスアツプする  
平和への声をポリリュームアツプする

大きめに米寿の笑顔撮つておき  
怖いもの見たさアツプの鏡見る

典子  
五月

遠野  
靖博

勝視  
志華子

茶子  
碧

婦美子  
和郎

遡行  
朝子

朝子  
朝子

朝子  
朝子

朝子  
朝子

朝子  
朝子

朝子  
朝子

朝子  
朝子

スピードアツプ影に保線の汗まみれ  
アツプした分だけ税に持つてかれ  
子育てのバックアツプで働ける

アツプより解雇が怖い不況風  
昇進の度にライバル増えてくる  
振り向けばアツプダウンのいばら道

ドレスアツプ今日もナンパをされに出る  
セールのアツプテンポに腰が引け  
第一子アツプ写真の多いこと

いくめんがアツプアツプでおむつ替え  
アツプダウン株の尻尾が掴めない  
アツプダウン人生なんてこんなもん

平均寿命年々アツプする不安  
素人がアツプで写すのは怖い  
点滴のテンポアツプにある祈り

拡大でないと目立たぬ謝罪記事  
税アツプ心の慣れを待つている  
ライトアツプ一度はしたい山桜

悪い事すればアツプで写される  
大掻きのアツプアツプで世を渡る

ギブアツプするまで辺野古口説かれる  
アツプアツプと底なし沼をいま渡る

あつちが痛いこつちが痛いでも登る  
ベースダウンアツプの夢は消えたまま

あつちが痛いこつちが痛いでも登る  
ベースダウンアツプの夢は消えたまま

あつちが痛いこつちが痛いでも登る  
ベースダウンアツプの夢は消えたまま

あつちが痛いこつちが痛いでも登る  
ベースダウンアツプの夢は消えたまま

あつちが痛いこつちが痛いでも登る  
ベースダウンアツプの夢は消えたまま

あつちが痛いこつちが痛いでも登る  
ベースダウンアツプの夢は消えたまま

正雄  
猿杵  
千歩  
輝夫

(七) 順子

大鯨  
賢子

正彦  
悦男

悦男  
毅

美千代  
美千代

(古) 弘子  
ヒデコ

充子  
政勝

一壺  
慕情

忠  
粹

高  
明

螢

高瀬稲石

高瀬稲石

# 初歩教室

題 — すんなり

鈴木公弘

動詞に絡む言葉を題にしました。こういう題の場合は、うっかりすると、簡単な説明文のようになってしまう。そうしないためにはどう取り扱ったらいいのか、を勉強してほしい。次が次第です。

次の句は題の間違い、文字の書き違いによる句でした。記名せず句だけ載せておきます。原 ケータイも免許も持たずゆつくりと原 すんなりとくく苦のない離婚劇

劇という字が間違っていました。

【文字の加減をすればよくなる句】

原 すんなりが時には努力の糧になる 健柳

添 すんなりが時に努力の糧になる

原 役当るすんなりきまる年の順 美紗子

添 役当たりすんなりきまる年の順

原 自分の思いすんなり言える昨今です 綾乃

添 自分の思いすんなり言える年になり

あるいは「すんなり言える昨日きょう」

でもよいと思います。

原 すんなりと勝たせてくれぬ後一人武臣  
「後一人」が読み切れません。世の中「こんなもんだ」という発想でしょうか。「何であるかを表現しておられたら、もっとよくなつたと思います。」

原 アラフォーの娘すんなり決めてくる 義雄

添 アラフォーの娘すんなり嫁(ゆ)くと決めて

情況はなんとなく想像できます。したがって原句と変わり映えない添削になりました

が、やはり「何を」を明確にしたほうが、読む人にとつて親切かと思ひます。

【発想がやや平凡、他人事、説明になつた句】

原 愛人とすんなりいかぬ遺産分け 智子

真実ですか。受けを狙つていませんか。

原 暑すぎた夏もすんなり秋の風 節子

原 髪の毛にすんなり落ちる萩の花 俊子

哀れ味がもう少ししみ出てきたらよかつた

のに……そこまで読み切れないのが残念です。

原 帝王切開すんなり産まれ白い肌 登美子

添 帝王切開すんなり生んだ白い肌

本当は「産まれた」と書きたかつた、というところかと思ひます。しかし中七になりま

す。そこで「産まれ」とされたのでしょうか、帝王切開されたのは自分、という立場で描い

てはしかつたですね。

原 すんなりと引き下がる嫁 今日は何 智加恵

これが真実の嫁姑関係かもしれません。

原 ごめんねとすんなり星になつた夫 妙子  
「お先にごめん」と言つて旅立たれたのですから、いいご主人様だつたではないですか  
：普通は言ひませんよ。

原 宝刀が錆びてすんなり抜けなだ 美恵子

受けを狙つたように感じられる分、ここに置かざるをえませんでした。

原 すんなりと私の腕に注射針 玲子

職業です。許すはかありません。

原 血の中へすんなり入るのは演歌 志延

時々「…のは」という作りを見かけますが、

実はこういう型は「説明」なのです。

原 すんなりと解決したい検察官 ちづる

添 すんなりと検察官の腕に乗り

ちづる様のご職業は「検察官」ですか。原

句をそのまま受け止めれば、そうなります。

原 ぢぢ・ばばの仲をすんなりひ孫もつ 久子

添 すんなりと仲持つひ孫いてくれる

原 難題もすんなりはこび拍子抜け 孝明

添 難題もすんなり拍子抜けになる

原 節約もすんなり受ける戦中派 清

添 節約をすんなりエコという時節

原 すんなりと親の小言が何故聞けぬ 孔一

添 すんなりと聞かぬ子どもの道があり

親ですから百歩ゆすつて下さい。

原 すんなりと三振取つて波に乗る 宏造

添 すんなりと三振取つて負けいくさ

原句のような場面は少なくないでしょう。しかし、そのまま言ってしまうと川柳味が薄くなります。逆から観ることも重要です。

原世話役の依頼すんなり後悔だ 開子  
添世話役をすんなり受けて泣かされる

【よりよい句をめざして】

原すんなりと妥協ゆるさぬ妻の癖 弘泰  
添すんなりと妥協ゆるさぬ妻の意地

原採め事も母がすんなり糸はくす 志郎  
添採め事も母はすんなり糸はくす

原負けは負けすんなり呑んだ喉の奥安子  
添負けは負けすんなりと飲む喉ほとけ

原裏口で入学入社すんなりと 篤  
添裏口で入学入社すんなりと

原直感で思い通りに事連ぶ 弥生  
添直感が思い通りに事連ぶ

原根回しですんなり通る決裁書 憲司  
添根回しですんなり通す決裁書

以上三句、主として「で」という表現方法を改めました。「なんとかで」と描いた川柳は少なくありませんが、よく観てください。

その「で」は方法・手段・便宜・原因・理由・状態・場所・時間・期間・年齢・基準・金額・材料・天候などを表すために用いられています。つまり、句の本体を成す言葉と一体化して、その本体の様を簡潔に説明する役割を担っているのです。

最近あまり注意されなくなったようですが、「:で」は説明句に陥らせてしまう危険性があるので、なるべく使わないで、よく言われたものです。要注意でしょう。

原悪口もすんなりかわす技を持つ ヒロ  
添悪口をすんなりかわす技を持つ

原ノーサイドと言いつつ裏が騒がしい 正二  
添ノーサイドと言いつつ裏が騒がしい

【入選句】

夫婦だからすんなりうんと言えぬこと 堅坊  
行く末をすんなり保険値踏みする 英男

すんなりと入会できぬ老人会 百合江  
釘一本すんなり打てぬ父の棺 振作

すんなりと天国行きのキップ欲し 宏之  
酒とろりすんなり丸め込まれてる 宣子

すんなりと白状したら幕下へ 敏治  
すんなりと開かないかばん旅初日 冷子

すんなりと着られ新調まめがれた こそえ  
「まめがれた」では説明調になりますので「まめがれる」がよいでしょう。

すんなりと君に委ねる冷たい手 菜々子  
すんなりと伸びた手足を見せたがる かずみ

愛してもすんなりいかぬプロポーズ 章子  
出来ちゃってすんなり決めた事実婚 道子

すんなりとひとり旅する道しるべ 惠美  
すんなりと夢の中では和解出来 淑子

老い二人すんなり行かぬ頑固張る エミ

すんなりとはけたスカートサイズ見る 惠美子  
手足ほどすんなり伸びぬ通信簿 紀子

すんなりし事が連んだ要注意 酒坊  
イエスノーすんなり言えず気が滅入る 久美子

すんなりと座った椅子に待つ試練 隆彦  
【佳句】

すんなりと遺産分けする黄金虫 洋子  
我まがすんなり通り狂いだす 治子

「我がまま」と書いたほうがよいでしょう。  
すんなりといけば行ったで裏を読む 弘光

温室ですんなり伸びた木のもろさ ひとみ  
すんなりとハート盗みにきた和術 幹子

にせ証拠知らずすんなり白自する 憲彦  
すんなりとした脚持って来世こそ 純子

ギブアップすんなり言えて溝うる 一子  
無理な嘘すんなり聞いたふりをする 正彦

すんなりと妻の願いを聞いておく  
【今月の推薦句】  
ねじれ国会すんなり通るわけがない 近藤 秋星

すんなりと和解 大事な人だから 酒井 真由

泥臭く生きた余生はすんなりと 大久保真澄

【私の句】  
残業とすんなり言えば疑われ 居候すんなり空にしてくれる

老い二人すんなり行かぬ頑固張る (登載漏れの方は役員が添削して返却します)

# 秀句鑑賞

同人吟 山田 耕治

—11月号から

終電車やつぱり一人積み残す

古久保 和子

車掌さんも、長いエスカレーターを駆けあがってくる人までは見えません。改札口まであと五十米、飲んでるのでラストスパートが利きません。ああ今日も一人、手を振る小父さんを残して終電車は出て行きました。

大抵はやる気があれば片がつく

升 成 好

それなんですよ、やる気が出る薬はありませんか。やはりお尻に火がつかなければあきませんか。

手加減をされて勝負を投げ出した

平 嶋 美智子

孫と遊んで、いつまでも興味をつないでやるには、ときどき負かしてやることも必要です。手加減は分らないようにしなければね。

孤独死も想定内にある独り

宮 尾 みのり

親しいご近所があったのですが一日は経っていました。引き取り手のない遺品がトラックに一台分というのもテレビで見ました。われわれの世代はなかなか物が捨てられませんねえ。それはさておき、いろいろ想定内において、その時はその時、精一杯元気に残る人生を生きていきたいと思います。

あの人とまだ握手さえしていない

江島谷 勝弘

「さえ」が面白いですねえ。しておきましよう。一日でも若いあいだに。あの人って、ここでは言えません。次の句会の別れ際、さりげなく手を出してみてください。長い間溜っていた静電気がパシツと走るかも知れませんが。

一人分作って食べて後仕舞

浅 野 房子

リズムよく仕立てられています。この句、どうしても見過ごすことができませんでした。お姿が目には浮かびます。いつしよには死ぬません。いつかは、どちらかがこうなるのですね。一人用の鍋物セットもお店に並ぶ季節となりました。

お日様に言えないことを月に言う

居 谷 真理子

お日様に言えないことか。うーん、ありますよねえ。お日様に思いが、あなたに言ってもしかたがないことがねえ。

癌からの復帰ヒーロー・インタビュー

高 瀬 霜 石

病気に勝つには強い精神力がなければなりません。ご自身も、ご家族も、お友達も、「やったやった」とやんやの喝采です。

結論を迫る薬缶の湯が滾る

高 島 啓 子

滾る薬缶を間接視野に入れて、何かし続けることができますか。私はいま原稿を書いています。枝豆を茹でながら。グラグラ吹いてきました。もう思いがまとまりません。腰が浮いてきました。鉛筆を投げ出しました。

息子より優しかったんです詐欺師

三浦 強 一

息子には息子の言い分が、詐欺師も人の子、わが親のような老婆を欺く葛藤、おばあちゃんもまだどこかでこの青年を信じているようだ。刑事も登場。十七音字の短編小説。

目も耳もとても口にはかなわない

三好 専 平

そうです。しかも口は一番最後まで元気で、す。言われてみればという、みことな穿ち味の句です。

六十九小さく狼煙あげている

太田 扶美代

「六十九」もいい、「小さく」もいい、相俟つて愉快な句です。

動く歩道も小走りで行く都会人

澤田 定子

よく見かける光景です。僅かな距離を。どいういう心理なのでしょう。じつと立っているのが勿体ない、まどろこしく思うのでしょうか、穿ち味の句。

好きだけ遊びなさいと叱られる

酒井 一 壺

親からよく言われました。今は、好きだけお飲みなさいよ、死んだらお酒を供えてあげるからつて。

父の素顔一番知らぬのは家族

榎本 宏子

穿ち味の句です。男は仕事、休日の弛んだ父の姿を見ては分かりません。仕事の酒も飲みます、午前様もあるでしょう。毎日ご苦勞様です。

クラス会昔の華は萎れてた

寺井 弘子

この頃古稀のクラス会をやりましたという話をお聞きすることがあります。憧れのマドンナも老眼鏡を掛けています。皆さんのような半生をお送りになられたのでしょうか。

時どきでいいの聞かせてほしい声

安土 理恵

同感です。私も何人かはいっています。「モチモチ」ママがキッチンでなにか言っているのが聞えます。

忘れないそれが女の悩みです

古今堂 蕉子

この句を見て、女性の方は「そうよ」、男性は「こわいねえ」と言うでしょう。

敬老の日には国旗を掲げたい

上垣 キヨミ

国が定めた旗日なんですが見かけませんね。御長寿バンザイ、元気なおばあちゃんバンザイです。

血糖値と仲良く暮らすことになり

小澤 幸泉

何の報いなのかと、自嘲がこめられているようにお見受けいたしました。私も仲よく暮らさなければならぬものがひとつあります。一病息災、末ながく仲よくして下さい。

点滴の合間に一句考える

若松 雅枝

大きいのは一時間近くかかりますからね。お忙しい方には神様から頂いたような時間です。いい句がひとつでも出来たら感謝です。

近すぎて視野には入らないあなた

宮本 かりん

下五の止めの「あなた」が効いていますので、お惚気になりました。お互いにこれいいのです。目障りになってはいけません。

愛してゐるくすぐったくてよう言わん

中宇地 秀四

聞くほうもくすぐりたいでしょう。いきなりどうなったんやろかと。「ありがとう」なら言えるでしょう。日に何度でも。

おしゃれした友見て背筋伸ばしてる

原田 すみ子

痛いところを突かれました。私も反省です。背筋ピンが最高のおしゃれですね。

—水煙抄

秀句鑑賞

—11月号から

柿花和夫

進行はあなた任せのバスツアー

上田紀子

近頃流行のミステリーツアーは人生そのものの。信頼できるあなたが居ればこそ。行先は何処であろうと付いて行きます。

棘のある言葉は丸くして返す

木見谷孝代

目には目を、歯には歯をと報復を許す宗教もある中で、見事な大人の対応。あとは丸くして返された方のお人柄に期待するのみ。

ややこしいことはすすしくなつてから

木村忠義

猛暑でエンストした体と脳。それに歳のせいもあつたりして。机の上は書類の山。すずしい秋は短く冬はすぐそこに。ややこしいことは春になつてから……とならないように祈るばかりです。

手の出ないものは嫌いと言つておく

澤井敏治

海外旅行、高級ワイン、松茸に河豚。武士は食わねど高楊枝とまいますか。因みに美

人はお嫌いですか？

去年まで代返出来た百五歳

木田比呂朗

高齢者の年金問題を取り上げた句は多数ありましたが、中七がユニークで秀句といたしました。役所へ死亡届を出しても、年金事務所には連絡しません。法の盲点です。

ゆつくりとできるつもりでいるあの世

安藤なつこ

弔辞に曰く、どうかゆつくりお休み下さい。なんといいい加減で無責任な言葉でしょう。あの世から帰還した人はいないのでから。

初めての客に毎度と言つてはる

松岡篤

大阪弁川柳大会で入選するのでは。毎度と言つたおつちやんと、言うてはると受け止めた作者を瞬時に知己にする、大阪弁の効用。

一つ上だからと上座をすすめられ

近藤治子

飲み会の席でも上座下座にこだわる御仁がおります。干支が一つ上だというだけで。わたくし、干支はキリンといかがですか。

ポンネツト猫が残した江戸小紋

古田千華

洗車してワックスまで掛けたのに。肉球の跡まで残してくれた隣家の猫め。ここんとは後々の付き合いを思い、かみつき猿でなくてよかつたと諦めるのみ。

生き下手と死に下手同居八十路ゆく

中島春江

ご夫婦のことではなく、ご自身のことですね。諦観と楽観の日々を上手に生きておられる春枝様。もはや阿蘭梨の境地とお見受けします。

擦り切れたフレーズ糠味噌に埋める

沢山啓子

とつておきの洒落なのに誰も笑わない。かくなる上は、母から引き継いだ自慢の糠味噌にぶち込んで再登場させる他はない。乳酸菌で醗酵させ、ギャフンと言わせて下さい。

電気代どうでもいいと言つて猛暑

村中悦男

電気代を節約して熱中症で病院へ。こんなニュースがテレビや新聞に毎日。他人事とは思えない悲劇。この夏の電気代はエコブームをふつ飛ばしました。この冬は厳冬の予報。年金には厳しい冬になりそうです。

恋をした彼女に小骨みな抜かれ

坂本智子

骨抜きにされたメモロの男。小骨でよかった。背骨まで抜かれていたら、失恋した男は復元力ゼロですから人生が狂います。

歩を止めて振り向いたのに見もしない

角谷幸甚

振り向かなかつたのは別れた恋人、反抗期の方が子。待つていた幸運の女神でしょうか。もし奥様であつたら、これは事件です。

## 『星のたわごと』

河内 天笑 著

## —『星のたわごと』を読む

天根 夢草

まず「略歴」を読む。平成12年10月川柳塔社主幹、とある。その前年の平成11年10月に私は橋高薫風主幹(当時)と二人きりになった。定金冬一さんの通夜の帰り道の電車の中(富田林から難波まで)だった。この夜、薫風主幹は、いつになく冗舌であった。

冬一さんの思い出、時実新子のこと、そして川柳塔次期主幹の話になって河内天笑さんの名前が出た。川柳塔社の次のトップは天笑さんなんだ、私は特ダネを貰ったような気持ちになった。そんなことを思い出した。

次に「序文」を読む。川柳集を読むとき、序文は誰か、私はとても気になる。ほとんどの序文は師匠筋である。が、天笑さんは序文

執筆者に小島蘭幸新主幹を選ばれた。西尾葉氏、橋高薫風氏すでに亡い今、天笑さんにとって師匠筋、先輩筋に序文を書く人はいない。蘭幸さんの序文は、先輩を敬う、おだやかな書き方が5ページに亘って綴られている。読んで気持ちのよくなる「序文」であった。

16ページを読む。「題字・カット/河内天笑」とある。表紙の題字は味わいのある金色の文字が紺地の布張り表紙によく似合う。

カットは147ページにやっと出てきた。恐山円通寺とある。旅のデッサンのようである。

次に「あとがき」を読む。昭和9年9月の室戸台風の直後の出生、そして翌年7月には母との死別と尋常でない天笑さんの背景を知

る。

次に「作品」を読む。目次をみると「夢」に始まって最後の「健康」までなんと三十六章に分かれていることに驚く。それぞれの章名は見出しではなく、ノンブルの横に記載されているので作品全体の区切りはなく、巻物を読み続ける感じであった。

一ページ4句建。4句建は安定しているので落ち着く。B6判に12ポイントか14ポイントの文字。天地を揃えていない一句一句は読

者に語りかけてくるようだ。七百余句が読者に私に語りかけ続けてくる一冊である。

そのうちの84ページの「メルヘン」と85ページの「社会」見開き八句は一句の最初のこ

とばの母韻がすべて「O」である。次の通り。

この世へは虹をつかみに来たのです

この森は初めてなのに懐かしい

この世とは裏と表のあるところ

この世とは茶の間で地獄見えるところ

よう咲いている猿山さんの文字

読み辛い字と争わぬことにする

よう分かる落語みたいなお説法

嫁さんがいちばん偉いちんどん屋

意図されたことだと思った。

他にないかと探してみたがない。一ページだけ母韻が同じところは122ページの「I」、172ページと183ページの「A」、194ページの「U」があった。どんな川柳作品か掲出しなが

いが著者の意図するところをうかがうことができてたのしくなった。

河内天笑、河内月子夫妻の住む堺市堀上緑町の大きな家の大きな庭にはツルムラサキが植えられていた。昔々、泊めていただいたあの日が、今思い出されてならない。

# 『星のたわごと』

河内 天笑 著

## 『星のたわごと』鑑賞

新家 完 司

塔謠千号記念大会の記念品として頂戴した河内天笑川柳句集。濃紺に金箔の文字が美しいシンプルな装丁は、天笑さんの大らかでさっぱりした人柄を思わせる。

俄雨お地蔵さんに湯気が立ち

菊一輪留守をあずかる構えなり

電線の風晒されたまま年を越し

一族の顔を見渡す睨み鯛

マンションとビルの谷間に沈む寺

あとがきの中で、ご自身のことを「横着で超楽天的」と述べておられるが、それだけでは、会社を興し経営を続けることは不可能。個人会社でも厳しい競争を生き抜くためには、細やかな目配りや気配りが不可欠である。右五句、「湯気が立つ地蔵さん」「一輪の菊」「電線の風」「睨み鯛」そして、「ビルの谷間の寺」など、日常のありふれた対象を見逃さ

ず、自分の想いを重ねている。このような句は、丁寧な観察眼なくしては生まれえない。そして、その観察眼は、「細やかな想い」「深い想い」がなければ生まれえない。句は作者の分身であり、句を読めば作者の人柄が分かる。いらつしやいませと数蚊に刺されたり

セーターで行けばネクタイばかりなり

番茶のむ時もお酒を飲む手つき

身につけてきた図太さに気が付かず

この先も自分に甘いことでしょう

哺乳瓶あつという間にビール瓶

天笑さんの句の真骨頂はユーモアである。川柳に限らず、上質のユーモアは、自らを嗤う自嘲にある。古川柳は他者の欠点や失敗を嘲笑するものが多かったが、現代川柳は自分の姿や自分の想いを述べるのが主流になっている。右、それぞれ、ご自身の姿を率直に述べていて痛快。中でも、「番茶のむ時も」や「身に付いてきた」そして、「この先も」などは、まるで私自身のことのように苦笑するほかはない。自らの想いを素直に述べた句は常に普遍性があり、読者の共感を呼ぶ。

先走る僕とゆっくりめの妻と

妻の手に渡るとかたいカネになる

頼つたらどンドン強くなる妻だ

天笑さんの傍らにはいつもにこやかな月子さんがおられる。まさに夫唱婦隨のオシドリ

夫婦であることは皆さんご承知のとおり。「先走る」夫を宥めながらも、ゆっくり付いてゆく妻。所帯持ちがよく頼り甲斐のある妻でありながら、決して出しゃばらない月子さんの姿が、右二句に表れていてほほえましい。

阪神に恋わずらいをして久し

阪神が勝つて飲み屋は晴れ渡り

序文で小島蘭幸さんが書いておられるように、平成十五年十二月、タイガース優勝記念川柳大会が道頓堀の「くだおれ」で開催された。私も参加させていただいたが、天笑さんの企画力と実行力を如実に示す楽しい大会であった。タイガースの法被を着て六甲風を合唱した痛快なひとときは終生忘れることはない。まさに「おかげさま」である。

わろてんといっぱん怒ったりなはれ

頭のとっぺんから尻尾までコテコテの大阪

弁。天笑節が遺憾なく發揮された逸品。大阪

弁のイントネーションとニュアンスが分からない人には理解不能ではいかと案じる。が、

大阪育ちの私には面白くて仕方がない。

歩いても竹を踏んでも肥えてくる

ステップが五ヶ所心ぞう動いてる

心臓に地震来ぬ様手を合わす

健康に一抹の不安をお持ちの天笑さん。くれぐれもお大事になさって、長生きしていただきたい。そして、次は、月子さんと一緒にオシドリ句集を見せていただきたい。

## 『星のたわごと』

河内 天笑 著

## —天笑先生への手紙

江 見 見 清

天笑先生、この度は句集「星のたわごと」のご上梓本当におめでとございます。カルチャーでご指導を受けている一人として、また新しい指針を頂いた気持ちで嬉しい限りです。多くの著名な先生方がこの句集のお祝辞を書かれる中、若輩でカルチャーの一受講生の私がお祝いの文を書く事の失礼をお許し下さい。カルチャーでは先哲の秀句の鑑賞から作句の一切を、様々な例でお教え頂いた事を思い出しながら読ませて頂きました。例えば句を推敲する時の留意事項として、リズムが良いか、他人に伝わるか、単純化されているか、一茎一花であれ、など十三項目、また良い句であるための条件、句作りの上ではならない事、しない方が良い事などをお教え頂き今も私の作句、選句の時に繰り返し思い

出しては、指針とさせて頂いております。

カルチャーでは、新人古参に関係なく一句一句に丁寧な添削、あるいは自分ならこういう句になるだろうとの自作の句も加えられ、受講生が納得するまで説明をされ、ある時は質問や意見にも耳を傾けられます。先生というより兄貴か先輩のような雰囲気でお教え頂いており、先生はつくづく人がお好きだという事をいつも感じています。

先生は人が好き、人に全てに優しい。

善人に囲まれ居心地がわるい

ゴキブリの死因はきつと食あたり

点取り虫は点取り虫が大嫌い

僕のモノサシで貴方を裁けない

ぼろくそに言われた出会い大事がり

ネジ一つ抜けた辺りにある人気

悪人も嬉しい時は笑顔よし

先生は良い川柳の条件として特に穿ち、軽み、見付け、リズムを大事にされています。句集の中にはこれらのお手本が、これでもかと並べられています。こうした発想がどうして生まれるのかを、教えて頂きたいものです。

悩みみな喋らせてから欠伸され

葬式も結婚式も同じ靴

力んでるところを背中から見られ

しゃぼん玉しだれ柳に体当たり

煩惱はいつも吃水線を越す

生き様や人生を句にするにはテーマが大き過ぎ、抽象的あるいは大層な表現になり勝ちですが、先生の気負わず平易に表現された句からは、人生をゆつたり生きていく心構えを学んだ気が致します。

生きてゆくその日その日のあみだくじ

天国はたぶんこの世にしかないぞ

B面を晒し仲間にして貰う

自分が変われる他人は変えられぬ

吠えそうになったら腕立て伏せをする

一所懸命の結果が喜劇でも

私はこの句集を「川柳とは何か」という紹介や、川柳を始めた方に、紹介させて頂きたいと思いました。身近に豊富にある題材が、五七五に凝縮され、ズバリと意を伝える事の素晴らしさや、楽しさを知ってもらいたいと思うからです。

誰も居ぬ日に当ててみる紙おしめ

風下はおいしい話聞いただけ

うつむいて聞いたらなんぼでも怒り

その日まで飲めますようにお賽銭

肚の虫治まる頃は酔いつぶれ

最後にどうしても書かせて頂きたい一句は

杉木立いま満月をさし上げる

お身体は特にお大事になさって下さい。

早い時期での第二句集をお待ちしております。

す。それも奥様との合同句集にて。



## 不朽洞会員

# 宮口 笛生さんを悼む

川柳塔なら 中原 比呂志

お別れの儀式のひとつに、唇に末期の水をささげる。

柳友の一人は、神の葉に酒を浸して、笛生さんの口に注ぎ、お別れをつげた。笛生さんにはこれが一番ふさわしいと。

それほどお酒が好きだった。家族を愛し、川柳を愛し、こよなく酒を愛し、多くの人から愛された笛生さんだった。

笛生さんは酒豪だったが、人懐っこくって情にもろく、理屈を捏ねる訳でもなく、明るく鷹揚な飲み口で、乱れた姿を見たことはない。だからみんなにも好かれた、いいお酒であつた。

孤被り神は酒豪のようであり  
病氣しているよりましと昼の酒

まだ死ぬぬ酒もビールもおいしくて  
だが、平成二十二年十月一日、病床で「寿司が食いたいから明日持ってきてくれ」と介

護の娘さんに言つて別れた数時間後の午前一時に急逝された。

釈 賢生 享年八十五歳。

笛生さんとの思い出は、と尋ねると多くの人が「酒好きと芋煮会」を挙げられる。

自宅を開放しての芋煮会は、床が抜けるほど盛況な句会だったと懐かしむ人が多い。

こうなると奥さんも着炊きものに変。時には近所のおかみさん連中の応援も頼んで炊き出しをされたこともあつたそう。その愛想良い献身的な奥さんが春に急逝され、後を追うように旅立たれた。

迷惑を言わずとまつてけ泊つとけ

強烈なパン子嫁はん先だたれ

D51機関士

本名：宮口賢治、大正十五年、奈良市九条、薬師寺近くの農家で産声をあげた。

「笛生」の雅号は「機関士は笛を生む」から命名されたそう。名付け親は長孫白鬼氏。日本が中国へ戦火を広げていく昭和十六年に十六歳で、旧国鉄竜華機関区に就職。機関助手を経て十九歳で憧れの機関士となり、関西本線（今の大和路線）で勤務される。

職歴は、機関士、乗務員指導担当、技術区助役など歴任。鉄道功績賞、鉄道功労賞を受章し、昭和五十五年に三十九年間の不規則勤務から解放されて、定年退職された。

機関車に俺の指紋が残る車庫  
長生きが出来そう徹夜のない蒲団

川柳との出会い

戦時中、言論抑圧をされていた社会が、戦後は一挙に解放され、文化、文芸の復活が燎原の火のように全国に広がっていく。国鉄の職場でも同様だった。

「大阪鉄道局に「うまや俳句会」があつたのでそこに入会した。

当時、川柳は駄洒落だ、低俗だと言われていて、私もそうだとばかり思っていた。昭和二十二年、百貨店で番傘川柳誌を見て、川柳って何が駄洒落だ、一茶の句によう似てると買い求めて作句し、大鉄文芸川柳欄に投句したのが始まりだった。

そのなかでつぎの二句が入選した。

空襲はもうない家の明るい灯  
相住い陰での叱言知っている

それ以来、川柳って面白いやないか投句を  
続けた。」(「ごいち」笛生句集より)

昭和二十三年「つばくろ」国鉄川柳会入会  
以来、実に六十二年間の川柳歴であった。

昭和二十五年に奈良番傘の前身である柳茶  
屋川柳会に入会し、柳茶屋誌六号からのお付  
き合いがある関係上、片岡つとむ氏をはじめ、  
奈良番傘の各指導者とも親交が長く深かった。

### 路郎先生と笛生さん

笛生さんにはまた、こんな話がある。路郎  
先生の昵懇を得て、戦後の不足する食糧を運  
びながら、不朽洞に出入りをしていた頃のある日、彼は先生の前へ手をつかえて「梨里さん  
を私の嫁にください」と言ったそうだ。先生は「梨里は百姓をようせんからなあ」と仰  
言ったが、このように真つ正面で銜いがない。  
句も性格もそのままである。(笛生句集「ご  
いち」序文 橋高薫風より)

や奈良でも大会の折には懸垂はすべて書いて  
おられた。

### 川柳塔ならの発足

路郎先生は奈良県に川柳塔の句会を根付か  
せようと努力されたし、橋高薫風先生もその  
願いを引き続きもっておられた。しかし、な  
かなか実現には至らなかつた。平成十年、川  
柳塔同人も増えたことだし、薫風先生のお力  
添えもあり、笛生宅で何度か立ち上げ準備の  
打ち合わせをおこなつた。

奈良番傘の片岡つとむさん、杉野睦朗さん  
にも薫風先生は話をされ、ご支援を頂くこと  
になつたが、笛生さんの奈良番傘との長年に  
わたるお付き合いが陰の大きな力となつて、  
今日の「川柳塔なら」が十月に発足できたの  
である。

### 宮口笛生さんを偲んで

(平成22年10月・追憶吟・二十九名)

訪中団長街の見事な字に見惚れ 杉野 睦朗  
惜しまれていますあなたの手筆はきき 大村美千子

笛生さんの達筆には定評がある。本社句会

笛生園

吟醸を浮かべ極楽湯の主人 山田 順啓  
塔の影消えても句座は常しえに 笹倉 良一  
コンサート名笛を聴きふと思ふ 嶋田 章治  
杓交わすふるい柳友偲ぶ今日 里中 秋泉  
良き人を失ない偲ぶありがとう 田中カズ子  
そちらでのお酒の味はいかがです 坂井ささ恵  
御逝去へあなたの慈眼目に浮かぶ 森田 和夫  
濃厚なお顔いまでも残る句座 古川 洋子  
浄土でも酒を囲む日五指繰る日 西川 國治  
ごいちの汽笛と遺る男の名 中山恵美子  
SLで逝く極楽で酒を酌む 初山 隆盛  
笛吹いても帰つて来ない酒の友 吉村 一風  
笛生さんゆるりゆるりと逝つてもた 江島谷勝弘  
そのウイットで天国を笑わせて 吉岡 修  
そちらでも笛生節の五七五 森本 弘風  
天国の宴の席で五七五 佐々木満作  
良い人生酒と川柳友として 森中 博一  
ありし日の名筆残る師の訃報 加門 勇子  
天国で酒と作句にえびす願 飛水ふりこ  
甲笛の一声彼岸花揺れる 辰谷真理子  
汽笛一声空を仰いで偲びます 安土 理恵  
ごいちに乗つてにつこり銀河行き 渡辺 富子  
般若経黄泉路の旅はどの辺り 吉川 寿美  
ごいちで旨いうまいとワンカップ 坊農 柳弘  
合掌のまぶたに温和な笛生さん 米田 恭昌  
汽笛一声銀河鉄道が空へ 中原比呂志  
天国のお酒のお味いかがです 大内 朝子



追悼

## 澤田和重さん

川上大輪

和重さんの訃報を知らされたのは九月末頃だった。それはふとした会話から「和重さんが六月に亡くなられたらしいよ」という話を聞いたのがきっかけだった。

ご自宅にお電話をして奥様にお話を伺うと六月二十三日、小腸癌でお亡くなりになられたとのことだった。

温厚で優しく誰からも好かれていた和重さん。どちらかと言うと物静かで、わかやまの句会に見えられても、いつもにこにここと後ろの席で遠慮がちに座っておられたのが印象的であった。

川柳塔わかやまに初めて見えられたのは平成六年の六月の句会で、それから欠かさず句会に出席され、平成九年の一月からわかやまの同人として参加していただいていた。

平成十六年にはへ長男の嫁に猫語で使われるが前年度の川柳塔わかやま年間賞の「あ

おい賞」第二位に入賞し表彰されている。

奥様のお話によると平成二十年の一月に癌が見つかり、二月に手術を受け、それ以後は入院を繰り返されていたとのことだった。

平成二十年二月の川柳塔わかやまの雑詠にも、入院直後に詠んだ句が見られる。

入院は明日散髪しておこう

病院で野心を少しあそばせる

その後も雑詠欄には病魔と闘う和重さんの思いや、心の叫びが伝わって来る作品を発表されている。

前向きに生きて明日が見えてくる

生き方に迷う一病持ってから

酒たばこ止めて長生きしてやろう

朗らかに暮らそう日々を楽しんで

追い払いたい一病と同居する

明日あることを信じて目を閉じる

独り言自問自答でけりをつけ

平凡な幸せを知る病抜け

しょぼくれたら駄目と自分に言い聞かす

生きるとは三度の飯を食べること

他人なら同情ですむガン告知

玉子かけごはんがこんなにうまいとは

介護され介護の重み思い知る

最後まで川柳に情熱を燃やし、奥様や家族思いだった和重さん。

背凭れに家族がなつてくれている

腹からの笑いひとつになる家族

すこしだけ甘えて愛を確かめる

妻と言うつつかい棒のある強み

あまりにも早い死だった。思いがけず知らされた訃報は今でも信じられないが、悔しく残念でならない。しかし今となっては和重さんのご冥福をお祈りすることしかできない。

和重さんありがとうございました。

俊道 and 光信士（享年七十七歳）

合掌



## 中村れんげさん

### ありがとう

奥田 みつ子

九月二十六日、川柳の会「法円」の滋養さんと奈良県田原本町のホスピスに行き、ナー

センターで「中村トミノさんにお会いしたいのですが」と申しますと「中村さんは退院されました」とのこと、びっくりして「一時外泊ですか」と聞き返すと「御家族と御連絡ください」と答えるばかり。腑に落ちぬまま御自宅に電話しますと「母は今朝亡くなりました」との返事。「えっ」と言っただけの言葉ができませんでした。その足で御自宅に伺い、穏やかで神々しいばかりに美しいれんげさんに手を合せました。

一月前の七月十三日、れんげさんのお誘いで玲子さんと三人、志摩観光ホテルの一泊旅行を楽しみ、れんげさんは法円の会誌創刊号が出来たことを喜ばれ、とてもお元気で優しい笑顔をカメラに遺されました。

その後、数日して体調を崩され八月初めに日赤へ入院されました。十月に電話で「検査

の結果、悪性とはつきり言われた」と話されましたが、とても気丈なお声でした。

十九日に生駒のお宅に帰られ、自宅で点滴を続けられてましたが、二十七日にホスピスの病室が空き入院されました。三十一日にお見舞した時はとてもお元気でしたが、数日置きに代わり合ってお見舞していました。

れんげさんは昭和十七年、故郷の奈良県曾爾村の母校の小学校に初めて教師として赴任、戦後は大阪市内の小学校の教師を勤められ、数多くの養護学級も担当され、皆に慕われていましたが、五十五歳すぎると気軽に大きくなった子供達を抱き上げることが出来ず、体力の限界を感じて昭和五十二年、三十五年間の教師生活を終えられました。

その後、中村塾を開いて茶道・華道・和裁着付けなど、多くの生徒さんを育てられ、大阪の他、奈良教室も増設、毎日、大阪・奈良と精力的に活動されました。その上、書道も

堪能で「何事もすべて一流でした」とは教職時代から五十年来の友情の持ち主の米田志津子（雅号・水昇）さんの言葉です。

れんげさんと川柳との出会いは平成十五年東京の川柳研究社の吉岡宵波先生と思わぬ御縁を頂き、その後、朝日カルチャー教室で勉強されました。平成十七年に句文集「えにしつれづれ」を発刊、新老人の会の日野原重明会長にお送りしたことから、大阪支部に川柳サークルを作るよう勧められ、れんげさんを

中心に私も講師として協力する形で、川柳の会「法円」が発足、何とか二年続いて会誌創刊号も出来、これからと言う時にれんげさん一人旅立たれてしまい途方に控えています。折角れんげさんが尽力された「法円」をこ

れからもどうぞ見守ってくださいませ。  
（冥福を心からお祈り申し上げます。）

れんげ咲く野原 瞬時にモノトーン

みつ子

### 遺句抄

今年また今を大事にして生きる  
せせらぎを枕にやすむ里帰り  
もてなしの美学追求お茶の道  
人間が好きで川柳詠んでいる  
えにしとはいとも不思議よ豆のつる

## 笑う門には

福来たる

高瀬 霜 石

僕の年は、還暦プラス一。同級生もほとんどが定年で、ブラブラしている奴も結構多い。でも、僕は忙しんだ。

あつちこつちから頼まれる選や、駄文の連載やら、ラジオでのお喋りもたんとある。最近、川柳の話をして欲しいと言われることも多くなってきた。

よっぽどのがない限り僕の講演のタイトルは「楽しい川柳——笑う門には福来たる」と決めている。女性が多い時は、とつても気が楽だ。話題にすぐ乗ってくれ、そして大いに笑ってくれるから。

一方、男性の多い時は、乗せるまでにちょっと時間がかかる。腕組みをして、苦虫を噛み潰したような顔で「二体、あなたは何しに来たの?」と、こつちが聞きたくなるくらいに、僕を睨んでる人もいたりする。

そんな時には、まずもって僕の友人の作っ

たこの句を紹介する。

出ていけと小さな声で言ってみる

寺田 北城

「皆さん。この句のよさは、《小さな声》にあるのです。間違っても《大きな声》で言ってみるはいけません。何故なら、こういう話があるから」と、会場のお父さんたちに言う。以下は、実話である。

僕の友人のA君は、絵に描いたような亭主関白で、もうわがまま放題。しょつちゅう奥さんに、当たりちらしている。奥さんも手慣れたもので、柳に風と受け流し、それなりに、いい夫婦といえ、いい夫婦であった。

ある日のこと、彼は、いつも通りのパフォーマンスでわめた。——以下、臨場感を出すために津軽弁になるが、解釈よろしく——「オー、気に入らねがつたら、とつとと出て行けじゃあー」

普段は、奥さんが軽く聞き流してオシマイなのに、その日だけは違った。彼女は、A君の前に三つ指をつけてこのうたもつた。

「長らくお世話になりました。誠にいたらない嫁でした。今夜はもう遅いので、明朝、早々に実家に帰らせて戴きます」

一瞬ピンとこなかったA君も、すぐに事の重大さに気づき、大いにアセツた。

「美智子。本当に出て行くんだが?」

「ハイ。あなたが出ていけと言ったのでそうします」

「イヤ、いつも言っていることだべな。なにもしないで、今日に限って、本気にとらなくてよさあ……」と、しどろもどろで、彼女のご機嫌をうかがうが、空回りである。

切羽詰まった彼は、とにかく頭をフル回転。この未曾有の危機を脱する策を練り上げる。

「美智子。本当に、本当に出て行くんだか?」

「[決意を新たに] ハイ」

「せば、オラとも連れて行つてける(頂戴)」

彼女がつかい吹き出し、事は落着いたという。川柳塔の先輩諸兄。これは覚えていて損はないですよ。但し、使えるのは一回(こつきり)。

思えば、僕も、若いころは、本気で夫婦喧嘩をしたものだった。それが、川柳を習つてからは変わった。常にもう一人の自分がいて、興奮している僕を観察し、あわよくば一句ものにしよつとしていたのであった。

奥さんの機嫌が悪いともう大変。晩酌も、早々と片付けられてしまつから、夜は長い。

夫婦喧嘩 本を一冊読み上げる 霜石

約 束

夏 目 一 粋

よほど腹に据えかねたのか「約束も守れない者はクズだ 最低の人間だ」と第二弾が落ちた。そして赤みを帯びた顔で「自分はこの歳まで他人との約束を破つたことはない。人との付き合いは約束を守ることから始まるものだ。時間だけではない。公私にかかわらず、人間としての約束事は必ず守らねばならぬ」と厳しく叱責された。

約束の重さを知つた青二才 一粋

その後、上司は「まあ座れ。腹が減つたらろ。飯でも食おう」と言い「京都のニシン蕎麦は美味いぞ」と出前をとつてくれた。蕎麦を食べながら「ちよつと言ひすぎたかな」と照れ笑いしながら人生訓めいた説得力のあるお話を聞かされた。

ニシンソバ喉につかえるホ口苦さ 一粋

自分の非を悔やむとともに上司の一徹なまでの厳しい姿勢の中に、心温まる部下への愛情を痛感したものだ。

怒鳴られた後のカバァが身に染みる 一粋

私はその後、一度たりとも約束を破つたことはない。それどころか先輩面をして後輩へ人生の礎となるよう勇気をだして注意をさせ

てもらっている。

あの時のほろ苦い蕎麦の美味が忘れられず、ニシン蕎麦を食べるたびに小柄で白髪の亡き上司が懐かしく思い出される。

約束を破つて知つた人の道 一粋

「詩」 やくそく 夏目 漱

十分前は覚えていた／十分後は忘れていた人は誰しも忘れるという困つた習性を持っている／でも忘れることが人を救つてもいる本当に「忘れた」としても／約束を破つたことと変わりは無い／また忘れたことを善意にとつてくれるか／それも解からない／だから弁解もできないから辛い

忘れたくても忘れられない：トラウマの中に約束ごとが秘められていて／未完成であればこれほど無念なものはない

遠い日の離れた恋を思い出させる／逢いたくても／逢えない悶々とした日々／逢えばオアシスのようにあふれる／感情が愛おしい

距離というハンデ・長男と一人娘の／宿命が二人を引き離していった／結ばれたいという／暗黙の約束ごととは／泡沫のように消えていった／忘れることのできない／あの日あの刻の約束ごと・君の微笑みが眩しい

現役頃の、ほろ苦い思い出話である。京都に出張の折、上司（取締役）と、とある場所ですぐに落ち合う約束をしていた。

私は別行動で午前中に仕事を済ませて約束の場所に行く積もりで仕事に没頭していた。ところが交渉が長引き、ふと気がついた時には、すでに正午を過ぎていた。「しまった」と慌てふためいていたところに、上司から電話が入った。受話器をとつた途端に罵声が飛び込んできた。「今、何時だと思ふか。君は約束も守れないような男か」と一喝されてガチャンと切れた。

一喝にさつと血が引き不整脈 一粋  
すぐタクシーを呼んでもらい約束の場所に駆けつけた。恐る恐る応接間に入り不動の姿勢で「すみませんでした」と心から詫言じた。

弁解もできず不動のポーズとる 一粋

# 本社十一月句会

十一月五日(木)午後一時  
アウイーナ大阪

「9月惨暑」を嘆いたのもつかの間、急激に寒くなり、短い秋を予感するもの見事な秋空の日、96名の参加者、6名の欠席投句者による句会となりました。

お話は同人の井伊東吉氏による「私と川柳」と題して、氏の川柳修行の一端と川柳拡大努力の様子を披露されました。

定年退職の時期に川柳を始め、大阪・梅田での勉強会や居住する岸和田での句会などを経験しているうち、「誇る」の薫風先生選に誇らしい経歴邪魔なポラントニア

を天に抜いていただいたことが大いに励みになったこと、また孫娘さんが小5のとき、ふとした機会に創らせた数句の中に  
母さんが電話に出ると声変る

をみつけ、機会さえ与えれば、小学生でも川柳に芽生えるさっかけになることを知り、その後機会ある度に近辺の人に川柳について話をして、川柳への興味を持っていただくよう心がけてこられたことを熱く語られた。特に地元の温泉場で岸和田川柳会での秀句短冊を

展示したのを端緒に、虫食い川柳のクイズを出したりして川柳に対する興味を持っていただく企画も継続してことなどを披露された。

句会に先立ち、最近逝去された同人の中村れんげさん(大阪市)宮口笛生氏(奈良市)及び澤田和重氏(大阪府)の御冥福を祈り黙祷をささげた。  
(黒兎記)

月間賞は上山堅坊氏(池田市)に輝く。

(司会)昭・美龍(脇取)扶美代・真理子  
(受付)富子・真子(清記)勝弘

## 席題 「長い」 岩佐タン吉選

長いほどトンネル抜けて増す光  
癌告知脳が眠れぬ長い夜

長寿国底上げしたい社会保障  
零点の息子が長い目で見よう

長かったトンネルだった癌治療  
アースマラソンまだ寛平は走ってる

幾歳月テトラポットは波に耐え  
長いながいトンネル抜けた現在地

長生きの秘訣ときどき休むこと  
きつと長い付き合いになる友を知る

長生きしよう地球に核が消えるまで  
長生きも芸のうただと教えられ

国境長い戦後がまだたづく  
長所にも短所にもなる一本気

金婚へ耐えて来たのは夫かも  
長寿国不戦の記録あればこそ

黒兎 朋月 紀雄 光久 ぱっは 直樹 飯子 紀乃 久代 風子 求芽 和夫 飯子 和夫

美人湯で長湯をしても変わらへん  
七十萬時間で丁度傘寿です

長生きで誰かに悪いなと思う  
長いことかかり夫に馴れました

濃み出ぬあいだに役を降りるとす  
イントロの長さに渴く基地と核

建て前が長いレールを聴かされる  
ゆつくりはいい長いのはいけません

裏切りを許せるまでの長い道  
苦も楽も長い人生ようやくた

生と死の時間の長さ百の數  
ミミズ住むまで長かった土作り

マラソンの途中で自分見失う  
恥いっぱい食べて長生きしています

長編のドラマを生きた曼珠沙華  
来しかたの長さよちさいマルあげる

沈黙の長さが答えたつとは  
老老介護長寿バンザイとはゆかぬ

長い談判やと建ったぞ彬の碑  
リストラの行くあてもない長い影

長い列みると並んでみたくなる  
人

長いこと働いてないがいいのかな  
地

くどくどと愚痴へらへらと孫自慢  
天

長い長い坂振り向いたのは一度  
扶美代

直樹 一風 東吉 柳弘 唯教 蘭幸 富子 加お里 公誠 樹代 弘風 一風 森子 義子 美籠 求芽 克己 恭昌 富美子 時雄 完司 扶美代

揺れながら一点めざす長い道

## 兼題 「盛り場」 長井 善純選

盛り場にほつとかれてる空財布  
 盛り場に今日のノルマを捨てて行く  
 盛り場でお深くする孤独感  
 盛り場の帝王だった頃もある  
 盛り場の隅で着替えているピエロ  
 酩酊の眼飛び出たポツタクリ  
 盛り場に元センセイが屯する  
 盛り場の少年Aは闇を抱く  
 盛り場に落ちていました人の情  
 盛り場をゴーストタウンにした不況  
 盛り場でまたあの人に逢えるかも  
 悩みごと盛り場に捨て生きて今  
 決心が揺らぐ盛り場の灯  
 盛り場が待っているから行くと  
 盛り場に喜怒哀楽が渦を巻く  
 盛り場の隅にひっそり招き猫  
 盛り場の素通りなんかできまへん  
 盛り場へ男はアホになりに行く  
 盛り場で渦巻く人生の縮図  
 盛り場の事なら僕に聞いてくれ  
 盛り場でばったり会った国なまり  
 盛り場で昔の恋が目をさます  
 盛り場が彼岸にもあるとの便り

遠野 雅明 楓 完 桃 隆 一 楓 寿 弘 篤 公 美 蕉 光 直 太 真 昌 満 富 月 千  
 野 明 楽 司 彦 歩 之 風 子 誠 籠 子 久 樹 郎 理 作 紀 子 子  
 枝 子

盛り場で敗者復活してみせる  
 若かったなあ盛り場の仲間たち  
 盛り場を変幻自在仮の名で  
 木枯らしの追い込む先はネオン街

ネオン街ひたすら生きるつけ腫毛  
 隣国の言葉飛び交う戎橋  
 盛り場へ来てもライブル意識する  
 保育所に預け飛び立つ夜の蝶  
 盛り場にポロポロ落ちている孤独

佳

盛り場の日は素朴な顔である  
 盛り場へ陽気の油差しに行く  
 盛り場の罫に気付いた塀の仲  
 祭りかと北の新天地で聞いた叔父  
 女房とネオンに揺れるポーナス日

人

履歴書のウラに盛り場透けて見え  
 地  
 盛り場の悪魔相手を選ばない  
 天  
 盛り場で皿を洗っている大志

軸

盛り場のネオンに仮面剥がされる

## 兼題 「差」

吉川 寿美選

ソムリエはしかと見分ける微妙な差  
 子どもみな妻の味方で多数決

希久子 紀乃 森子 理恵 唯教 淳司 求芽 真理子 朝子 一歩 たもつ 克己 まつお キヨミ 見清 寿美 (宮)弥生 光久 敏治

有難うとおおきにある微妙な差  
 僅差でも結果は天と地の開き  
 温度差に山紅葉の晴れ姿  
 くやしさが倍増の負け一点差

実力は五分五分ツキが味方する  
 職人の箱に誤差などおまへんな  
 母と姑ほんの少しの大きな差  
 実力は互角出たのは気力の差  
 うちもよと差のない暮し仲がよい  
 鼻の差で負けたが金は溜めてます  
 ライバルにやさしくされるほどの差だ

(志)

現実と夢の差を書く私小説  
 積んできた石の数だけ人間差  
 苦勞の差見えぬところで花咲かす  
 セレブとボクやつてることに差などない  
 世代の差埋める言葉はありがとう  
 リベンジの勇気くれたタツ子の差  
 感性の差観る目で違う骨董品  
 ドングリの頭ひとつが目立つてる  
 僅差でも言い訳しても二位は二位  
 ジャンボ籤一字違いのこの落差

戒名に差がありお経長くなる  
 斎藤くん仲間称えて差をつける  
 少々の誤差も許さぬ芯柱  
 タツ子の差で掴んだものは風だった  
 年金でも差があるらしい両隣  
 職人の腕の差見せるカンナ屑

光久 敏治 キヨミ 黒兎 まつお 太郎 いさお 克己 耕治 月子 正雄 修 楓樹 直樹 滋彦 寿之 時雄 紀雄 完司 勝弘 光久 朱夏 一風

ライバルとの差も励みとしマイペース  
温度差があるから長く続く友  
世の進化職に大きな差を作る

美籠  
千恵子  
堅坊

人

個人差へその子の長所だけ伸ばす

賢子

他社に無い独創性が生む格差

東吉

戒名というあの世にもある差別

好

小さい小さいと芒が揺れる差の話

恵子

思惑の差へ海峡が横たわる

(久)千代

人

枯れ葉散る格差社会を悲しんで

完司

地

気風もよしおとこに男差をつける

奮水

天

格差など生きてるだけで丸儲け

ふりこ

軸

意識の差尖閣諸島波高し

### 兼題 「きつちり」

北野 哲男選

このズボン去年きつちりだったのに

昌紀

きつちりと日記をつけたことがない

義

きつちりが正しいなんて嘘だろう

紀乃

きつちりとしてっべ返しがる手抜き

隆彦

きつちりと描いた眉毛にある野心

昭

ポジティブに生ききつちりと朝ごはん

希久子

きつちりと割り切れぬのが人の情

能子

きつちりと生きた自信を刻む皺

賢子

先輩としてきつちりを見せておく

紀乃

きつちりと挨拶できる子の未来

朝子

手切れ金きつちり払い元の鞘

雅明

六時には弓取式も終わります

時雄

きつちりとうつる鏡と暮して

瑠美子

きつちりとしたリピングで寛げぬ

美籠

飲み過ぎをきつちり示す血糖値

完司

きつちりと聞いて聞かないことに

好

きつちりと三食たべて痩せては

好

狂わないのは爺ちゃんの腹時計

(志)千代

マドンナもきつちり歳をとっている

葉子

母の一言きつちり後で効いてくる

善純

植山へ行く日きつちりやつてくる

朋月

熨斗袋薄いが記名忘れない

遠野

きつちりと身につきましたとこいしよ

義子

秒針のようにきつちり儀仗兵

富姜子

きつちりとしてっべ返しをする自然

直樹

きつちりの男と飲まぬ祝い酒

和夫

式次第きつちり書いてあった遺書

月子

九条をきつちりあなた言えますか

恭昌

日中のきつちりしない境界線

ダン吉

受けた恩きつちり返す花の種

紀雄

無精者金のことには几帳面

桃花

追伸にきつちり無心書いてある

佳

朝子

きつちりと遺産分けには現れる

恭昌

整然と父雑然と母がいた

蘭幸

きつちりと割り勘分は酔って去ぬ

弥生

百歳できつちり呆けてやるつもり

則彦

引き出しを開ければA型だと分かる

まつお

きつちりと母から四季の荷が届く

克己

きつちりと絆の端に繋がる

森子

きつちりとさん妻は些か物足らず

天

きつちりと白黒つけて疎まれる

天

きつちりと身につきましたとこいしよ

天

秒針のようにきつちり儀仗兵

天

きつちりの男と飲まぬ祝い酒

天

式次第きつちり書いてあった遺書

天

九条をきつちりあなた言えますか

天

日中のきつちりしない境界線

天

受けた恩きつちり返す花の種

天

無精者金のことには几帳面

天

追伸にきつちり無心書いてある

天

きつちりと遺産分けには現れる

天

きつちりと身につきましたとこいしよ

天

秒針のようにきつちり儀仗兵

天

きつちりの男と飲まぬ祝い酒

天

式次第きつちり書いてあった遺書

天

九条をきつちりあなた言えますか

天

日中のきつちりしない境界線

天

受けた恩きつちり返す花の種

天

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

好

二人三脚真つ直ぐ歩き尉と姪

錦糸玉子かけて同感してしまふ

異句同音アハと急に打ち解ける

アドリブに頷く顔もあつたのに

同感と言われ種締め直す

同感のしるしのど銘くれました

同感という事にして扉の外

論敵の趣旨に同感してしまふ

家康に同感啼くまで待ちましよう

合槌を打つてわたしが罪被り

同感と云われ批判の地図たたむ

拍手してくもりガラスの多数決

同感と言つてその後から無口

賛成の拍手に決然と吠える

一匹が吠えて共鳴しあう群れ

最後の最後に同感ですとだけ言つた

そつだそつだよ人情紙風船

同感と言つてはいるが僕の旗

佳

同意書の誤字と脱字にある謀反

安っぽい同感をする多面体

同じ風感じて筆は揺れている

同感と言つには空気寒すぎる

僕だつて同感育兒休暇とる

人

波長合う人の言葉に乗つてみる

奮水

義

美代子

紀乃

則彦

樹千代

森子

時雄

いさお

月子

唯教

加お里

見清

蕉子

啓子

蘭幸

義

ダン吉

富美子

楓楽

希久子

森子

いくひろ

啓子

地

県人会の意見が割れることはない

天

握手しよう以下同文のご同輩

軸

寂しいねと言えばうなずく影法師

兼題 「省く」 小島 蘭幸選

省略をしたわけじゃないピカソの絵

省くこと知らない母のちらし寿司

家事みんな省いて妻は翔んでいる

コンビニのおにぎりだけで済ます昼

年賀状だけのつき合い省こうか

恋をして少し削れた皮下脂肪

酒代と煙草代から省かれる

省くもの省き優しい顔になつている

無駄口を省けばもつといい女

ピーマンを省いた酢豚の足りぬ

無駄を省くといつて私が居なくなる

省けない愛も誠も兵糧も

省略すると一行詩になつた

小煩いことは省いて生きてます

省かれて寂しいけれど自由です

消去法で残つただけの三代目

むずかしいところ省いてハーモニカ

おはようを省き氣まずい朝が出る

人間もボーとしてると省かれる

蘭幸

完司

敏治

シマ子

玄也

朋月

富子

淳司

篤子

俣子

わこ

昭

富美子

恵子

美代子

美智代

修

紀乃

朱夏

隆彦

落丁でなく省かれていた私

御馳走は無駄居酒屋は省けない

昼ごはん省いてケーキセットです

放つといつても夕焼けひとり舞台なり

寒い日は二千歩ほどで切り上げる

手間ひまを省いて生きた人らしい

省かれそつで大きな声を出しておく

私を省いてスムーズな流れ

省エネよ老人ふたり日向ほこ

とりあえず鏡餅は省いておこ

本当の辛抱日記には省く

忘れてただけ省いたのではありません

墓掃除省くと怖い妻である

佳

省くよりみんな味方にしてしまふ

泣いてしまえば省略が出来ました

愛のかたちを省略すれば風ばかり

省きたいモノがわたしの中にある

お世辞など言わずにシンプルに生きる

人

省かれた所がわたくしの叫び

地

悲しみは省いていない家族葬

天

随分と亡妻へ省いたありがとう

省くものももうないとところまでは来た

樹千代

堅坊

千枝子

義子

完司

ダン吉

能子

扶美代

ばつは

義

日の出

希久子

朋月

日の出

義

森子

扶美代

完司

恵子

時雄

上山 堅坊

軸

時雄

上山 堅坊

軸

上山 堅坊

# ろんせいのぼ

毎月24日締切・35句以内厳守  
編集部

川柳クラブわたの花大阪 西川 義明報

三人目の孫は誰にも騒がれず  
亡き父母の教え生きてる胸の中  
リハビリの歩幅に合せ手を添える  
夏休みヒートアップのママの声  
惚けましたお陰で夫婦円満に  
肩ゆすりさびしさ少し振り落す  
眠れぬ夜悩み事のみ浮上する  
だれですかこんなな月日進ませて  
猛暑日も終つてみればなつかしい  
暑いのに苦勞様ね蟻の列  
孫の手がもの言っているお小遣い  
老いて今川の流れのように生き  
急ぐことはないのに並ぶレジの列  
ロン終えのんびりコース妻と生き  
回り道しんどかったが強くなり  
今日もまた幸せ連れて来る笑顔

宏 至  
義 明  
い つ ぷ み  
宏  
正 春  
妙 子  
俊 子  
晴 美  
浩 三  
孝 子  
和 子  
ま す み  
は じ む  
た え 子  
美 代 子  
耀 一

ロン終え気付けば我家また二人  
恙がない日日の幸せ噛みしめる  
臆病にならず考えすぎず今ここに  
ひと声の挨拶かわす老家庭  
努力した末やっと来た運の神  
開運の兆し大空パッと虹

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

初老とは四十代と何とやら  
ヨイシヨには慣れていまずと酌いでくれ  
似顔絵を頼んで出来に腹を立て  
恋文を書いて上った国語力  
何時だつて財布に妻と子の写真  
おまけだと思えば楽し八十路坂  
結局のところ訃報は突然に

勝 視  
輝 夫  
蜂 朗  
高 明  
晴 翠  
四 郎

松露川柳会鳥取 小西 雄々報

ロボットは暑さ寒さがわからない  
ロボットの進歩にあぜん目を見張る  
台風へ人は無力で通過まつ  
刈り取りを急ぐ台風も御免  
ロボットへ介護をたのむ時代くる  
台風も株価不安も気がもめる  
台風の子報へ何時も寝不足だ  
ロボットも酒の欲しい日きつとある  
台風がそれてやれやれスニーカー

智 恵 子  
久 子  
鈴 枝  
公 美 枝  
弘 子  
和 代  
静 江  
正 光  
雄 々

城北川柳会大阪 伊達 郁夫報

巨大すぎスクープ記事がボシヤになる  
新調に値札こっそりついてくる  
ボランティア褒められ照れる十五年  
たまに来る思い通りに読みが無い  
表面は落ちるふりする花の露  
照れながら夫の膝でありがとう  
さりげなく値札を取つてくれる友  
密約は表に出ても悪びれず  
豊満な胸のあるのが表です  
表面の下に心の傷がある  
写メールにスクープとある初歩き  
表だと信じて上げるコイントス  
天高く人それぞれの秋となる  
死してなお年金払う長寿国  
本当ならこっそりと言う好きですと  
キムタクに似てるやなんて照れるがな  
スクープも拾つて帰る万歩計  
けじめには石ころひとつ蹴つておく  
とほけても嘘だと顔に書いてある  
子供向けクイズで脳のリフレッシュ  
芋づる式に生死不明の高齢者  
八方へ表を見せている保身  
照れてるな噂は嘘でなかったな  
逃げ出せぬ暑い地球にしがみつ

榮 子  
容 子  
ル イ 子  
利 行  
あ さ 子  
と し 子  
美 智 子  
正  
令 子  
郁 夫  
麗  
弘 風  
満 作  
東 吉  
勝 弘  
じ ゅ ん こ  
和 夫  
葉 子  
か ず お  
一 歩  
賢 子  
満 州 夫  
修  
た も つ

朝顔はこっそり夏を閉じてゆく  
スクープで売って今では大女優  
苦勞した人間の臭いくさい汁

志華子  
倫子  
朝子

ツリーショット微妙な距離は照れ隠し  
スクープへのつた私の舞衣装  
表紙だけ代えて世界の強いもの

懸笹  
千加  
直樹

照れくさいときは苦虫噛みつぶす  
毒食わば皿までスクープ第二章  
底の底歩いて知った人間味

集一  
柳弘  
克己

思い遣りというやさしい包装紙  
こっそりと積む善行に明日が見え

野鶴  
枚香

ちよつとちよつと呼ばれてますよその人  
暑くとも猫は上手に陰探す  
ユカタにも金魚が泳ぐ夏まつり

昭  
和美  
力子

岸和田川柳会(大阪)

仲谷 弘子報

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

夕涼み団扇の風が愚痴りだす  
鬼検事涼しい顔で嘘をつく  
涼し気な顔で献金もろてはる

香代  
東吉  
ダン吉

捨て石のつもりでいたら光りだし  
捨て石の声無き声か古戦場  
捨て石の覚悟に勝るものはない

和  
清  
義泰

百年の堤捨石あればこそ  
捨て石にされてたまるかまだ八十路  
捨て石は優雅な庭のかくし味

泰弘  
笑司  
蛙城

捨て石にいつか見てろと意地がある

蛙城

捨石の美学は寡黙喋らない  
耐えしのぶ事が偉いと思つてた

一步  
榎代

叱つたり耐えたり部下を活かし切る  
難聴が適宜に返事する電話  
決意など適宜に変わる政治劇

隆昭  
幸子  
房枝

嫁姑適宜な距離で波立てず  
ほどほどの水に馴染んで水中花  
どの家も人に語れぬドラマあり

弘子  
仁緑  
和子

過ぎ去つたドラマを残す写真帳  
日本史を大河ドラマでまた学ぶ  
人生は筋書のないドラマです

浅子  
和子  
淳風

病院食無理せずできたダイエツト  
御馳走も無理をしないで腹八分  
無理の無い程度でときどき夜走り

美知江  
勝憲  
克枝

ハイキング損得抜きで食べまくる  
食べただけ食べて瘦せたいなんて言う  
ほどほどの無理が出来ればそうします

善江  
公恵  
玲坊

見ただけで無理と解つても試着する  
飲み助が無理だと知つて一升酒  
無理な嘘ついて剥がれる嘘の皮

節子  
淳風  
珠子

八十二歳そんな無理をするでない  
無理をせず生きたあけくの無一文  
線香立て今日も元気で手を合わす

道子  
富恵  
三津子

宇宙より見れば国境線は無い

道子

佳句地十選

小川 注 湖

(11月号から)

リハビリの汗には明日の夢がある  
さいならの後のぶらんこゆらゆらと

隆昭  
美智子

幸せは白いお米と玉子焼き  
店仕舞張り紙増えて沈む町  
修身の課目をひとつふやさんか

桂子  
輝美  
千梢

賽銭に願う子の事孫の事  
書いて消す新し苗字至福時  
水くくり我が家に着いた音がする

義明  
恭子  
彦次

したたかに女を生きたハイヒール  
エコカー補助国の財政火の車

寿代  
浩司

白線で制限される駐車場  
三味線を携え弟子になつた日も  
線の無いケータイ便利よく使う

玲子  
和子  
泰輔

電線でオレの悪口言うカラス  
五線譜に夢も希望も愛もある  
生か死か確認される百の線

重忠  
泰山  
孝恵

六十歳線引きされて窓際へ  
一線を越えるところで目が覚めた  
一線を越えてわたしは母となり

義人  
久葉代  
美代子

白線の中に潜んで居る死角  
息潜め風の変わり目待っている  
息抜きは妻の居ぬ間の大ジョッキ

美代子  
いさお  
滋

朝目ざめ息をしてしている有難う

紀美恵

ブッチョズラ記者に囲まれエビス顔  
あの時の苦言を囲む茶の苦さ  
縁日のガマの油を取り囲み  
鍋囲み夫婦で語る深い話  
取り巻きがあつて天狗になっている  
嫁と母終えてあなたと囲む膳  
鉛筆で囲むと狭い日本地図  
話し合うように出来てる囲炉裏端  
ヒト様はオール電化の檻の中

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

貴恵 陸子 紀の治 勝誉 節子 くにこ 照彦 芳光 石花菜 剛 豊 和代 柳昌 碧

I-Tの森で神経切りきざむ  
へこたれぬ太い神経から学ぶ  
三本ほど神経抜けている私  
神経もメタボになった平和ボケ  
気のせいと軽くおっしやる聴診器  
神経痛神がチクチク刺しにくる  
かき氷トホホ神経ぶち切れる  
神経性胃炎患う二重顎  
神経の図太い人と和を結ぶ  
神経がビリビリ光る熱帯夜  
立ち止まることもできない出世魚  
新米とサンマの秋がいつち好き  
釣りマニア友の魚拓が語り出す  
七輪で焼いたさんまは生き返る  
釣り師らの自慢センチの競い合い  
十五夜はやつぱり月と話しする  
思いこみやはり私のミスティク  
謎掛けた話やつぱり裏があり  
てにをはの一つやつぱり喋りすぎ  
陽のあたる方へやつぱり花が咲く

川柳塔おっぱい吟社香川 川崎ひかり報

菜摘 紀子 武 幹子 町子 次根 章子 当代 絹子 房代 保州 美花 東吉 昇 義雄 和子 俣子 准一 朱夏 起世子

古文化がだんだん消えてゆく日本  
もう少し消えずに居たい余命かな  
消えそうな命に点滴ひと雫  
喜寿すぎて消すに消せないスネの傷

消しゴムで一気に消したいこの残暑  
是非もない御手やわらかに消費税  
国民に消化の悪い消費税  
今だつてギリギリなのに消費税

油絵のひまわり夏を熱くする  
娘の絵会いたくなつて絵と話す  
猛暑見舞扇子と団扇の絵も画いて  
真ん中に地球を画いた児童の絵  
ヒマワリを画けばゴッホが惚ばれる  
海辺には河原ナデシコ咲いていた  
引き潮に雑魚ゆうゆうと逆らわず  
海の香はわたしを里に遊ばせる  
海はるか大志羽搏く日本丸  
夕焼けの海にこころを泳がせる  
事ここに到る静かに海が待つ  
龍馬像のかたちで海を見て独り  
雨上がり海は清濁併せ呑む  
一瞬の心を磨く亡父母の墓  
士民家の鏡の如き床柱  
磨いても磨いてもまだ無限塾  
夫唱婦随自分の靴は磨きます  
私を磨くみつをのカレンダー  
ルビー婚愛を磨いてリフレイン  
人磨く言葉の一つありがとう

竹原川柳会広島 古田 太虚報

放任 弘 あきら ひかり 汎美 栄恵 六口 節夫 半徳 房子 敬子 慶子 淑子 静風 蘭幸 民恵 規代 弘子 節生 笑子 輝恵 幸子 一路

単行本一冊もつて昼寝する  
不器用で楷書の愛が書けぬまま  
握り飯はおぼる今が正念場  
こころ番勝負の前は深呼吸  
おしゃべりも文句も二丁前三歳

川柳塔きやらぼく鳥取大塚 恵子報

とんぼ釣る子の目に迷いなどはなし  
過日とて夢に出て来る救急車  
後期高齢水菓一つを食べのこす  
梨をむく指はまだまだ生きている  
上弦の月とわたしの午前一時  
大声で歌って頭すつからかん  
歌わずに死ぬか今年の蟬たちよ  
とんぼ水の上でプランコして見せる  
人間をからかうように飛ぶ蜻蛉  
この台風大山さんが吹きとばす  
猛暑日は青息吐息遣り場なし  
この夏は暑い暑い言葉なし  
せち辛いこの世背泳ぎして渡る

南大阪川柳会 吉川 寿美報

アイパッド予約しても入らない  
いい汗をかいて人気は気にしない  
よろめかず媚びず人気に遠くいる  
優しさが人気皆が褒めちぎる

厚子 栄香 比呂子 千枝 史子 春枝 寿々子 やえ 蕨 恵子 千代 晶子 未延子 亜弥 初枝 章江 瑞枝

視聴率落せぬ人気龍馬伝  
誰のため遊び盛りを塾通い  
汗だらけ炎暑に耐えるつなぎ服  
休肝日挑戦するが耐えられず  
味が無い料理に耐える血糖値  
忍耐のレットル貼って生きている  
腰落し耐えて踏ん張る徳儀  
美しい人の影まで美しい  
美しい心になろう花遍路  
内面の美が滲み出る字がきれい  
人工の災害起してはならぬ  
落石に注意しろよと言われても  
ウイルスのように地球に棲む人科  
チンパンカンコンピュータも伝染病  
咳一つそれウイルスと大騒ぎ  
腹の虫今日も元気だ酒欲しい  
ウイルスが怖い病院へは行かぬ  
ウイルスがまじめな僕を崩れさす  
ウイルスと言うやつかいな菌でんな  
のんびりと歩く棚田に彼岸花  
聖書読むころ美人になりたくて  
耐えてこそ人間幅と深み増す  
美しい肌もつ幼児に戻りたい  
重ね塗りして美しくしてくる  
嬉しい時は美しい顔して  
二次災害恐れ救援の手が遅れ

弘子 なきさ 憲太郎 勝弘 弘風 更紗 正春 郁夫 志華子 克己 和雄 清 集一 柳伸 弘泰 忠昭 楓楽 太郎 直子 寿美 東吉 柳右子 萬的 シマ子 庸佑

災害に遭って家族がみな揃い  
地震以後子等も夫も強くなる  
ウイルスもカメラ向ければいい笑顔  
ウイルスのような亭主を飼っている  
川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報  
手の鳴る方へついて行きます孤独です  
手の平の輝く未来信したい  
愛されているなと思う平手打ち  
川底に辿り着いたら泣くだろう  
人形が喋りはじめたミス터리  
横向いたままで人形電池切れ  
アンパンマンの夢はでっかい大宇宙  
人形を出られぬ鍵穴の向こう  
なりふりをきめて人形畏まる  
人形から脱皮あの本読んでから  
身代わりの人形生きる護身術  
じいちゃんにタバコ止めてと腹話術  
子は巣立ち雛人形も船出する  
幼児期へおんなを植えていくひいな  
マネキンが着たらあんなに映えなのに  
人形のような女の嘘に酔う  
流儀は問わぬ芒一本活けてある  
浄土までススキが原が続くのか  
ススキ一本添えてオブジェがで上がる  
名月とツーショットする芒の穂

ひさ乃 ばっは とし子 昌紀 紀久子 大輪 夕胡 寿子 俣子 紀子 あきこ 利治 克子 和香 よしこ 美子 泰女 富美子 准一 輝子 小雪 保州 美羽

初恋を告げずに去った花芒  
壮大な眺め芒のマスゲーム  
芒に寝てまだ恩返ししていない

真里子  
徑子  
英子

高知川柳社

小川てるみ報

四コマのマンガに勝る五七五

正射

マンガ家の卵に土佐の甲子園

暖

一服の清涼剤となるマンガ

典雄

少年の目にはアトムのみ未来地図

三郎

マンガにもならぬ夫婦の泣き笑い

千鳥

生老病死四コマにして終の家

三千世

道を読むマンガ文化の功と罰

哲史

八尾市民川柳会大阪

宮西 弥生報

深読みをし過ぎて本音聞き逃す

寿之

理屈から始まり情で渡る橋

留里恵

元栓を切つて女の今日終る

いさお

一錠の重さと神を信じよう

幸生

隣国と手を結ぶのは難しい

紀雄

夕焼けに溶けてにんげん臭い顔

朝子

深すぎる愛が重いと子が背く

賢子

初どりの青いみかんを仏壇へ

扶美代

つかの間の秋夕日が沈むまで歩く

耀一

天高く溢れる秋と響き合う

寿鶴

送り終え深き秋思の花すすき

あかり

時どきは己を敵にして生きる  
男の子ですがリボン結びたい  
賽の目は吉で携帯オフにする  
合掌の秋へ沈んでいく夕日  
ためらいを重ねて深い秋にする

一風  
秋子  
柳伸  
欣之  
弥生

京都塔の会

都倉 求芽報

ひまわりもゆっくり回るこの猛暑

ますお

きつちりと答え領土は守るべし

としこ

アバウトな僕にきつちり妻がいる

義昭

欠点もきつちり言われ身構える

文代

きつちりと閉じたドアが語る意志

葉子

キツチリと蓋をしたのに呼ぶ夫

美義

太陽がまもる三百六十五日の日夜

求芽

打算的な人にも学ぶとこはある

綾子

社会的地位が言葉を選ばせる

典子

やり手だが独善的で嫌われる

庸佑

オレ的には就活止めてアルバイト

弘之

初歩的ミス人間が測られる

啓子

情熱的にくどかれたいなもう一度

益子

横文字を混ぜた母さん舌を噛む

宏子

オノコ一人混ぜてお行儀良くなりぬ

福子

輪の中へひとりばつちの子を混ぜる

朝子

絶妙に水と油を混ぜる腕

欣之

さしすせそ最後に混ぜる愛少し  
何色とも混ざりたくない白である

かずお

ふる里へ行くたび記憶あせてゆく  
満月に苦い記憶を封じ込め  
思い出に脆い涙の頑固者  
記憶から悔し涙が甦る  
年ごとに昔の記憶鮮明に  
近くより遠い記憶が胸にある  
記録より深い痛みを持つ記憶  
悲しみの記憶も遠く美しく

昌乃  
万紗子  
比ろ志  
ふりこ  
英旺  
則彦  
輝美

ほたる川柳同好会大阪 水野 黒兎報

鍵チエック手間取りバスに間に合わず

輝

鍵穴にピタリと合つて新築に

信男

子育ては鍵のないドアある家で

純子

鍵つ子で大きくなつて鍵オヤジ

幹治

鍵つ子を探して迷う夢の中

正子

張り紙の迷子の犬がぬれている

美智代

いつも居るタクシー乗り場一台も

春代

迷子の児ママを探して泣き疲れ

柳童

探したものはこれかと思う日日

公子

ばくぜんと戦争のない世界待つ

桂子

雲掴むような話にある道理

契子

昨日の食事はくせんとしかなない記憶

黒兎

こんにちば挨拶した後あなた誰

長一

秋風に聞いてもらつたひとり言

洋子

妻の留守任されたつて背伸びだけ

見清

川柳塔なら

坊農 柳弘報

太陽系誕生の謎はやぶさで  
 解けた糸笑い事では済まされぬ  
 余生にも反抗期あり解く絆  
 天皇とクラスメートで今侍従  
 素浪人身分だけで腹がへり  
 長生きのセンスは大らかな笑顔  
 半世紀企業戦士に悔いはない  
 演出はどこからですか大花火  
 胸三寸女がほぐす赤い糸  
 帯解いて今日一日を締めくくる  
 万灯会行き交う人は皆美人  
 帯刀を捨てて維新の顔がある  
 教養をそとと包んでいいセンス  
 演出のない愛の初めは素っ裸  
 センスなど持っていないが金はある  
 時々センスを磨く恋もする  
 森の宴バーミンントの風を着て  
 センスいい男だが金ないらしい  
 気に入らぬ妻のセンスを着せられる  
 センスなく一緒に歩いてくれぬ妻  
 団塊の世代平成素浪人  
 天と地の怒りは神の演出か  
 天命という結び目は解けない  
 大好きな曲で送ったセレモニー

史郎 容子 はつ子 彰治 隆之 ふりこ 紀雄 典子 秋泉 千梢 博一 溝作 萌子 寿之 勝弘 弘風 のりこ 修 完次 恭昌 柳弘 順啓 道子 惠美子

方程式解いたらご飯こげていた  
 日本の夜明けに龍馬影残す  
 世直しの侍待っている日本  
 一刀両断できる侍募集中  
 とりあえず一筆箋で労を解く  
 美しい四季を演出する山河  
 わびさびの花一輪のにじり口  
 古武士にも似て茶室師の佇まい  
 君の手を借りて解いていく自縛  
 人間がにげんらしくなるセンス  
 一輪の花が演出するラスト

長 柳 会(大阪)

坂上 淳司報

叫んでも無縁社会は知らんぶり  
 夫叫ぶ一寸やさしゅうしてえなあ  
 叫んでも届かぬ人を恋しがる  
 胃の痛みバリユウム飲んで安堵した  
 寝坊して朝湯でさつと気合い入れ  
 絶叫が悲鳴に変わる九回裏  
 核家族絆もとぎれ荒れ狂う  
 献立に悪い無難の秋刀魚焼く  
 城跡でジョギングやはり日本人  
 難聴の夫に叫ぶ御飯風呂  
 握え膳に朝湯朝酒こんな贅  
 惑うのはよそう幕引きも近い  
 だんだんと気が減入り込む老いの虫

とし子 隆盛 富子 理恵 弥生 國治 成子 芳子 真理子 朝子 あり 淳司 もこ マサ エミ 明子 芳野 靖博 正一 篤 輝子 隆彦 けい子 ヒロ

嫁姑亭主うろうろ板挟み  
 占い師人を惑わせ金を取る  
 獄中の罪に届いた平和賞  
 特捜へ無実の叫び届かない  
 貧困と飢餓の国から叫び声  
 叫んでもむなしい笈拉致家族  
 地の底で生きる叫びが待っている  
 露天風呂昇る朝陽を一人占め  
 新聞が地球の叫び持ってくる  
 泣きわめく指のすき間で風を読む  
 泣き叫び寝た子の頬に涙あと  
 朝湯して出社息子に匂う恋  
 叫べない握り拳にあるマグマ  
 油断して臓器の叫び聴きもらす

ロース川柳会(兵庫)

木村貴代子報

お月見は生れ故郷がいの一番  
 鈴虫寺はとけのご加護いだいて  
 宴会は炭坑節で盛り上り  
 虫の音を心をのせて魂送り  
 三分間待つて下さない思い出す  
 蟪蛄の命ゆらゆら枯れ色に  
 人恋えば月にくつきり人の影  
 人も虫も旨いものには寄ってくる

光弘 武男 久美子 孝代 和代 正子 幸子 和子 一慧 弘光 正博 正美 富美子 三和子 貴代子 義子 藍 哲子 哲子 年代 みつ子 いわゑ 柳弘

川柳大阪

長井 善純報

貸し借りがちよつぱりあつて腐れ縁 柳弘

ありがとうみんなの御縁頂いて  
縁あって僕を貰ってくれた妻  
アラフォーで全く縁がない娘

初めての店で隣にいた貴方  
血縁のいとこやっばり丸い鼻

お互いに好意いだいて縁ができ  
縁縁の中から親父叱咤する

縁あっていつも愛され忙しい  
縁日の匂い懐かし夏祭

飽きるほどチラシ眺めて諦める  
旅先の土産見飽きぬ晴れた富士

根気なく飽きが早目に老い語る  
お互いに飽きもしないで共白髪

旨いなも三日続けばもうええわ  
飽きるほど抱かれてみたいあの人に

飽きること知らぬ子どもは無我夢中  
飽きもせず忠臣蔵を観ては泣き

秋風にスタチ秋刀魚の揃い踏み  
番長で主役を張ったガキの頃

同窓会主役にあげた稼ぎ先  
宴会の主役をとった下戸の芸

今日だけは主役の席に敬老日  
認知症やつと主役にさせてくれ

百歳の笑顔が主役九・一五  
懸命に生きてるうちは主人公

産声で母に挨拶する主役

和

すがお

紀雄

芳香

笑風

勝弘

川童

信醉

かよこ

とし坊

義明

喜楽

功

ゆめこ

珠生

川柳茶ばしら(愛知)

板山まみ子報

目覚めれば階下で音がしてる幸

知らんぷりしておく刺のあるジョーク

マスターはしないまままで機種を替え

変化球若旦那には見抜けない

にわか雨橋下は笑みと立ちばなし

恥ずかしいことも平気でバス旅行

まっ白な人に黒だと言う力

川柳花の輪(大阪)

妻谷 重風報

投手戦やたら球場広く見え

鳩山は広い別荘見せたがり

野心家のひらめく広い新築図

おばさんの口で広がる内緒ごと

子が果立ち広く感じる三間の家

広すぎて自分の位置が掴めない

北の大地夕日呑み込む地平線

許すこと知って広がる生きる道

生きてるか長寿者訪ね広い顔

川柳塔みちのく(青森) 小寺 花峯報

ぎつしりと献立話まる黒い穴

手と足が他人のような通勤車

古古米がぎつしり詰まる貸倉庫

豆台風去つてさびしく障子穴

つついて下さい重箱の隅空けてます  
散骨の海へ無念の陽が沈む

西海岸線のぐながして陽が落ちる

台風も私と同じ気まぐれで

日没は仲間ひとりを連れてゆく

しずしずと人を眠らせ陽は沈む

一番星見つけて祈る明日の無事

一日の汗をぬぎらう大落陣

小さな絵に大きな視野をとし込める

二死満塁もはや日没攻めてくる

穏やかな目だが嵐を抱いている

才媛も青筋立てる詰め放題

哲学がぎつしり詰まる素焼き壺

川柳らくだの会鳥取

岸本 宏章報

ちぎれ雲束縛のない旅が好き

ふるさとと母のゆりかご癒される

心とは逆ことさらに辛くいう

レイゾウ庫雲隠れする缶ビール

都合よく解釈をして悦に入る

入道雲おつとらとして母に似る

好きだからわざといけずをしてみせる

少年化のプランコ風が来て揺する

綿雲の宇宙遊泳見て飽きぬ

川柳ふうもん吟社(鳥取) 夏目 一粋報

義理と思たばうと孤独深くなり

柳子

芳生

一呑

ふさふ

雅城

愁女

花匠

黙人

岳水

花峯

慕情

一花

あぶ

洋々

可能性いっぱい秘めている二流  
 まんまるくなつてつまらぬ人になり  
 いつまでもたばつとき肌艶の艶  
 一流も二流もあくびする不況  
 彼女できフーテン暮らしやめにする  
 熱中するとまわりを見失なう  
 姑にたばつた思い投げつける  
 熱中のない人生は詰まらない  
 議論熱中息子の嫁をとる話  
 人妻に熱中したらウエルカム  
 家計簿が二流生活させたがる  
 政治家よ民へ熱中しておくれ  
 会食の後は葉の品評会  
 それぞれの華を咲かせて人は逝く  
 フーテンで世帯を持った事はない  
 鏡の前熱中します厚化粧  
 生活は二流遊びは一流だ  
 レストラン二流ところが性に合う  
 私には二流あたりが落着ける  
 僕と妻熱中時代まだ続く  
 強がりのフーテン今日も金がない  
 就職難好きでフーテンしてません  
 少しずつ個性ゆるめて同居する  
 責任の重さが語る肩の凝り  
 どうにでも成れと思えば気にならぬ  
 ばあちゃんのだばつとくこそ宝物

無限 無一 雅女 美恵子 圭一郎 節子 凱柳 菖子 金祥 蟹郎 孝二 昌鼓 たかし 孝男 妻子 振作 千恵子 春名 一京 徹 房江 稔 菊香 清帆 清信 益子

二流だが役に立ちますボランテニア 悦子  
 七光り二流の芸で行き詰まる 毅  
 新ベンチャー二流の層を狙い打ち 由美子  
 フィーリング合つた彼氏はフーテンめ 智子  
 フーテンの暮らしもしたい時がある 茂登子  
 熱中症疑つてみる無口な日 善夫  
 フーテンと言えば寅さんだけ浮かぶ 行男  
 平行線きつと接着してみせる 一粋

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

大それた欲はなかつた柿の種 明子  
 柩には菊一本と言う願ひ 一步  
 不況の世ノール賞の花咲いた 生枝  
 鬱の日はせめて口笛吹いてみる いさお  
 お二人がカップリングでノール賞 和雄  
 新鮮な素材はシンプルに限る 克己  
 柿右衛門いいもの一つ持っている 勝弘  
 イチローの苦勞を見せぬ大記録 君代  
 口笛を聞かせて兄は征つたまま シマ子  
 食べる物みんな美味い秋になる 祥昭  
 バス旅行美味しい秋を刈りに行く たかこ  
 口笛はお若い白髪のおじいちゃま 武  
 子規のように柿食べている法隆寺 太郎  
 地底からゴクリとのんだ水の音 正  
 願ひ事十七文字に収まらず 忠昭  
 口笛も出る婚活のいい返事 たつお

完敗にそつと口笛吹いてみる  
 秋一人古利に願う秘めた恋  
 どの庭も柿と子どもがいた昭和  
 洪柿のままで一生終えるのか  
 被告人が重くてならぬ民主党  
 洪柿も灰汁を抜いたら主役です  
 口笛はきつと平和の星からだ  
 口笛を吹いて孤独の底に居る  
 忘れない柿の木坂に落つ夕陽  
 勝組が口笛吹いている余裕  
 口笛が鳴らずに息が漏れるのみ  
 母の味何を食べても美味しいな  
 三歳児踊りに和む秋日和  
 ゼロ金利明日へ繋ぐ夢壊れ  
 戦争を蔑むクワイ河マーチ  
 資源のない国だ頭脳で勝負する  
 母ちゃんのおむすぶぐんと美味しいな

川柳ささやま(兵庫) 遠山 可住報

珍しく今日腰痛を忘れてる  
 珍しく息子がひとりやうて来た  
 欲しいのは日本元氣にする名案  
 鬱一つ秘めて明日みる老いのめど  
 うなづいて相手を立てる処世術  
 珍しく真つすく帰る空財布  
 珍しく晩酌抜くと寝つかれず

ダン吉 哲矢 敏子 紀乃 純甲 紀雄 廣子 扶美代 房男 美智子 美世子 美花 野鶴 欣之 宣子 柳昌 久子 二英 純子 文子 美紗子 哲男 稠民

草引きをしながら案を練ってます  
 名案にアイコンタクトで支持送る  
 名案はこれから静かに生きること  
 今日卓珍味も少し記念の日  
 名案を並べて過疎の道の駅  
 戦時中校庭全部さつまいも  
 めど立たず予定変更四苦八苦  
 芋粥に助けられての病治療  
 不案消すめどは迷わず自信持つ  
 美智子 照代 幸子

わかあゆ川柳会鳥根 松本はるみ報

気休みに翔んでみましたおしゃれして  
 今年こそ会おう会おうと年賀状  
 赤ちゃんがころころ肥るいい育ち  
 双方の言い分耳が使いわけ  
 そしてまた回り回って来た噂  
 待つ人は雲の彼方か酒を酌む  
 ふる里が恋しくなつて歳を知る  
 古日記捨ててる勇気が出てこない  
 希望もち発つた日記の途中下車  
 清泉 博利 好栄  
 はびきの市民川柳会大阪 徳山みつこ報  
 薄いのは父悪いのは母ゆずり  
 今日もまた頭に来てる時事ニュース  
 反対の先頭に立つ勇氣なく  
 先人に頭を垂れて学びます  
 真一 章司

失敗は先祖の祟りということに  
 新しく母も先祖に迎えられ  
 大勢で先祖拝んだ時が華  
 ご先祖のおかげさまですこのゆとり  
 今日無事先祖に感謝して終り  
 除草剤撒きて虫の音遠ざかり  
 弾みでも一度聞きたいアイラブユー  
 白い画布弾む心で塗りたくる  
 いい夢を見た日はハミングで弾む  
 この猛暑耐えた我が身にエールする  
 負けないで無実の君に便りする  
 宅配へ母のエールがため込まれ  
 最後尾の子供へ惜しまないエール  
 若者よ再建せよとエールする  
 フレーフレー蜘蛛が巣作り励んでる  
 ばあちゃんはずつとあんたを見ているよ  
 ライバルへおくるエールの裏表  
 泰子 敏 庸佑  
 登志子 千鶴子 久仁子  
 一壺 庸佑 敏 庸佑

岬川柳会大阪 八十田洞庵報

会釈して振り向いたけど誰だっけ  
 手料理に振り向く夫が目を細め  
 前歩き振り向くときの妻の顔  
 肩に手を振り向いた人人ちがい  
 流行に振り向く事もない余生  
 別れ道に振り向かないと言つたはず  
 振り向いた君の瞳に癒やされる  
 清一 富美子 茂平 とみ 富美 寛  
 和香

振り向けば六十路の坂の一步前  
 困りごと身内の子供に電話する  
 振り向けば彼もふりむく別れの日  
 振り向けば山あり谷あり共白髪  
 振り向けば親の頑固がうらやまし  
 振り向けばライバル不気味笑つてる  
 振り向けば年に四つもの総理の名  
 草刈つて山とつもつた牛の餌  
 仏様無理な願いもいい笑顔  
 尻軽の世話役がいて村平和  
 外湯へと揃いの浴衣下駄の音  
 茹だるとはこんなことかと昼の畑  
 支えきたはずの己が支えられ  
 ジャンボくじ抽選までは夢の中  
 グラス今妖しい色をかもしだす  
 和子 圭子 年子 貞夫 洋子 東吉 蛙城 悦子 令子 利武 禮三 覚庵 桜琴 峻史 洞庵

川柳あまがさき(兵庫) 田原一兆報

無理をしてクタクタになる肩パッド  
 如是我聞自分本位に聞いている  
 聞きわけのいい子といわれた今は昔  
 夢が消えビールの泡も消えてゆく  
 ベテランの主婦がときどき無理をする  
 水のようにつかみ所のない夫  
 あなただけ内緒話のせられる  
 一本の茸も取れずに山降りる  
 遠吠えの犬もさぞかし淋しがり  
 和子 一兆 洋子 柳明 雪菜 五月 茂幸 野薫 鹿太

秋ですと知らせてくれるシジミ蝶  
無理しないことをモットーに身を庇い  
誘われて良い気になれば棘がある  
マンションの灯りが語る暮らし向き  
虫よけが効きすぎましてひとりです  
無理なことわかっていても美人の湯  
秋夜長メタボは脇に置いて呑む  
その話きのうも今日も聞きました  
男ならすねた顔などあるて来い  
吊った絵馬それは無理よと神の声  
よく喋る口には諭吉で黙らせる  
大笑いしてます無理をしています  
名月に泣くコスモスの声を聞く  
秋の蚊に吸わしています痩せた足  
流行を脱げなくなった試着室  
うまいなあ妻に隠れて吸うタバコ  
新米を買ってきたのに今朝もパン  
内緒話トミノのように崩れ行き  
聞き流す耳を持つてる亡母だった  
福耳に沢山届く笑い声  
胎動をみながら聞いた第一子  
無理やめてやさしい風と戯れる  
年回りうら目裏目に出る運氣

靖鬼 美也子 江美 紀乃 美義 純 耕治 ひとみ 勝巳 かずお 菜々子 晴美 朋月 キヨミ 祐康 正和 里江 まさこ 哲男 由美子 ヨシエ 美籠

藤井 則彦

まだ五分あると焦りを押さえ込む  
医者よりもよく効くママのチチンブイ

庸佑 萬的

バランスのとれた食事もくたびれる  
片方が微妙に違う両の足  
無医村へ赴く若い使命感  
最後の欲それはきれいに老いること  
ぎりぎりでも受かればできるお医者さん  
塀の上モデル歩き猫しやなり  
どうしようトイレの長い長い列  
すんなりと治った訳を医者が聞く  
夫婦独楽バランス保つ妻の芯  
暴走もたまにはいいか人生は  
酔うほどに大言壮語秋の雲  
時間あるタクシーやめて金余す  
不規則なお辞儀を交わす鳩の群  
変わらぬ顔変わらぬ声にはっとする  
お元気で臓器をどうぞ継ぐ命  
天高しもりもり食べる医者知らず  
治療中医者の健康祈ってる  
バランスを取って時どき転じている  
大胆なポーズが元で医者通い  
治つて来た医者と相性いいらしい  
栄養バランス今更じうでもいいのです  
断りに歳だと言える歳に成り  
往診日薄化粧するおばあちゃん  
少年に返してくれるとんぼの目

さらり 佐和子 幸雀 (御)玲子 美津子 歌留多 千恵子 佳恵 幹治 隆 夢 堅坊 則彦 葉子 見清 千枝子 巴子 美智代 美義 寿美子 満芽 千代

川柳塔まつえ吟社(鳥根)三島 浜丘報

そんなもの平気と男そり返る

叮紅

平気だと思えば平気風になる  
平気だと聞く耳持たぬ反抗期  
スッピンも平気になった婿の前  
あれこれと薬を飲んでる平気  
この猫は落ちても平気隙がない  
想い出の里を残している唱歌  
里の秋たつぷり詰めた荷が届く  
ふる里の山の匂いに生きかえる  
想い出をつなぎ合わせる里の駅  
里の庭花の笑顔に迎えられ  
古里は昔のままで懐かしい  
平常心を唐揚げし魔女になる  
魔女アニメ夢中で見てた子も母に  
里装束魔女がイベント仕切ってる  
朝茶供え魔女がお経をあげている  
浮気の芽魔女が摘みとり食べている  
ときめいて魔女に似てくる秋の蝶  
デジタルの時計思い出紡げない  
憧れは嘘も時計もない時代  
色形時計もファッション秋らしく  
歴史刻む老舗に掛かる古時計  
コチコチと亡母の時計が尻叩く  
古時計祖父から私まだ動き  
熟年の音で刻んでいる葱だ  
家中の時計に命刻まれる

ちえこ 和歌子 壽代 ちかし 美智子 治代 桂子 邦代 英子 幸子 芳恵 禮子 薫 たけし きみえ 知恵子 柳歩 政子 幸代 茂美 長吉 昌枝 蘭水

日時計の日陰が刻む恋一人  
嘘ひとつ刻んで時雨通り過ぎ  
路郎の句刻めば唯の石ならず

鹿野みか月(鳥取)

土橋

螢報

雑壇のうしろに棲んでいる化身

世界地図抜けて地球一巡り

卒寿でも化粧で化身若がる

ロマンスは想い出して胸に置く

飽食の旅は何時かは行き詰る

生意気な孫にやられるエゴ話

満月へかぐや姫から便り来る

お釈迦さんの御ん身拭って弟子になり

傘立てに逢った余韻を帯する

栗一つ拾えば二つ欲しくなる

一日がひらひら東から西へ

禿びた靴ばつんロマンの成れの果て

海底の千畳敷にロマンあり

ちらほらと胸の谷間にあるロマン

喧嘩した泣きボクロにもあるロマン

菩提樹の数珠に縋っているロマン

ひらひらと舞い善人の貌をする

終戦のピラがひらひら散ったのか

手のひらの海でひらひら善と悪

枯葉ひらひら無為に老いたと悔ませる

ひらひらのスカート今日はコーラス日

注 湖

螢

浜 丘

忠 良

(西) 和 子

幸 枝

くに子

いさお

睦 子

小 鹿

蟹 郎

彩 子

弘 子

完 司

盛 桜

実 満

節 子

富久江

諷 人

茶 子

みどり

満

惣 子

京

不況風なんぞ岩の金庫番

青春の岩ちよつびりピンク色

頼つてる心の岩しがみつく

岩なら花見の頃に来て見なれ

この岩古くなっても心地よい

酒樽で岩築いて気分よい

不景気で子等の岩になる私

傷ついた翼休めている岩

夢ばかり肥らせているわが岩

私の企画の旅はいつも晴れ

父さんは酒があつたらいつも晴れ

光るものしつかり抱いて晴れあがる

川柳さんだ(兵庫)

北野 哲男報

乗り継ぎの間合いをつめる縄のれん

父母の短所受け継ぎ生まれてる

駅伝のタスキ落してあわててる

どうなるの後継ぎのない無縁墓地

空いた席親父の後を継ぐ度胸

引き継いだ暖簾の重さ思い知る

炬端から語り継がれて来た民話

入退院そして十年生きている

亡夫の歳プラス十年まだ生きる

十年後夫婦の仲は倦怠期

巻き戻す十年前の青写真

芳醇な十年ものの恋でした

かおる

永 子

(岩) 和 子

きみえ

久 枝

はるお

重 忠

みさ子

八 重

孔美子

稔

螢

一 兆

歳 子

野 薫

茂 幸

一 子

光 久

哲 男

あかり

幸 香

裕 美

淑 子

菜々子

十年をひと口で言う感謝状

十年は短いものとわかりだす

十年は今や五年の感じです

十年の重さ速さを子で想い

ばらばらの小銭財布を山盛りに

旅プラン盛り沢山のパンフ来る

脳トレのパソコンゲームフル稼働

昭和史の客のご飯は天こ盛り

愚痴つれた盛り沢山の話聞く

不満山盛り誰も崩しに来てくれぬ

どの皿もてんこ盛りですり掃り

山盛りのストレスを消す空の青

汗しとど生きている証しそつと拭く

半額になった刺身の目が眠い

笑顔だけ残してそつと消えたいな

跳び跳ねる力を少し残しとく

体重計一枚舌分重くなり

元氣いい根っこが勝負決めてる

心配をしたりさせたりして親子

秋灯下高き鼻もつ読書人

口一つ喜ばせるも怒るのも

小椋桂秋の夜長に酔いしれる

遺伝子が証明してる脳天気

DNA今頃になり顔を出す

DNAの中で生きてる一本氣

生きていて良かった人の輪が温い

耕 治

祐 康

二 英

遠 野

雪 菜

雅 司

一 泉

好 文

茂 山

忠

正 和

みつ子

美和子

靖 鬼

ひとみ

宣 子

晃

紀 乃

能 子

里 江

婦美子

順 子

朋 月

り 子

千代子

キヨミ

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

悪知恵が次々浮かぶ餓鬼大将  
 次の日に残しておけぬ旨い酒  
 この次があるから一番大好きだ  
 次から次秋の行事は蜻蛉の目  
 飽食の次はかならず食えぬ世に  
 次々と病気が顔を出してくる  
 次の世へ生まれたならば新惑星  
 見納めと思つて見れば凄いい海  
 言いつぎた託びの言葉が見つからぬ  
 シャッターを押ししたいような秋の雲  
 妖怪が人を見ている町おこし  
 人間を見る眼が肥えてうるさいな  
 川柳に漬かつて見える人の機微  
 見上げれば兎が亀に変わる雲  
 筋書きがはつきり見たい国の先  
 よそ行きの言葉並べる見合い席  
 金平糖なめて心を丸くする  
 焼け焦げた心を冷ます虫の声  
 傷ついた心のうちを歌にする  
 ヒトだから心の病かかります  
 おめでどう心裏嫉妬心  
 度胸はないでも心臓は丈夫です  
 愛していると心にもないことを言う  
 一人旅そつとストレス捨てて来る

日出子 泰輔 萩江 風露 玲坊 賀寿恵 恭子 完司 由紀子 和子 喜美子 康子 和枝 美代子 酔美蓉 石花菜 瑞子 鬼一 悠子 けいこ 節子

たんぼぼさんふわりふわりとどこへ旅  
 旅なか行方不明かあの日から  
 バス旅行合席の方でか過ぎる  
 いい思い持つて行きたい永久の旅  
 失礼もお世辞も咀嚼する心

米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報

バーゲンの卵が踊るおでん鍋  
 この暑さ葉がみんな落ちかなしそう  
 画数の多い名前がほしかった  
 隠してたブランド嫌い実はウソ  
 この暑さクーラーさまに救われる  
 義妹が煙草みやげに黄泉の国  
 追われてた時間が今はなつかしい  
 熱中症とんぼも休み休み飛ぶ  
 点線を描いて置きたい余命表  
 くつきりと雲の行方が天高し  
 台風が猛暑の幕をやつと引く

西宮北口川柳会(兵庫) 小林 わこ報

カーテンのようにひらひらする女  
 欲びがはじけるカーテンの閉じ目  
 カーテンが囲む孤独のオベの夜  
 退院日カーテン広く広く開け  
 カーテンの向うの嗚咽父たろう  
 大物の片鱗でかい呱呱の声

貞子 次男 重忠 智恵子 照彦 すみえ 欣子 公一 宏之 登実枝 多美子 札子 未延子 紀の治 ふみ 正二

貧相な顔だが警固ついている  
 雲行きが変わる社長の咳ばらい  
 なまはげに泣かないこの子大物だ  
 大物はいつも黙つて笑っている  
 大物なら部下の失敗引つ被る  
 大吉のおみくじ入れている財布  
 運鈍根IT時代もこれやろか  
 運命がダダダダと攻めてくる  
 運が良く無病息災妻も吉  
 茶柱が今日の始まり運の花  
 悪運の強い奴じやと祝われる  
 才色兼備男運だけ見放され  
 帳尻を合わせるように運不運  
 運は天にまかせせつせと農良仕事  
 運のいい男反省忘れない  
 人類もカップリングで愛の輪を  
 恋ころ今も昔もそのまんま  
 わたくしのハートを分ける赤い羽根  
 あの人のハートはきつと大きから  
 初対面なのにハートが熱くなる  
 カートンコル欲しいまだまだ女です  
 川柳のハートがまだまだ掴めない  
 ハートマークに一人で赤いペン塗る  
 ただ一つ滾るハートがあればいい  
 マニフェスト大風呂敷がハンカチに  
 夕焼けに溶け込んでゆく赤トンボ

美津子 文子 歳子 勝弘 りこ 朋月 いたる 二英 浩司 武臣 哲男 遠野 耕治 嘉代子 千代 基輔 玲子 紀乃 弘子 わこ 哲子 光久 比る志 直 盛夫 宏造

ウウンとよつしやよつしやが天の声 茂  
手探りで繋ぎ合わせる今日の幸 野鶴

いずも川柳会島根 佐藤 治代報

隣の子モデルのような美人なり  
放たれてちやっかり戻る食事時  
少だけ欲の火種を抱いている  
日本がのんびり出来るのはいつか  
花嫁のモデル自慢のひとりっ娘  
振り向かぬ残る余生をのんびりと  
賢母にも魔女にもなつて守り抜く  
手が出ないモデルハウスで夢をみる  
のんびりと時間を流す夫のるす  
放つても幸福駅に届かない  
言い放つ持論に風が吹き荒れる  
悲しみの窓は大きく開け放つ  
サークルで異彩を放つ友に会う  
約束は何時も守つて居るつもり  
約束を果たしのんびり横になる  
値上がりものんびりかわす自家野菜  
矢を放つ最後の一本が折れた  
自画像を描くちよびり薄化粧  
年金が足りずのんびり暮らせない  
もやもやを吐き出したくて開け放つ  
モデルには私の脚は太すぎる  
のんびりと大きな傘の中にいる  
子育ては母をモデルに抱きしめる

嘉寿恵 煩悩児 佳子 桂子 武久 志げる 治代 美千代 たえこ 敬子 久枝 徳子 幸子 キミエ 英子 シゲ子 孝亮 弘子 房緒 あきら 喜子 博子 玲子

私のためなら泣くと言うモデル  
鳩尾の嘘を放すと水が澄む  
鍋幾つ焦がしただらう火の用心  
守らねばわたしの明日が見えてこぬ  
三の矢を放つと心晴れてくる  
ドジばかりののんびりなカ阿呆なか  
わたくしの死角で火打ち石が鳴る  
モデルさん笑えば僕も笑つてる  
その昔モデル夢みた老い蛙  
大勢の声に向かつて火は燃える  
籠を出た鳥は真つすぐふるさとへ  
専守防衛守られますか我が日本

美江子 歌子 昌枝 多喜 蘭水 ちえ 寿美 茂美 きみえ 章峰 文子 ちかし  
川柳ねやがわ大阪 籠島 恵子報  
生きている証拠探しに旅遍路  
四百号の重みを刻む寝屋川誌  
天高く馬肥ゆる秋妻メタボ  
親の目に子は乳飲み子のままで居る  
てのひらに秘めた未来に懸けてみる  
失恋で泣いたあの日は忘れない  
食欲の秋に胃袋重くなり  
年寄りの臓器お役に立ちますか  
天高く舌鼓打つ腹の虫  
どんな手相石川遼の手が見たい  
しなやかな母の言葉にある重味  
酔つて泣く癖を知らずに酒を注ぎ  
泣き虫の勳章ひとつ持っている

秀雄 栄二 薫 弘一 尚世 あさ子 仁清 賢子 さち子 一風 三郎 博泉

手相より気になる今朝の爪の色  
温暖化の地球の手相見たい欲しい  
神様のいたずらボクに天下筋  
重い地球みんなの愛で支えてる  
長命の手相の友が先に逝き  
名月がこころを丸くしてくれる  
鬱憤をマイクで晴らす三次会  
重い荷を一生背負う彼岸花  
マイク持つマッチョな男小指立て  
渡り鳥汚染の海で飛び立てず  
角取れてからの余生に風は風ぐ  
朗読のマイクに余韻にじませる  
ふつされた涙の顔にコンパクト  
歌上手マイクの機嫌うまくとり  
美人はいい泣き顔までも美しい  
朝顔も猛暑に勝つて秋に咲く  
ちぎれそうな鉛と無事に帰つてく

とし子 祥昭 修 一炊 芳子 洋 忠央 鈍甲 じゅんこ かすみ 朝子 茜 麗 美智子 ルイ子 義宏 恵子 満作 滋彦 浩二 桃花 恭昌 日の出 水昇 楓楽

翠洋会大阪 佐々木満作報

一期一会ツアーの縁で結ばれる  
故郷近く方言に弾む旅の連れ  
旅先で拾った恋が捨てられぬ  
鉛筆でなぞる芭蕉の旅日記  
寅さんが最後の旅に出たつつきり  
円高の内に行こうとバスポート  
新しい野菜うれしい道の駅  
無人店の野菜は人を疑わぬ

異常気象旬の野菜を遠くする

品格の自負を持つている京野菜

人工の光で旬のない野菜

カラカラと笑いたくなる年金日

たかが年金されど年金命綱

年金証書見栄を張るなど論される

年金を当てにされて死ぬません

平成の金次郎みなマンガ本

風邪ひきを必死で直す孫が来る

長ばなし受話器も欠伸したかろう

この頃は野菜の旬も忘れがち

ベッドから野菜の値段聞いている

かみさんが普賢菩薩に見えてきた

平成の桂小五郎待っている

母のベッド少し動かす秋日和

賞味期限少し延びそう衣更え

論されて心も晴れた青い空

妥協したあたりで雲が切れ晴れる

松茸のことは忘れておりました

マンネリの献立もよし妻の味

岩美川柳会鳥取

石谷美恵子報

洞穴を世界が認めジオパーク  
冬支度蟻は穴へと勤勉だ  
石つばに滴執念へこむ穴  
宝くじ当れば次は落し穴  
困ったなどんどん下がる買ったドル

蟹 郎  
茶 子  
幸 枝  
幸 安  
重 忠

すみ子

志華子

捷也

蕉子

紀子

弘子

舞夢

みつ子

げんえい

昭

知之

千梢

公平

善之

理恵

千歩

照子

正義

正雄

集一

困るのよあんだの酒と煙草代

軽々とたばこ銭とはもう言えぬ

銭のあるときには顔も丸くなり

銭より愛と言った昔がなつかしい

銭金で争いも起き和解決する

年金を補う貯金底をつく

泡銭でいいから当れ宝くじ

小銭ではなびいてくれぬ今の孫

血圧も脈搏も胃も調子よい

セールの歯の浮く世辞に負けられぬ

調子良い男黙らず術がない

束の間の逢瀬調子が狂いだす

調子よい時には悪夢気がつかぬ

内視鏡順調ですと胎児撮る

調子よい日はかりではない老夫婦

調子よい話は一歩引いて聞く

銭持つと人は足音まで変わる

川柳むやがわ大阪・前月分 籠島

猛暑にも耐えて稲穂のいい笑顔

煽てれば図に乗る友が居る平和

バーゲンへ淑女の仮面脱ぎ捨てて

靴下が丸まっている脱衣かご

敬老の日憶えてくれた電話口

百歳が珍しくない敬老日

敬老日愛の売り場は何処ですか

老舗たが流れに乗っているのれん

稔

主一郎

一京

一瑠

節子

たぬ

清帆

雅女

螢

忠良

孝男

一粹

菖子

公子

和枝

幸子

美恵子

恵子報

とし子

柳弘

仁清

茜

薫

あさ子

じゅんこ

弘風

古希祝金紙メダル胸スシリ

靴下を履かしてくれる妻がいる

手を取って泣ける母子になりました

破れたは生地より足の太さです

五本指靴下個々にある自由

飲み友を捜しのれんの梯子する

バーゲンの品とは見えぬ良いセンス

酷暑去りホッとひと息赤トンボ

半熟のままに終った夏の恋

縄のれん潜るとボクの小宇宙

サンタさんに残暑見舞いを出す五歳

敬老の日の肩もみが疼き出す

バーゲンに出してもわたしもう売れぬ

年金があるから尊敬されている

縄のれんくぐるるとほっとする世界

逆風に向かい笑って生きている

靴下を履かせてもらおう仲となり

卒寿でも趣味に生きがまだふやす

医者者らしい言っておれない歳になり

鳩だつて日陰で休む猛暑日は

あの歳でまだ足し算で生きてはる

靴下は顔にも履けます銀行で

感謝され感謝する日に戻りたい

台所のれんくぐると母の城

夕焼けが今日のドラマの幕を引く

敬老日元気な日々を感謝する

尚世

三郎

郁夫

敬

麗

美智子

栄二

一風

洋

祥昭

惟圭

博泉

朝子

弘一

修

賢子

忠央

美江

かすみ

さち子

鈍甲

銀杏

義広

恵子

頂留子

ルイ子

句会名	日時と題	会場と投句先
ほたる川柳同好会	14日(火)午後1時半締切 輪・参る・貸す	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
和歌山幸会 三川柳会	18日(土)午後1時から 黒・へそくり・怪しい	和歌山商工会議所4階 第2会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
岸和田会 川柳会	18日(土)午後2時締切 すべり・たくす・手ぬるい トンネル	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳会 ねやがわ	19日(日)午後1時半締切 抱負・プレッシャー・煩惱 自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳会 藤井寺	19日(日)午後2時締切 マーケット・優勝	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	19日(日)午後1時半締切 狂う・ムード・あなた	淡輪17区集会所 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中もくせい 川柳会	20日(月)午後1時40分締切 力む・しがらみ・はっと 自由吟	豊中市中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
南大阪会 川柳会	20日(月)午後1時から チャンネル・だます・漢字 雑詠	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松露会 川柳会	20日(月)午後7時半締切 師走・アルバム・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口1757-3 小西雄々
川柳会 さんだ	21日(火)午後1時から 二次会・予感・隅・ぶやく 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳クラブ わたの花	24日(金)午前9時半から ゴール・心・人生・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0834 八尾市萱振町1-16-1-501 田邊浩三
川柳塔 すみよし	休 会	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
はびきの 市民会 川柳会	26日(日)午後2時締切 年末・頑固・ツアー・未完	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京塔の 都会	27日(月)午後1時開場 〇〇にくい(難)・見つける 暖味	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

## 12月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 なら	2日(木)午後1時開場 急ぐ・膳・有終	奈良市立中部公民館4F 近鉄奈良駅④番出口 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北 川柳会	4日(土)午後1時開場 気取る・借金・マーク・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	4日(土)午後1時から 町・飾る・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL.0721-25-0603 池 森子
倉吉 川柳会	4日(土)午後2時締切 火・外れる・緊張	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川柳会	5日(日)午後2時締切 期待・鐘・伸びる・雑詠	八尾神社内 西郷会館 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 さかい	10日(金)午後1時から それぞれ・驚く 「まつき(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
あかつき 川柳会	10日(金)午後2時締切 唯一・夜・憎む・時事吟	ねむかホール(新谷町第2ビル3階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から南へ2分 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	11日(土)午後2時締切 配る・道・記憶	長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 まつえ	11日(土)午後2時締切 手帳・買物・惜しむ・ラッキー	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川柳塔 みちのく	11日(土)午後5時締切 友情・隙間・ふっくら	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉宮宮元53-1 小寺花峯
川柳塔 打吹	11日(土)午後1時から 板・雑音・叶う	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔 わかやま 吟社	12日(日)午後1時開会 はるばる・限り・挽回・返事	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪
川柳 ふうもん 吟社	第29回鳥取県没句川柳養大会 12日(日)午前9時受付 開場 死に神・ギャンプル・親分・友よ その時・点火・げっそり	新日本海新聞社 5F 大ホール 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原美雪
西宮北口 川柳会	13日(月)午後1時開場 手袋・辻・ひやり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
川柳 あまがさき	14日(火)午後2時締切 美人・階段・びったり・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治

# 柳界展望

★第54回愛媛夏の川柳大会は、8月1日大洲市社会教育センターで172名の参加を得て開催。同人の天位

本物は眠ったままの貸金庫 宮尾みのり

★第7回美と川柳「観月の夕べ」は9月22日、兵庫県立美術館で開催。参加者63名。本社同人の秀句。

兵庫県川柳協会賞

鬼と思つて下さいと書く手紙 太田扶美代

★川柳塔わかやま吟社創立四十周年記念誌上川柳大会の同人の秀句は次の通り。参加者164名。

夢中で生きたリングの唄が流れた 太田扶美代  
普天間の空を逆流する平和 梶谷 和郎  
ロボットの目から流れている油 三宅 保州

朝の駅紺の背広は皺がない

い 山本 義子

朝の陽とあなたのため  
の魚二枚 斉尾くにこ  
財産はないがしつかり影  
はある 新家 完司  
これ以上捻ると笑い出す  
右脳 堀 富美子

★第28回東北川柳連盟川柳大会、第75回秋田県川柳大会合同川柳大会に於て、高瀬霜石さんは「宮城県川柳連盟賞」と「東北川柳連盟大賞」を受賞。同時に総合第一位に輝いた。

残留孤児は戦車の音を聞き分ける

★9月26日、第43回吹田市民川柳大会は吹田メイシアターで開催。参加者135名。同人の秀句は次の通り。

お互いにかげらと知つてからの友 峯村 勲弘

★第34回鳥取県川柳大会は10月3日、上井公民館で開催。本社同人の成績。

鳥取県知事賞  
失った若さを書棚から探す 新家 完司

新日本海新聞社賞  
くよくよせずにつつも心に奮抱く 佐伯 やえ

日満賞

一呼吸おけば言葉の角がとれ 岸本 孝子  
★第60回岸和田市民川柳大会は10月17日、市立浪切ホールで開催。同人の天位。

子育ての基本はぎゅつと抱きしめる 西出 楓楽  
六十回たまげまでも笑つて 前 たもつ

★第82回奈良県川柳大会は10月17日、王寺町王子地域交流センターで開催された。参加者150名。同人の天位。

愛と憎それでも花の咲く隙間 安土 理恵

★第61回西宮市民文化祭川柳大会は10月17日西宮市民会館で開催された。参加者128名。同人の秀句。

最高の神のジョークで生きている 鶴田 遠野  
月が浮く誰にも盗られない位置で 両川 無限  
誰にでも優しくなれる嬉しい日 竹山千賀子

★第5回和歌山観月川柳大会の同人の成績は次の通り。

文化協会会長賞  
聞き足りず言い足りぬままする駅 米澤 俣子

文化協会賞

振り向かぬ明日の布石は打つてある 堀 富美子  
月光のシャワーで洗う心の眼 武本 碧

前向きなトンボのように飛んでみる 上地登美代  
いい知らせ聞いてくたさいお月さま 田中 みね

★第3回ごんぎつねの郷全国誌上川柳大会の本社同人の秀句は次の通り。

一対の灯台だった父と母 三宅 保州

★第34回寝屋川市民川柳大会は11月3日、寝屋川市福祉センターで開催。本社同人の秀句。

金婚式だったね風がうなずいた 森 茜  
話合いついて割り箸ボンと割る 西出 楓楽  
糸口が欲しくて小石投げてる 西出 楓楽

恋の手形どちら様にも時効です 吉岡 修

▽同人動向△  
☆小島蘭幸主幹・西出楓楽理事長他多数が11月6日、高野山合祀祭に参列した。(詳細は新年号)

☆日本海新聞の「日本海柳壇」の選者は、10月から鈴木公弘・政岡日枝子・牧野芳光の三氏で一カ月交替の担当になる。

☆河内長野市主催の第56回文化祭川柳展に、公民館クラブ「長柳会」が参加。一日700名を超える観覧者で賑つた。(11月2日、4日)

▽御芳志御礼△

□故住谷石舟さんのご遺族から金一封を拝受しました。  
□三宅保州さん(理事・海南市)から、千号記念大会御祝として金一封を拝受。  
□川柳らくだの会(代表・岸本章章さん)より、千号記念として金一封を拝受。

□西出楓楽理事長から金一封を拝受。  
□工藤進さん(甲吉氏御家族)から御供養として金一封を拝受。

□穴吹寿美子さん(尚士氏夫人)から御供養として金一封を拝受。

尚、お二方とも十一月六日の高野山合祀法要に御参拝された。

□新家完司さん(副主幹・

鳥取県)から、原稿用紙を三千枚寄贈いただきました。

▽出 版△

○「麻生路郎読本」(川柳塔社)編集・柴原道夫さん。A5版・514頁。

○河内天笑川柳句集「星のたわごと」。B5版・208頁。

○川柳とんだばやし・富柳会(池森子会長)は、創立60周年記念として合同句集「風の詩」を出版した。四六版・97頁。

○故早川清生さんの遺句集「よしきり」がご遺族から出版された。(非売品)A5版・162頁。

▽お詫びして訂正△

10月号100頁下段25行目、造花の妙↓造化。

11月号21頁下段4行目、ギブアップ→ギブアップ。91頁上段23行目、先に立った↓先立った。98頁下段14行目、贖作を知って↓贖作と知って。108頁上段16行目、寺井弘一→寺川弘一。

115頁下段15行目、ブライズ研究科↓研究家。126頁下段6行目、桂子↓佳子。

頁上段20行目、青とんぼ↓赤

とんぼ。

▽新誌友紹介△

山鹿市 紹介者

弘前市 紹介者

吹田市 紹介者

堺市 紹介者

豊中市 紹介者

鳥取市 紹介者

安達 和彦

坂上 淳司

福見 則彦

入江 晴子

石橋 優明

山岡 紀子

特別常任理事会 11月26日(火)、出席22名①千号記念大会の反省②22年度担当業務分担について③新年度理事の招集④定例確認事項⑤各部報告事項⑥その他。

常任理事会 11月5日(火)、出席者21名①千号記念大会収支報告②新任理事の業務分担③本社句会(4、9月)開始・終了時間について④定例確認事項⑤各部報告事項⑥その他

次回 12月7日(火) 午前10時。

平成23年度業務分担表

常 任 理 事	
総務部	水野 黒兎 黒田 能子 村上 玄也
企画事業部	村上 直樹 柿花 和夫 久保田千代 佐々木満作
編集部	木本 朱夏 黒田 能子 山岡富美子 山口 光久
句会部	長浜 美籠 居谷真理子 古今堂蕉子
同人誌友部	鶴田 遠野 河内 月子
渉外部	坊農 柳弘 河内 月子 松原 寿子
会計部	山口 光久 松原 寿子
発送部	鴨谷瑠美子 佐々木満作
事務部	山岡富美子

◎太字は部長(部長以外は50音順)

○アンダーラインは新任者

平成22年11月現在

平成二十二年初歩教室年間賞

高層に住んで遠退く人の声

風呂トイレ行って来ますとメール入れ

振り返る道にチャンスの枯れた跡

坂部かずみ

梶原 弘光

石田 隆彦

### 第33回 井笠川柳会誌上大会

#### 薬 ひこばえ

課題と選者

「馬」

「沈む」

村上 水筆

渡邊 稻佐嶽

久保田 半蔵門

小島 蘭幸

久保 青花

西原 知里

以上各3選者による共選

応募方法 各題2句計4句(指定用紙か便箋) 干番号、住所、氏名、柳名、電

話、柳社明記。投句料1000円。

12月25日締切(当日消印有効)

投句先 〒714-0008 1

笠岡市笠岡2289

井笠川柳会

TEL・FAX 0865-62-6200

i-senryu@mx1.kev.ne.jp

メール投句でできます

賞品 天位獲得者から総合成績勸案、

各課題1名に句碑贈呈 3才に

賞品呈

以上年間賞対象

主催 井笠川柳会(日川協加盟)

### 第31回ときせん賞作品募集

作品 雑詠2句(未発表作品)

選者

大野 風柳 森中恵美子  
河内 天笑 赤井 花城  
平山 繁夫

応募締切

平成23年1月21日(金)

選句方法

無記名清記の上、選句1句毎にその合計点(平抜2点、五

客3点、三才4点)で順位を

きめます。

発表

時の川柳誌 平成23年4月号誌上

賞

ときせん賞1名・準ときせん

賞2名・佳作7名。平成23年

5月15日(日)時の川柳交歓

川柳大会で表彰します。

応募方法

便箋大(B5サイズ)用紙に

作品2句、郵便番号、住所、

氏名、電話番号及び所属柳社

を明記して下さい。誌友、誌友

外の区別を記入してください。

応募料

1000円(定額小為替)

応募先

切手はご遠慮ください。

〒675-0001 9

加古川市野口町水足1160

岡田 篤 宛

時の川柳社

### 「怒り」の川柳コンクール

#### 2010 応募要項

○テーマ「身近な怒りがテーマ」

○お一人何句でも応募できます

○締切 平成23年1月31日

○応募方法

実行委員会の指定する「怒りの絵馬」

でご応募ください。

「怒りの絵馬」は赤穂市内の観光施

設、旅館ホテル、土産物店で販売し

ています。

○絵馬代「1枚」400円(税込み)

お得な「2枚セット」700円(税込み)

応募用の切手を貼っておりますので

そのままご応募できます。

○審査員 木津川 計・大西 泰世 他

○お問い合わせ先(主催者)

〒678-0239 兵庫県赤穂市加

里屋68-9 赤穂商工会議所内

身近な「怒り」の

川柳コンクール実行委員会

電話 079-1143-2727

FAX 079-1145-2101

# 『川柳・明日香』

## 全国誌上川柳大会

課題「記」(読み込み可)  
選者(5名共選)

引木 詠二(札幌川柳社・北海道)  
熊谷 岳朗(いわて紫波・岩手)  
渡辺 貞勇(時事作家協会・神奈川県)  
古久保和子(川柳塔社・和歌山)  
古谷龍太郎(くろがね吟社・福岡)

投句 2句 用紙・自由

参加費 1000円

締切 平成23年1月31日(消印有効)

投句先 〒369-1102

埼玉県深谷市瀬山21-9  
てじま方

明日香川柳社

## 全日本川柳鳥取大会記念

### 第11回春はくろぼこ川柳大会

とき 平成23年4月3日(日)

午前10時開場

ところ 新日本海新聞社中部本社ホール

(TEL 0858-21-2880)

(JR山陰線「特急スーパードライ」  
倉吉駅下車、徒歩15分タクシードライ)

題と選者 席題なし・各題2句まで

締切 午前11時30分

欠席投句 (3月20日消印有効、用紙自由・  
委員会清記)

「さまよう」

山松みち子選(倉吉)

「背(せ)」 前田 孝子選(鳥取)

「豆 腐」 山本 鐘馗選(鳥取)

「まるめる」 吉道航太郎選(貝塚)

「味」 矢沢 和女選(神戸)

「気まぐれ」 天根 夢草選(茨木)

「城」 河内 天笑選(堺)

会費 3000円(昼食弁当 掲載誌呈)

欠席投句料 1000円(定額小為替 掲載誌呈)

懇親会 会費2000円(午後4時30分終了予定)

欠席投句先および問合せ先

鈴木公弘 〒689-0343 鳥取市気高町飯里84-4

TEL & FAX 0857-184-2886

主催 春はくろぼこ川柳大会実行委員会

## 番傘わかさ川柳会創立65周年記念

### 全国川柳大会

― 田中新一集「生きる」発刊 ―

日時 平成23年5月3日(祝) 11時開場

会場 フェイセズゲストハウス月華殿

JR環状線寺田町下車北口歩7分

〒543-0004

大阪市天王寺区寺田町1-7-7

清興 「落語」露の吉次 露の団姫

事前投句「生きる」 田中 新一選

所定用紙又ははがきにて3月20日必着

宿題 「煌めく」 赤井 花城選

「ふわり」 赤松ますみ選

「書く」 住田英比古選

「好き」 奈倉 楽甫選

「テスト」 西出 楓楽選

「時間」 森中恵美子選

出句締め切り 12時

事前投句、宿題共 各題1句

会費 3000円

懇親会 7000円

連絡先 藤原 一志

〒631-0024 奈良市百楽園2-14-17

TEL & FAX 0742-145-2537

主催 番傘わかさ川柳会

# 編集後記

★一枚になれば銀杏の葉の  
形 薫風

★「小島蘭幸新主幹に聞く」  
はいかがでしたか。好きなものはロックに高倉健、タモリに紫陽花。春風を思わせる外見からは、想像できない蘭幸さんの素顔をかいま見たように思います。

★番傘編集長の菱木誠さんから「新体制の川柳塔社に期待」とお便りを頂いた。「もともと岸本水府も麻生路郎も、同時代を熱く生きたライバルです。これから大阪を代表する川柳結社として、手を携えて前進したいと思います」とエールが温かい。  
★また北見のオホーツク月号に辻晚穂主幹は「不二田一三夫さんの編集長としての気配りと、冴えに注目していた」と書かれています。

「番傘」十月号巻頭言に篠野いさむ主幹は「川柳塔の秋」華やかな川柳史」と題して、九月号の天笑前主幹の巻頭言、「オンリーワンへの道」に触れ、「川柳塔をよく読んだ頃、不二田一三夫編集長の手腕と感覚の編集後記に魅力があった」と、川柳塔の歴史を語る。

★不二田一三夫さんは西の三大編集長のお一人であったと、九月号に前田美巳代さんが思い出を綴られている。不二田編集長を抜きにして川柳塔の歴史を語ることはできない。その由緒ある川柳塔誌の編集人として、七月号から六冊発行したが相変わらず誤植との闘いが続く。ご迷惑をおかけした方々に改めて心からお詫びを申し上げます。  
★相談役の宮口笛生さんが亡くなられた。「川柳雑誌」時代を知る数少ないお一人

## ひとこと

### 残すもの 残さぬものの儚さよ

指折り数えて見ると私も、父が病に倒れた齢に近づいて来た。人生五十年と言ったのは昔のことであるが、友が逝き、義兄が逝ったのも、過去のことになってしまっている。

「死ぬ時には死ぬのがよろしく

候」と言ったのは良寛であるが、私のような凡人にはそこまで、達観することも出来そうにない。

ただ生まれてよかったと同意語において、川柳を残せたのではないかと、と思うとき、やらない人よりも川柳をしていてよかった、としみじみと思う秋である。

(波多野五楽庵)

である。四月に亡くなられた久米奈良子さんも「川柳雑誌」に路郎師・薫風先生とご一緒に写真が掲載されている。「水煙抄」の題字は奈良子さんの書。こうして「川柳雑誌」の証人が消えて行くことは歴史の必然としても寂しい。謹んでご冥福をお祈りします。(朱)

□詩人星野富弘は「大切さを感じる」と思っている。美しさを思う、しくないので」と彼女は携帯で検索、「大丈夫行きますよ」と素早い。通話以外はメールだけという私の携帯とは違っているのである。

□「親切に感謝しつつも、IT時代の現役との大きな隔たりを感じて、ほろ苦い。□せて作句で脳の錆を取るとも真正面から向かい合

# 川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(2月号)

地名

都府道市  
都道市  
県市  
姓雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



# 檸檬抄投句用紙

「極める」 (12月15日締切)

2月号発表

山本希久子 選 — 共選 — 三宅 保州 選

B A

--	--

地名
市都 道府
姓雅号

B A

--	--

地名
市都 道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



## 作品募集

2月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選  
 水煙抄 (8句) 西出楓楽選  
 愛染帖 (3句) 新家完司選  
 檸檬抄「極める」 (2句) 三宅保州共選  
 山本希久子選

一路集 (3句) 「太い」 鈴木公弘選  
 「豆腐」 安芸田泰子選  
 「リスト」 鈴木いさお選

初歩教室 「影」 (3句) 鈴木公弘担当

3月号

檸檬抄 「セット」  
 一路集 「偶然」「淡い」  
 「そわそわ」  
 初歩教室 「ゆるい」

## 本社12月句会

とき 12月7日(火) 13時開場・14時締切  
 開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。

ところ アウィーナ大阪 4階 金剛  
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441

おはなし 「私の川柳人生」

兼題 「家計簿」 宮崎シマ子選  
 「声」 吉岡修選  
 「テーマ」 谷口義選  
 「街角」 北村賢子選  
 「怠る」 村上直樹選  
 小島蘭幸選 (各題2句以内)

会費 1000円 投句料 500円(切手可)

本社1月句会  
 7日(金) 午後13時から  
 兼題 「冗談」「マドンナ」「嘘」  
 「騒ぐ」「突然」

## 第29年度 夜市川柳募集

第7回「稼ぐ」福本英子選  
 ハガキに3句 12月末日締切  
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円 (送料84円)  
 半年分 五千円 (送料共)  
 一年分 九千八百円 (同)

二〇一〇年(平成二十二年)十一月一日発行

発行人 小島和幸  
 編集人 木本朱夏  
 印刷所 美研アーツ

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七  
 花野ビル201号室

発行所 川柳塔社  
 電話(〇六)七九三三九〇番  
 振替〇〇九八〇一四二九八四七九番

## 「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
  - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

# 川柳募集

「ごま」にまつわる  
あなたならではの

一句を募集します。

兼題

「ごま」川柳塔社主幹 小島蘭幸 選

応募要領 郵便八ガキに2句、郵便番号、住所、

氏名、電話番号を明記してください。

入選2句、準特選2句、特選1句に賞品。

発表

本紙4月号にて発表いたします。

締切り

2011年1月31日(当日消印有効)

投句先

〒543-0052 大阪市天王寺区

大道1丁目14番17号 花野ビル201号室

川柳塔社 ゴマ川柳係 宛

オニザキの

手作りの味わいに  
こだわり続けて  
五十余年

つぎごま



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ  
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎0120-30-5050

医療法人社団

## 湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) **6771-4861**(代)